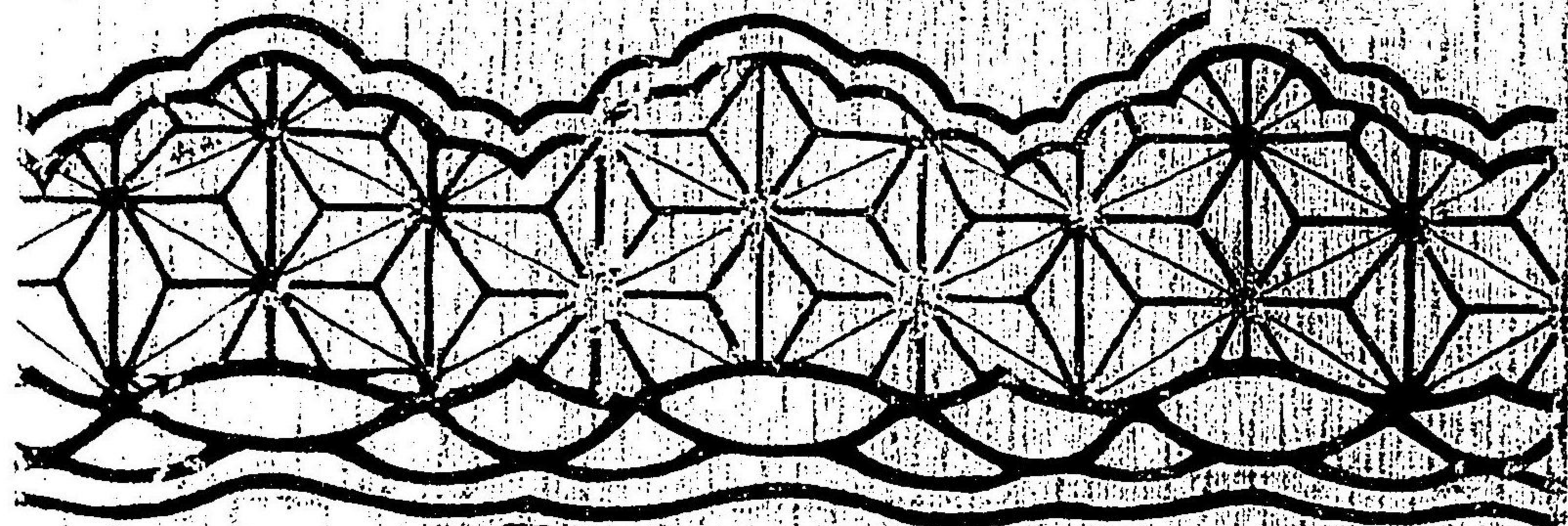


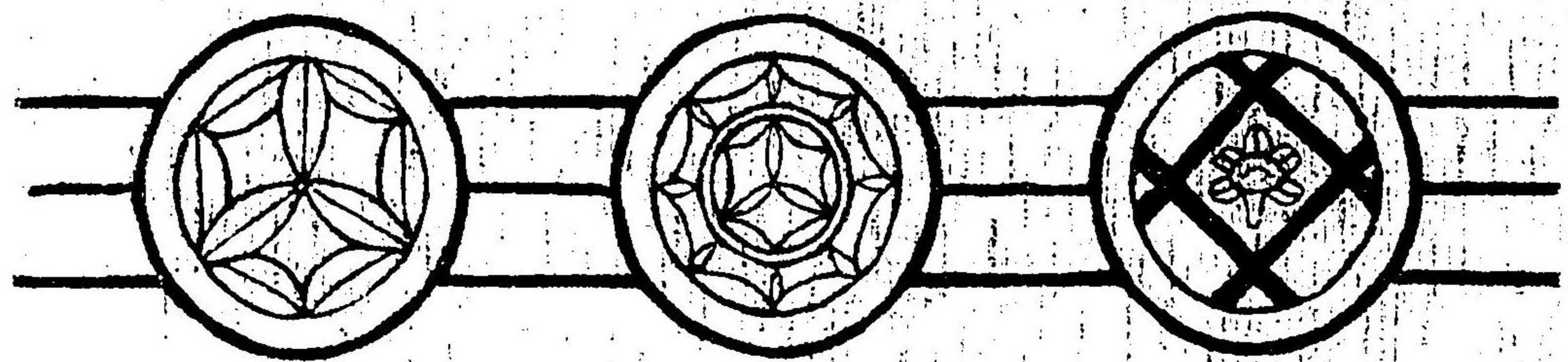
912.4

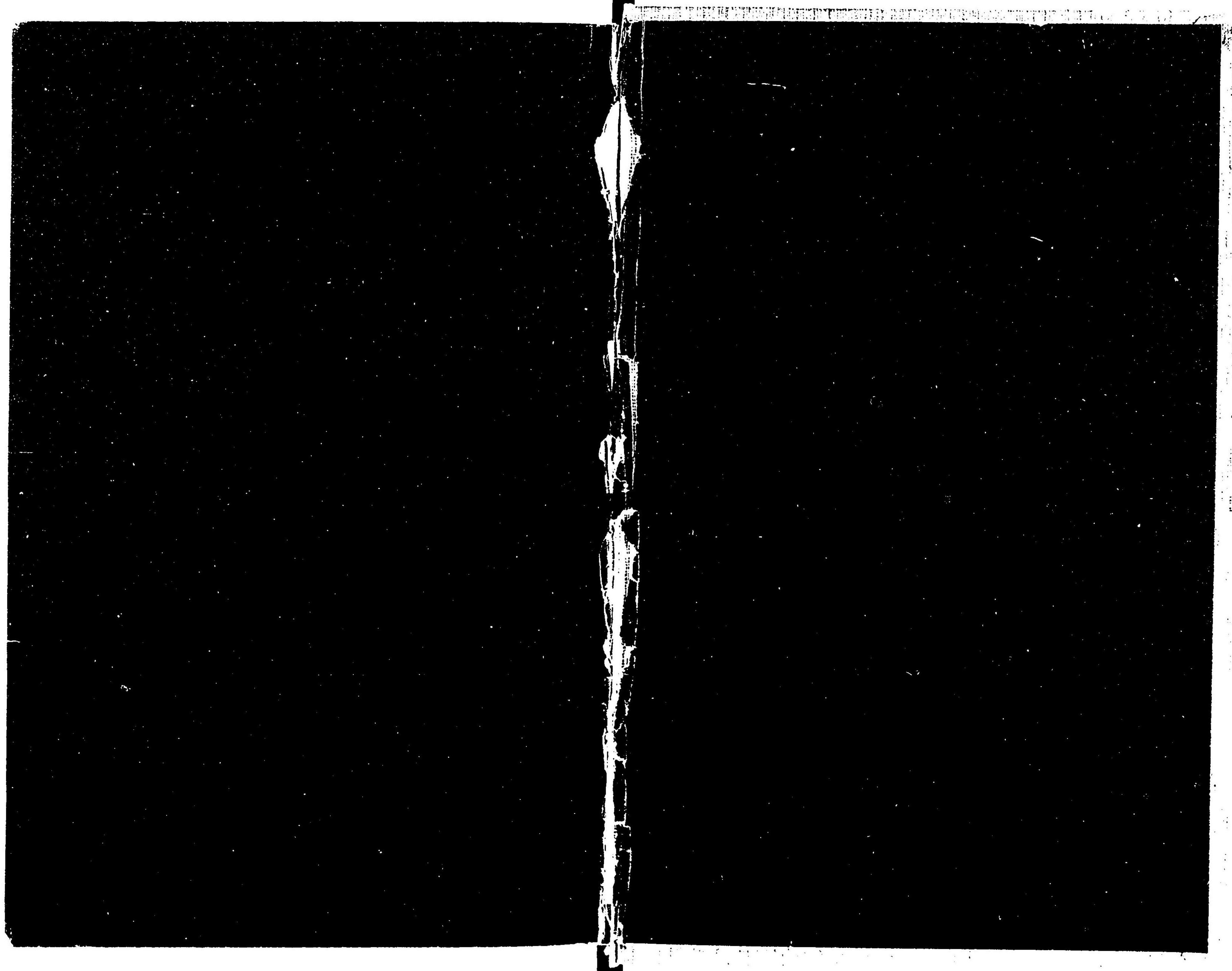
Ti 238 t2

M



五卷





文學博士坪内逍遙序
三水口薇陽校訂
近松全集 上卷

東京 園屋藏版

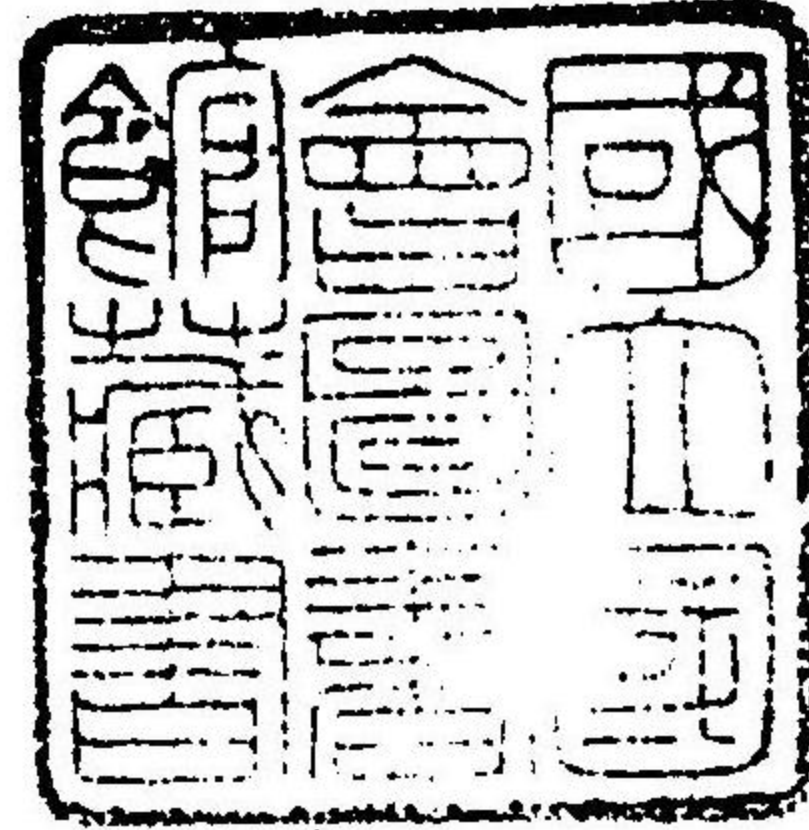
912.4 Ti 238 t2M

近松全集序

巢林子が作は明かに一種の樂劇の脚本なり、其の關係する所文學の上のみにあらざれば、之れを保存し批判するの法も他の稗史小説とひとしなみにすべくもあらず、然るに在來の翻刻は皆こゝに用意を缺き、研究者批評家も此の理を等閑に附したるが多し、さるは謠曲文を評するに一へに修辭の上よりし、ワグネルを論ずるに樂の方面を遺却したるに類し、彼の天才が殊功の一半を没し去るに幾からずや、こゝに園屋書店、斯道に造詣深き三木、水口兩君に乞うて前刊諸集の誤謬を正し、遺漏を補ひ、文と樂との相關にも注意し、卷を重ねて

序

一



337445

完全なる近松全集を出さんとする、校訂の精到なるは更にも言はじ、印刷其の他體裁のうるはしき甚だ喜ぶべし、予は此の書の將來の新文藝に資する所在來諸版の比にあらざるべきを信す

三十九年一月

道 遙

緒言

近松の淨瑠璃は既に屢ば翻刻せられ、其數約八十種を過ぎたれども、未だその全部を悉さず。書肆園屋依てこれが全集發行を企圖し、余等にその完成並に校訂を乞ふ。さはれ未だ世に翻刻せられざるものゝ多くは、孰れも得易からざるの珍本にして、偶まこれあるも、井上、山本、宇治等に與へしものは、都て作者の署名なきを以て、その鑑定に苦むのみならず、名のみ存して、實なきもの亦尠からざるを以て、確實に近松淨瑠璃全部の範圍を斷定せん事は容易の業にあらず。幸に余等は平素近松を愛讀し、彼が著作と知られたるものゝ大方をば藏し、無署名の古淨瑠璃中にも、近松の著作なりと、斷定し能ふものなきにあらざるを以て、遂に依囑に應じて、茲に近松全集を公にする事となりぬ。

本集は従來の翻刻と異りて、特に淨瑠璃の曲譜を傍註せり。元來近松の著作は、竹本は勿論、井上、山本、宇治諸流の大夫に語りしめんが爲に作りたるものなれば、編者も亦深くこの点に意を注ぎ、院本中なる一切の符號を、活字によりてなし能ふ限り保存し、當時に於ける俗曲研究の一助たらしめん事を期せり。これ蓋し我俗曲の大半は、竹本、宇治、井上等に關聯し、詞章の多くも、また近松の著作に負ふ所尠からざるを以て、一は俗曲の系統を知らしめ、一は詞章の出所を明にせんと欲したるに外ならず。文辭の校訂、曲譜符號の範圍等に就ては、凡て例言に於て詳説したれば、本文に先ちて一讀せられんことを望む。

校訂は従來の翻刻本を閲するに、淨瑠璃一種中誤植誤字の箇所五六十に及び、甚しきは一行を脱し若くは重ねたるごころさへ

ありて、殆ど文意の通じ難きもの少からず。斯の如きものに比すれば、今回の校訂は、充分の注意を拂ひたる事を自信すれども、活字取扱の上に就て、必ずしも誤植なきを保せず。製本出來の上にて心附きたるものあらば、中卷に於て正誤すべし。校正に就ては、鈴木春浦、高木翠烟、渡邊斬鬼三氏が、終始助力を與へられたるを謝す。

明治三十九年一月

校訂者識

例言

一、配列の順序

本集の配列は著作年代の順序によるを旨とすれども、書肆の需に依りて、未刊本を上中下三卷に分載することゝなしたるため、配列の順序も各卷の内容にて定めざるを得ざるに至れり。順序は専ら古今淨瑠璃年代記、外題年鑑、聲曲類纂等を参考に供したれども、井上宇治等の古淨瑠璃には異名同作ありて、容易に前後を判じ難き、或は竹本淨瑠璃中にも舊作の改削と推せらるゝもあれど、原本と對照するを得ざるものは、竹本座興行の年月に従ひたり、「一心五戒魂」の如きはその一例なり。尙豫告に違ひて「源氏十二段」を省きしは、新に異本を發見したるためにて、或は中卷に於て同名異種の二本を公にすべく、その補缺として「一心五戒魂」を載することゝせり。また「盛久」と「主馬判官盛久」を併せ載せたるは、近松が文辭訂正の痕を窺はしめむとの心にて、比較的訂正多き第一段のみを掲げたり。

二、文辭訂正の範圍

院本の文辭は一種の特色を有して、他の國文と同一視し能はざるものあり、文法、使

用文字、字音及び假名遣ひ等殊に然りとす。左に此等に對する校正の範圍を略叙すべし。

(一) 文法

嚴密なる文法上の批判を下せば過誤と認むべきものあれども、音曲との約束によりて然るものもあるべく、既に破格の文體として文學史上の特色となれるを以て訂正せず。

(二) 使用文字

使用文字には特色極めて多く、原本に通せざる人は容易に判断し能はざるものあり、一は文字の音または訓を假借して全く意を顧ざるもの、二は字意に傾きて正體を缺く所謂あて字なるものなり。例へば、夫をつまじ訓する場合は凡て妻の文字を使用し、夫を妻、夫狐を妻狐となせり。かくては文意疎通せざるのみならず、却て意を逆にし、或は文調を窺ふ能はざるもの等には訂正を加へたり。

(三) 字音及び假名遣ひ

字音の正確ならざるものは枚擧するに遑あらず、まゝ太夫の口癖、方言等の混入せるものもあちんが音調の必要より生じたるもの多ければ、悉く原本の儘を存す。例

へば、勇氣をようき、孝養をけうよう、ごうと落てけりをごうご、落てげりとする如き。殆んど普通となれり。中には固有名詞さへ發音を異にするものあり、與謝をよざとすることが如し。

假名遣ひは習慣を其儘踏襲したるらしく、文意を損せざる限りは訂正せず。

(四) 三、節符の附號

緒言に云へる如く、本集はなるべく原本の節符を保存すべく試み、たれども、活字にては到底表示し難きものあり、まして竹本のみにも數十の符號を要するを以て、全文を木板に彫刻すること、原本の如くならざれば完全なる能はずと雖も、曲譜の大體を窺ふ程にもと、活字によりてなし能ふだけを保存することとせり。

(一) 句讀

本集の句讀は原本によりて、從來の刊本とは甚しく符號の位置を異にせり。こは讀むと語るとの差違より生じたるなり。例へば

爰をさ。い。期と三重。ちりの。あくた。の身をすれば

等の如し、節こまかなる道行などに多し。

等の如きは活字にては伸縮自在ならざるため本文より傍註の方伸びたるものあり。或は原本に

と二行に記入せるものをも一行となさざるを得ざるを以て位置に多少の變動な

しとせず、讀者心して前後を察せられよ。

附言 本集に挿入せる外題 **戒鬼** または **戒鬼** の如

き木版は、参考に使へんため、凡て引用せし原本の文字を縮寫せるものなり。

表紙は書伯久保田米齋氏の意匠に成れるものにて、背の丸に一の字つなぎは近

松の紋を崩し、文字は原本中の文字を一々寫取したるものなり。表紙松形の麻の葉

は古淨瑠璃本の表紙の模様殆んど麻の葉に一定せるを以て近松の松に配し、下は

中に竹本、右に井上、左に宇治の紋所を三筋の絲にて結べるものなり。

近松全集上巻目次

- 天 鼓
- 根 元 曾 我
- 一 心 五 戒 魂
- 門 出 八 島
- 凱 陣 八 島
- 盛 久
- 主 馬 判 官 盛 久
- 世 繼 曾 我
- 出 世 景 清
- 佐 々 木 大 鑑

源氏冷泉節

天智天皇

日本西王母

松風村雨束帶鑑

釋迦如來誕生會

鎌田兵衛名所盃

賴朝伊豆日記

百日會我

當流小栗判官

源氏烏帽子折

浦島年代記

長町女腹切

淀鯉出世瀧德

蟬丸

大掛物十幅一對

曾我五人兄弟

大磯虎稚物語

加古教信七墓巡

最明寺殿百人上臈

註
解
の
由
來
の
事
は
新
玉
の
年
立
返
る
御
祝
儀
に
於
て
萬
歳
樂
を
奏
せ
ら
れ
し
に
、
葎
の
親
王
御
威
光
を
仰
ぎ
て
、
時
景
は
、
故
三
位
富
士
丸
が
家
の
秘
曲
な
る
を
、
彼
の
死
後
澤
瀉
と
い
ふ
娘
一
人
の
み
な
れ
ば
、
家
臣
智
略
之
介
武
畧
之
介
兩
名
に
つ
こ
め
さ
せ
し
と
申
上
げ
、
こ
ゝ
に
兩
名
「
まんざい
」
の
一
段
を
挿
め
り
、
葎
の
親
王
は
澤
瀉
の
才
色
比
な
き
を
聞
き
給
ひ
て
宮
仕
せ
さ
せ
、
家
の
重
寶
天
鼓
と
名
づ
け
し
鼓
を
も
差
上
ぐ
べ
し
と
仰
せ
け
れ
ば
、
時
景
夫
妻
姪
な
る
娘
の
立
身
を
嫉
み
、
己
が
娘
夕
映
を
代
ら
し
め
ん
と
思
へ
ど
も
、
天
鼓
な
き
に
困
じ
、
悴
宇
治
太
郎
に
談
合
の
折
柄
か
ね
て
澤
瀉
と
夫
婦
の
契
約
あ
る
吳
服
の
中
將
雪
枝
の
家
臣
巴
丸
と
云
者
鳥
追
に
身
を
賣
し
、
太
見
の
館
に
忍
び
て
、
娘
を
奪
は
ん
と
す
る
を
見
出
さ
れ
、
狐
を
釣
て
天
鼓
の
腹
を
拵
へ
ん
と
約
し
、
二
人
は
館
を
出
で
、
巴
丸
狐
釣
す
る
所
へ
、
時
景
詐
の
計
を
以

解題

天鼓

由來[◎] 井上播磨様の爲に作りしものにて、著作并に興行年月を詳にせざれど、壯年時期の作たること疑なし。

大意[◎] 新玉の年立返る御祝儀に、大内に於て萬歳樂を奏せられしに、葎の親王御威光からず種々御下問あれば、太見縣主時景は、故三位富士丸が家の秘曲なるを、彼の死後澤瀉といふ娘一人のみなれば、家臣智略之介、武畧之介兩名につこめさせしと申上げ、こゝに兩名「まんざい」の一段を挿めり、葎の親王は澤瀉の才色比なきを聞き給ひて宮仕せさせ、家の重寶天鼓と名づけし鼓をも差上ぐべしと仰せければ、時景夫妻姪なる娘の立身を嫉み、己が娘夕映を代らしめんと思へども、天鼓なきに困じ、悴宇治太郎に談合の折柄かねて澤瀉と夫婦の契約ある吳服の中將雪枝の家臣巴丸と云者鳥追に身を賣し、太見の館に忍びて、娘を奪はんとするを見出され、狐を釣て天鼓の腹を拵へんと約し、二人は館を出で、巴丸狐釣する所へ、時景詐の計を以

て天鼓を奪はんとし、智略武畧兄弟の來るに逢ふて果さず、逃行くまでを初段とす。第二段は、吳服の中將雪枝の弟小六郎雪長笛を吹きつゝ、京をあるき、ゆくりなく時景の娘夕映に思はれて、夫婦の契を約し、始めて時景夫妻の奸計を知り、雪枝、澤瀉の行方を尋ねんと、二人手を取りて忍び出で、澤瀉の隠れ居る松垣方を尋ね、廻合ひしに、松垣夫婦はかほるゝ狐つきとなりて、姫の所持する天鼓を奪はんと、既に危き所へ、山路判官梅豊といふ者駈付けて三人を救ひ、小六は姫、夕映を伴いて兄雪枝の在所を尋ね出づ。第三段は、中將雪枝、巴丸の兄金目丸といふ阿呆に、己自害して果ければ、心残りなく大内に宮仕せよとの偽りの遺言を澤瀉へ傳へしめしに、事願はれ、姫は雪枝こそ大内第一の美人陸奥の内侍との過ぎにし契忘られず、身にあき風の立ちしと、嫉妬の一念雪枝の跡を追ふ。雪枝は彷徨つゝある中圖らずも陸奥の内侍の閑居に忍び、越し方の戀の物語しつゝある所へ、澤瀉追來りしを、陸奥雪枝を隠して逢はせず、一念内侍にうつることあり、爰へ宇治太郎姫を尋ね來り、姫の氣を失へるを見て、雪枝あるを知り、搦め取んとするを、内侍の氣轉によりて中將難を免かれ、落延たる後にて、姫、内侍名乗り合ひて、互に心打解く。第四段は、雪枝の跡を慕ふおもだか、姫の道行に始り、智略武略兄弟渡し場にて、天鼓に張りし狐の子狐より、堺の善

提寺に澤瀉姫の隠れ居ること、時景父子天鼓を奪はんと、既に其處へ追行しとを告げられ後を追ふ。時景父子は多くの従卒と共に寺に亂入し、あはや天鼓を手に入れんとせし時、子狐の爲に妨げられ、斬殺せしが、狐の首飛んで時景の咽喉に喰付きしも、宇治太郎天鼓を奪ひ去る。第五段は、時景父子葦の親王に天鼓を奉り、夕映に宮仕させんと言上すれど、親王許し給はず、折しも丹波の國に千年劫經たる老狐、即ち時景に殺されし子狐の親狐來りて、時景父子の陰謀を發きて殺せし時しも、狐の眷族共に誘はれて一同歸參し、雪枝は勅勘御免あり、本領安堵の上澤瀉姫を娶る。此一編は澤瀉姫といふ妙齡の孤女を主人公とし、雪枝、陸奥の内侍、雪長、夕映はシテツレ、時景父子は、ワキの如し。

備考 刊本は三三文房本一種あり、編者は八行、六十三枚ある原本に據れり。

根元曾我

由來 井上に書與へしものなり、著作年月不詳。

大意 宇都宮朝綱の娘玉照姫侍女みはぎと偽りて、畠山重忠の次男にて、關東小六と稱する、美男小六郎重春に言寄りて、遂に割なき中となるに筆を起し、曾我祐信が

河津の後家を後妻として迎へしを、工藤左衛門祐經不快に思ひ、祝儀に事寄せ、水あびせて耻搔せんと來りしを、朝比奈三郎の才覺にて、却て耻辱を蒙り歸る。宇都宮の館には、今日曾我へ在鎌倉の若殿原、若水參らせに行しと聞き、重春の歸り路を見んものと、玉照姫往來に近き亭に腰元共を集め、待つ間の退屈慰めん、御所勤せし小笹に、殿原のしなさだめ語らすを、をどこぞろへといふ、然るに祐經豫て姫に心を通はし、度々艶書を遣はせしに返事なく、いかゞと案じ煩ひしに、重春を慕ふと知り、戀の仇小六の歸るを荒川の早瀬に待つを初段とす、第二段は重春玉照姫の文により、懸夜に入りて忍びしを、祐經斯と探つて、宇都宮の館に石を打ち、今宵婿入の祝儀なりと呼はる。宇都宮の家人聞咎め、狼籍なりと爭論せしが、家探しせんず勢ひに、重春、姫は露顯を恐れ、館を忍び出づ、時に大和の國の繪師ばんせいといふ者、斯道の妙手なれども立身の道なきより一計を案じ、門弟引連れ、夜半鎌倉八幡宮に隠れて、參詣の人々の面に秘傳の墨を塗り、色の落ざるを落して、世の評判を得んと巧めり、祐經斯とは知らず、重春、玉照姫を追ふて來りしが、郎等共は墨を塗られ、剩へばんせいが書きて奉納せし、曾我祐信が甲冑着たる繪馬の繪抜け出して、祐經以下を懲す、祐經眞實の祐信と思ひ、いよく恨を含むに至る。朝比奈の三郎義秀は、鎌倉中の取沙汰に

て、夜なく八幡宮に、怪しき墨塗あるよしを聞き、正躰見届けんと忍び來て、ばんせい始め門弟共を生捕り歸る。第三段は頼朝平家を滅亡の翌春、大小名を召して新年の嘉儀あり、祐經も席に列りしが、鶴岡に社參の時、曾我祐信夜中甲冑に身を固め、徒黨を集めて密議に及び、怪しき墨塗をなすは、全く反逆を企つるものなりと讒言す。頼朝も祐信、河津の後室を娶り伊東の孫共を、養ふは心得ず、急ぎ一萬箱王を召捕り、由井ヶ濱にて首を刎ねさせよ、太刀取は祐信、檢使祐經と仰せらる。祐經畏り、曾我の館に向ふ。河津の後家は、舅禪門の計にて曾我の再嫁せしも、祐信傍輩の義を重んじて、一度も契を結ばねば、心解ずと、もごかしく思ひ、言寄る術もがなと案じの末、箱王が弄ぶ般若の面をかぶり、祐信を脅しつ口説つ、祐信も河津が亡魂の祟る風を装ふ奇想あり、遂に夫婦のかたらし陸まじき折柄、上使として祐經入來り、一萬箱王を召捕り歸る。後室歎きの餘り、兩人の跡を慕ひ行くを、兄弟の母道行とす。第四段は曾我兄弟の命乞ひとして、諸大名詞をつくして願へども、頼朝聽許せず、千葉之介常胤、島山重忠理を説くも及ばず、由井ヶ濱にていよく、祐信兄弟の首を刎んとす。朝比奈并に重春、玉照姫は、父祐信に危き難を救はれし恩報じとて、兄弟の命乞ひをなさんと、直ちに二人を御前へ曳行く。後の敷皮曾我はこれに胚胎せるものか、第五段は朝

比奈等の命乞ひ聞届けられ、また祐信が八幡宮にての所業は、繪師ばんせいが妙筆の功德なりと分り、御繪所を賜はり、目出度局を結ぶ。

祐信夫婦を主とし、祐經を客として、曾我兄弟、重春夫婦を配劑せるものなり。繪師ばんせいは、浮世又兵衛等の傳説を假來りしものか。

備考 未だ刊本なし。編者は十行、三十五枚にて、竹本筑後様の奥書、本屋仁兵衛板の原本二冊に據れり。此二冊多少時を異にするやうなれども、詳にせず、また井上に與へし書卸の作と、文辭の差異ありや否や明ならず。

一心五戒魂

由來 貞享二年七月十五日より竹本座にて興行、時に作者三十三歳、享保十年六月同座にて興行せる『復たまたま鳥羽戀塚』もこれを改題したるなり。

大意 文覺心の塵を淨めんとて那智の瀧に水行して息絶ゆるや、文覺の胸中より五色の魂閃き出で、四方へ離散するに起り、これより以下は文覺が既往將來を夢みる筋にて、先づ虎若といへる兒出立にてあせち、資方の息女薫姫が繼母に呪はるゝを救ひ、繼母と通せる修験者かくりき坊を殺すが破殺生戒第二段にて虎若が叔

母衣川方より資方の臣早瀬源内の贓品を持出す處に會して、その贓品を掠むる心を生ずるが破偷盜戒第三段にては元服して盛遠となり、渡邊亘の妻袈裟に戀して死に到らしむるが破邪淫戒第四段なる薫姫道行は盛遠と婚禮すべき勅命を蒙り乍ら盛遠に嫌はれて出家せる薫姫の一如尼が鳥羽なる袈裟の墓に詣づる事を叙し、此段にて文覺が亘の一子爲若に逢ひ、父を尋ぬる志の不憫さに亘の名を偽るが破妄語戒第五段にて文覺が大和巡する途すがら猿澤の池に沈みたる采女の妄念の化したる酒賣女に賺されて泥醉するが破飲酒戒に相當し、最後に夢覺むれば、身は那智の瀧壺にありて凍死せるを矜羯羅制吒迦兩童子に救はれ、感涙肝に銘する折柄袈裟御前姿を現して、一生の罪惡を夢中に示して後來を戒むと告ぐるに終る。

備考 刊本は博文館本を初とす。編者が依れるは十一行本にて四十一枚のもの、八行本にて六十一枚のものとの二種にて、第二段以下五戒の名を記せるは八行本に倣ひしなり。

門出八島

由來 井上、宇治共に語り物とすれど、井上の方早かるべし、また土佐本と思はるゝ、

もあり、諸流に於て數度上場せしものならんが、著作與行共に年月詳ならず。
 大意 頼朝平家追討の企を、陸奥秀衡の許にありし義經傳へ聞き、十萬餘騎を引率し、既に出發せんとする折、志田の三郎兄妹に邂逅し、主従の名乗をなし、西國の道しるべせよと仰す。三郎は父の遺言により、再び源氏に仕ふる所存なし、それよりは、出羽佐藤庄司の倅次信、忠信の内一人召連られよとの勸め、佐藤庄司に兄弟の内一人西國の供すべしと命せらる。次男忠信飛立ほごに思へど、兄次信の先んせんことを恐れ、志田の三郎の妹はや姫、兄と夫婦の契あるを知るものから、姫に次信の西國行を止めよと頼む。次信も密に忠信の思ひ人、神職行春の娘幾代に、忠信の發足を止めよと命じ、互に争ふを知りし父庄司は、二人の姫は嫁として手許に置けば、兄弟共御供すべしと許せば、兩人悦び勇む所に、安西の彈正太郎氏繁馳參じ、爰にて兄弟に恨を構ふ。三郎仲裁して皆々目出度出陣す。門出八島の外題は、佐藤兄弟の門出を叙したる此一段に因るなり。第二段は、庄司二人の倅の好みしとて、次信には小櫻織、忠信には藤細目の鎧を、家臣信夫の小太郎兄弟に持せ、八島の陣所に遣はす。小太郎等は、何れ次信、忠信の陣所ならんと、草鞋賣に、濱邊一圓に張詰めたる幔幕の主を問ふ。彼東西南北を指ざして、やくしよづくしを語る。明れば三月十八日、次信は父より賜は

りし鎧着て、能登守が矢先にかゝる。忠信は兄の仇とて、教經の郎等菊王を射殺す。第三段は、忠信兄を尋ねて濱邊をさまよひ、遂にめぐり合ひて、深手なるを義經の御前に昇行く。安西の彈正は豫ての意恨を晴さんと、次信にもあらぬ者を次信と思誤り、首打て日頃の鬱憤を散す。次に義經主従次信に名殘を惜まるゝ最期の愁嘆を叙す。第四段は、兄弟の留守に父庄司二人の凱旋を待兼ねて、庭の手入なごせさせしが、次なる松が枝折れし辻占に胸安からず、夫を尋ねて、はや姫道行あり、遂に鷲尾の庵にて、夫次信の亡靈に逢ふ條は、謠曲の『船辨慶』を轉用す。後討死と聞き、嘆きの中に、彈正來りて志田三郎に殺さる。第五段は、平家追討の後、佐藤一家次信の追善を新黒谷に催し、はや姫、次信の遺子次若參詣す。爰に熊谷蓮生坊を點出し、志田と悟道について問答をなす。志田遂に出家して、次信等の菩提を吊ふ。
 備考 刊本は博文館本あれど、虫喰の爲缺文あり、編者の引用本は、十行、二十一枚、十行、二十五枚、十行、二十九枚本の三種にて、共に卷頭に大夫直之正本と記す。

凱陣 八島

由來 加賀淨瑠璃の中に此名あり、井原西鶴の作と外題年鑑に記せど、引用本には

近松門左衛門作とあり、著作年月を知らず。

大意 義経兄頼朝の憎を蒙り、何時如何なる咎あらんかと、辨慶の發意にて主從態を變へ、勸進して猶も様子を探りしが、義経は神樂岡の邊に雨宿して、思はずも姉妹の娘に思はれ、妹姫を連歸り、色香に溺るゝを都落の發端とす。第二段は頼朝梶原の讒言にて義経追討と決し、北條時政都に發足す。義経主從十二人作り山伏となり、北國に下らんとせしが、北の方の嘆深ければ、辨慶痛はしとて兒の妻となし、十三人部を落ちるよしつね道行あり、加賀の國安宅の關に至りしに、關守富樫の左衛門固めたり、辨慶南都東大寺勸進の僧と偽り、勸進帳を讀む條は謠曲「安宅」にて長唄「勸進帳」と殆んど差異なし。第三段は、陸奥へ下る途中、出羽の佐藤が館に入り、繼信、忠信が老母の攝待を受く。老母義経主從と知り、繼信、忠信が最期を語り出で、八島の軍物語をなす一段、また謠曲「攝待」を取れり。第四段は、陸奥秀衡の館に入り、乙の姫千草の前を戀ひ、忍行く條に辨慶の可笑味あり、事顯はれて、北の方の嫉妬に義経困す。第五段は、秀衡の死後、其子等密に頼朝に通じ、義経を討んと計るを、和泉の三郎一人義を重んじ、佐藤庄司の娘にして繼信、忠信等の同胞なる妻と共に館に立籠り、一子を殺して兄弟等に及向ひ、討死して義経の難を救はんとするに終る。

盛久

義経を主人公とすれども、凱陣八島の外題は、第四段佐藤老母が八島物語の條を眼目として命名したるものならん。
備考 博文館本あり、編者の引用本は十行、三十枚開巻に近松門左衛門作と明記し、表紙に太夫直傳、終に鶴屋喜右衛門板元とあり。

由來 外題年鑑宇治淨瑠璃の部に「主馬判官盛久」あれど、「盛久」と名くるもの早く、何時の頃にか、少しく訂正して、主馬判官の四字を冠したるなり、参考の爲特に其第一段だけを收めて、文辭訂正の跡を示すことゝなしたり、著作年月不明。
大意 源平一の谷の戦に、平家の侍大將盛久、今は最早期と覺悟せしが、せめて名ばかりなる妻床夜の前と盃して、今生の名残を惜まんと、此處彼處探せども、姿の見えざれば、冥途の道連れ義経と引組んで死んものど、須磨の濱邊にかゝりしが、乘馬流矢に中り、盛久落馬して氣絶しけるを、蟹あけぼのに助けられ、夫婦の誓をなし、またの逢瀬を約して別れし折、人磨塚の邊にて床夜の前源氏の侍小山太郎宗重に挑まれ、危しと見るより盛久出で、妻を救ひ、共に御座船へと心ざすを、堀彌太郎近經、床

夜の前を組敷き首を搔んどせしが、女性と知りて放ちやるを、小山太郎遙に見て、彌太郎こそ敵を助けしは二心なりと呼はる盛久彌太郎の義に感じ、妻の身替りも觀念して生捕となるを第一、段とす。「一の谷嫩軍記」演邊の趣あり、第二段は、土屋三郎堀の依頼により、盛久を鎌倉に曳く道すがら、馬士に扮ちたるあけぼの、忍び姿の床夜の前、共に盛久を慕ひ來りて對面を願へども許されず、此上は彌太郎を殺して、夫の仇を報せんと、一旦は二女先を争ひしが、床夜の前は再生の恩人に及向けられず、自ら彌太郎の寢間に入り、あけぼのに討る、條袈裟御前の最期に似たり、第三段は、小山太郎彌太郎を憎むの餘り、堀土屋こそ平家の餘類と心を合す者なりと讒言し、堀土屋所領を没せらる、爰に都大原の邊に忠度卿の室菊の前、敦盛卿の室と、共に比丘尼となりて在せり、あけぼの其庵室に巡り來、熊谷蓮生坊また來りて、昔物語をなす折しも、小山の郎等亂れ入て、あけぼのを奪ひ去る、第四段は、堀彌太郎勘氣を蒙りて本國丹波に蟄居の中、熊谷に邂逅し、小山太郎讒言の次第を語れば、熊谷御不興を宥めんと、二人の比丘尼を鎌倉に下す、はうしやうがく菊の前道行「これなり、かくて比丘尼等關にかゝりしに、小山の郎等通さず、びくに繪の詞」とて、地獄物語する一節は關所に於ける藝づくしに似たり、いざ通さんといふ中、知る者ありて搦めんと

世繼會我

す、熊谷來蒐りて難を救ひ、共に鎌倉に下る、第五段は、盛久日頃信心なす守本尊清水の觀音の奇特によりて刑を免され、また熊谷の請によりて、堀土屋等は勘氣御免、小山は追放せらるゝに終る、盛久が飼養せし鸚鵡普門品を讃誦し、觀音これに靈驗を現じ給ふことを挿む。

盛久一編の主人なれども、ツレなる床夜の前、張あけぼのの二人却て重きをなせり、備考 開卷盛久、加賀椽正本とある八行、四十八枚本を引用せり、他に未だ刊本なし。

主馬判官盛久

由來 盛久の條に記せし如く、殆んぞ同文にして、筋には變化なし、近松が舊作を添削せし筆加減を示し、二者の文辭を比較せん人の參考にとて、特に第一段のみを掲ぐ。

由來 これもまた宇治淨瑠璃なり、宇治加賀椽は嘉太夫を云ふ、貞享二年二月一日

興行にて、作者當年三十三歳、外題年鑑によるも、作意より考ふるも、根元より後のも

のなるべし。根元は曾我兄弟の生立、世繼は兄弟歿後のとなり。先順序として根元の方を早しとすれども、文辭結構の巧拙により、多少の疑を存す。
 大意 初段は、曾我兄弟工藤の假屋に忍入り、敵祐經を討果せ、五郎は生捕となりて頼朝の前に曳出され、十郎の首級に對面しての愁嘆より、首討るゝを發端とす。御狩はて、鎌倉に歸る前の日、新開荒四郎棟領にて狩場の高名を一々帳に記す内、御所の五郎丸が時宗を生捕りしことまで記せしを、朝比奈の三郎、五郎を禽獸と一つにせしめて大に怒り、荒四郎を詰問す。第二段は、曾我の家人鬼王、團三郎の兩人は、新開荒四郎、御所の五郎丸元服して荒井藤太重宗となりたる二人こそ主人の敵なり、討取れとある朝比奈の意見に従ひ、我こそ敵討んと功を争ひ、終に兄弟の縁を切る。荒四郎、重宗は大磯の廓に通ひ、虎、少將を口説きて耻搔され、立腹しける處へ、鬼王來りて二人を追散し、祐成、時宗の最期を物語る。虎、少將嘆きの末、せめては兄弟の俤なりと忍ばんとて、曾我の閑居に老母を訪ふを、虎、少將道行となす。曾我に至れば、老母は病の床にあり、兄弟の討死を聞せしと、二の宮の姉が才覺にて、祐成、時宗歸りたりと、兩人に烏帽子直垂打着せ、虎、少將十番斬にて兄弟敵討の物語をなさしむ。兄弟討れしと聞き、老母悲嘆し、形見の品々を披露して、祐成の書置を見るに及び、祐若とある

を怪めば、虎の腹に一子あり、祐若といふと始めて知りて呼迎へ、更に嘆きを新にする。第四段は、鬼王兄弟荒井、新開に出逢ひ、互に討んと争ひしが、團三郎が落馬に本意を果さず、鬼王の介抱に兄弟再び和睦し、敵の跡を追ふ。荒四郎、藤太兩人は、頼朝の諍意と偽り、十郎の遺子祐若を出せ、さなくば我等に従へと、虎、少將を脅せしが、まんと二人に誑されて唐櫃の中に隠る。朝比奈來りて、荒井を殺し、新開を召捕て頼朝の前に曳く。第五段は、朝比奈、新開、荒井が罪科の數々を頼朝に言上し、新開は既に首刎ねられるべかりしを、虎の命乞ひにて佛の道に入り、祐若には再び本領を賜はり、十郎、少將の貞節に感じ、古の遊女の様見たしとの懇望にまかせ、數多の遊君を集め、ふらりうの舞の一節に、廓の風俗を歌はしむるを終りとなす。
 備考 武藏屋より出でたる刊本あれど、江戸淨瑠璃の六段物にて、想等しけれど、文辭全く異り、原作の儘なるは本集を以て刊本の嚆矢となす。引用本は八行、五十六枚にて、加賀本なり。

出世景清

由來[◎] 竹本座に入り、義太夫節の爲に書卸せし最初の作なりと傳へらる。これまでは井上宇治の爲に著作せしが、大坂に下りて竹本座を附となりしはこれよりなり。貞享三年二月四日興行、作者三十四歳。

大意[◎] 平家没落の後、悪七兵衛景清は、尾張の國熱田の大宮司の許に忍び、娘をの、姫と夫婦の契淺からざりしが、主家の恨を報せんとの一念止み難く、頼朝南都東大寺の大佛造營あり、鳥山重忠奉行職を承るこそ幸、先重忠を討んと、大宮司父子に暇乞ひ、南都に入り、番匠に紛れて重忠に近寄りしが、見出されて落延びるを初段とす。第二段は、景清都にありし頃、五條坂の遊君阿古屋に通ひ、二人の子までなしたる間なりしかば、暫し身を潜めてありけるに、阿古屋の兄伊庭十藏、景清が在所を訴人し、褒美に預らんと、阿古屋に勸むる折しも、をの、姫よりの消息に、遊女阿古屋の色に溺れ、身につらきことを恨める文意あるを見て、嫉妬の一念押へ難く、兄に同意して訴人をなす。江間の小四郎捕手召連れ、清水寺を圍みしが、景清難を逃れ去る。第三段は、景清の行方知れざれば、所縁の者を召捕て詮議すべしと、大宮司を拷問に及ぶ、をの、姫父の難儀を見るに堪兼ね、名乗り出で救を乞ふ、梶原姫をも召捕り、いよく拷問を重ね、斯と知りたる景清は、眞妻の苦患に替らんと、自ら縛につき、大宮司、姫兩

人は重忠の情にて赦免せらる。六波羅にては景清を大切なる囚人として、土牢を掘り、蜘蛛手格子を堅固に作りて入置きたり。をの、姫酒、果物を整へて尋ね寄り、さまざまに慰めて歸りける跡へ、阿古屋は景清牢舎と聞くより、前非を悔ひ、二人の子供をつれ來りしが、景清怒て詞を交さねば、子供を刺殺し、自害して死す。景清あまりの事に悲嘆してありける處へ、十藏來りて散々に悪口せしかば、堪えず、牢押破りて十藏を殺害し、再び入牢して普門品を讀誦す。第五段は、頼朝大佛供養の爲、天下の科人を赦免せしが、景清一人は朝敵なりとて、佐々木四郎高綱に命じ首を刎ねらる。然るに鳥山重忠より、早々景清を刑に行はるべし、未だ恙なく牢内にありと申すに、ぞいや先刻某斬て獄門に梟けたり、いや存命せりと争ふ折柄、藁に梟けたる景清の首は千手觀音の御頭となり、また清水寺よりも、觀音の御頭失せたりと注進ありければ、重ねくの不思議は、景清の信心深き故の靈驗なりと、遂に赦免せられ、日向宮崎の莊を行はる。これより八島の合戦に、三保谷と綴引したる物語あり、別るゝに臨んで景清は、目前頼朝の姿を見るにつけ、復讐の念止難く、一刀指んと飛菟るを隔てられ、此上は盲目となりて見ぬに如すと、自ら兩眼をくりて日向に下るを終りとす。

備考[◎] 武藏屋の刊本あり、引用本は十行三十二枚、鶴屋喜右衛門板元にて、さても其

後、かくて、其後等の書出しの文句なかりしが、書卸しにありしものなれば、殊更原本によりて加へたり。

佐々木大鑑

由來 貞享三年七月十五日、作者三十四歳の時、竹本座にて興行せしものなれども、『佐々木先陣』とて、義太夫本ならぬものあり、また外題年鑑に『佐々木藤戸先陣』とあるもの、勿論異名同作なるべし、『佐々木大鑑』付々、藤戸先陣』といふものあり、さて、其後の書出しと目出度かりける物語の終尾の文句とあり、竹本座にて興行せしものは、井上の爲に作りし淨瑠璃を改刪せしものらしけれど、前後を詳にせず。

大意 第一段は、備前兒島の戦に、佐々木次郎廣綱、同三郎盛綱先陣を争ひ、淺瀬を奪んとて、廣綱の搦めし鹽焼藤太夫の娘待宵、時雨兩人を、盛綱の密に放ちし禮に、藤太夫より淺瀬を救へらる。廣綱これを窺ふと知り、盛綱心ならずも藤太夫を殺し、淺瀬の案内を秘して、先陣の高名をなし、大將の御威を蒙る。第二段は、平家亡びし後、盛綱備前を賜はりて在りしが、名主文太より、藤太夫の後家并に娘兩人物狂ひとなり、兒島の汐を干さんと狂ふ由訴へければ、盛綱急ぎ駆向ひ、目の當り藤太夫の横死を悲

しみ、盛綱の無慘を怨み、狂ふ跡を見て、母子を文太に預け、厚くいちはり遣すやう命じ歸る。第三段は、頼朝の嫡子萬壽五歳の時、元服して頼家となり、大内より勅使徳大寺實定、加冠として、關白兼實下向あり、式果て後、兼實當歳の姫君を頼家の御臺所に約す。北條時政以下丙午の女子を娶るは、男子に不祥なりとて背せず、さらば丙午の他の女を殺して祟を除くべしと、畠山重忠の詞に、次郎廣綱其女心當りありとて退出し、直に備前兒島に向ひ、藤太夫の後家の丙午なるを確め、盛綱の言付なりとて召捕り、鎌倉に歸る。娘共は母の命めさると聞き、文太諸共後を追ふて發足す。まつよしぐれ道行これなり。第四段は、盛綱は都詰となりて在京せし處へ、第四郎高綱、妹萩の前同道にて上り萩の前は盛綱の館に滞留す。待宵、時雨兩人は男に身を扮し、芦商人、萩商人となりて盛綱の館を窺ひ、ゆくりなく萩の前に見初められて、口説る、一節を「あしかり付々、姫君忍びの段」となす。二人の娘は、跡よく姫を宿めんとすれども、聞入れぬに困せしが、盛綱の來るに驚き身を隠す。娘共は今ぞ父母の仇思ひ知れど、弓に矢番ひ切て放せば、傍の石に立ちたり、狼藉者こそ入れたれど、盛綱二人を搦め見れば、藤太夫の娘にて、母の命召る、敵討なりといふに、始めて廣綱の奸計を知り、高綱諸共娘を伴ひ、老母命乞ひの爲鎌倉に發足す。第五段は、三七日の祈禱果て、今日

老母の命召れんと、廣綱太刀取にて檢使の前に牢與開けば、名主跳り出づ、ずは狼藉と取圍むを、盛綱、高綱來合せ、始終を語りて老母、文太を救ひ、待宵は盛綱、時雨は高綱、萩の前は重忠が息に縁を結び、廣綱は兄定綱に討れて局を結ぶ。

盛綱の先陣を題目とすれど、寧ろ待宵、時雨姉妹をシテとせること、松風、村雨の如し、『佐々木先陣』の名は、盛綱の先陣を筋の發端とするが故にて、『佐々木大鑑』は佐々木一家の惣まくりなればならんか。

備考 嘗て刊本あるを開す、本集が始なるべし、引用本は八行、五十九枚にて、表紙に竹本筑後椽直傳、卷末に竹本義太夫奥書あり、板元は山本九兵衛、尙他に『佐々木大鑑』付々、藤戸先陣』一本あり。

源氏れいせいぶし

由來 貞享五年正月二日より竹本座にて興行時に作者三十六歳

大意 伊藤祐親等が流人頼朝の徒然を慰めんとして獵を催し、折石橋山にて雪中に凍えたる武士を見出し、酒興の餘試し物になさんとせしを頼朝が見逃すに起り、祐親の娘藤の前が頼朝と契りて懐胎せるを祐親覺りて、醫師生田春樂に預け、平産

の後は山木の判官に縁付け、平家の咎を逃れんといふ、下の巻は春樂姫を預り居る内、姫の繼母の頼なりとて弟子春甫に毒藥を調合せさせ、姫を毒殺せんとす、春甫は石橋山にて頼朝に助けられたる武士なる爲、師を諫めたれど聽れず、止むを得ず藥を姫に勧めし後自殺せんとす、春樂出で、之を止め、先に繼母の頼といひしは偽にて、實は頼朝の子までなしたる最愛の姫君を山木方へ嫁さん事、末代迄の耻辱なれば毒殺せしなりといひ、師弟死を争ふ内、春甫の妻姫の餘したる毒を仰ぎて死す、かくて師弟は死を止り、姫を葬りて頼朝を北條方へ落しやる程なく頼朝、義兵を擧げしかば、義經も奥州より下りて三河に來り、先に契りたる淨瑠璃御前に面會せんとす、此次がれいせいぶしにて、姫の女房なりし冷泉十五夜尼法師となりて此所に來り、姫は伊藤方よりの附人いぶせく、峰の藥師の谷蔭に隠れ給ひしが、思に絶兼て果敢なくなり給ふと告ぐ、義經も涙に暮れて墓所に詣でしに、義經と添寝したる折の姫の肋着を幡に縫ひて土中に埋めたるが、卵塔の中より現れ出で、浮鳥が原にて頼朝と對面の折、其小袖の模様落散りて、藥師の文字を源氏の白旗に印し、源家の必勝を示すに終る。

備考 刊本は博文館本を初とす、編者の依れるは八行本にて四十枚あり。

天智天皇

由來[◎] 元祿二年三月三日興行、當時作者三十七歲。

大意[◎] 齊明天皇の御代、葛城の大君、後に天智天皇東宮に立せ給ひ、右大臣富房の女花照姫を王妃に定めんせしを、王兄さかめの王子深く妬み、帝位、姫共に奪はんと、種々惡計を巧み、玉照姫三國一の美人の聞えあるを、醜婦に書かせ見せ奉らんとするに始る、美人ぞろへの一節は、即ち美人繪ぞろへにて、天下の美人繪を上覽に入るゝを云ふ、然るに噂に違ひ、姫の繪姿甚だ醜かりしと逆鱗あるに乘じ、王子右大臣を惡さまに讒し、繪姿を往來に曝さしむ、かゝる處に葛城の大君與にて通り給ふ、姫絶りつき、泣つ嘆きつする所へ、王子一味の惡黨來りて、姫を奪はんとす、姫の乳人子金輪五郎、今國大君、姫諸共に忍ばせ、自ら與に入替りて擒となる、第二段は、さかめ王子は、今國ありとは知らず、與に向て心のたけを口説きしが、今國と見て大に怒り、燬殺して首を粟津の原にて獄門に鼻く、繪師狩野氏久の婿松岡通りかゝるを、金岡の首呼び留め、松岡の胸を籍りて己が首を繋ぎ、王子に恨を復さんと誓ふ、松岡の女房尋ね逢ひて怪む、可笑味あり、第三段は、天皇王子に履の神器を譲り給へば、王子位に即き

しと擇び、母帝を追ふ、次は、四季花うり又は、采女の四季とて、葛城の大君、玉照姫彷彿ひ給ふ中、春日にて御酒の長の娘采女と知り、長がり宿られけるに、長は大君を采女の聲に所望す、大君身の上を明さんこと叶はねば、心ならず祝言せしを、玉照姫嫉妬の餘り、猿澤の池に身を投んとす、采女走りつき、知らずして女の道を背さしを詫び、一つ蓮の臺に至らんと、共に入水して果つ、時に天照太神、春日、住吉の神々三人の老翁となつて來り給ひ、二人の死骸を呼息け、蘇生せしめらる、第四段は、大君、姫、采女の三人三社の禮参りとして、先づ住吉に旅立つ、はなてる姫道行なり、住吉に着けば、遙の沖に一艘の船あり、何船と尋ねれば、母帝を流せとある王子の仰に、帝を乗せ奉る船なりと答ふ、さらば止めよと宣へど、詮術なき折柄、金輪五郎來り、首は今國なれども、胸は繪師松岡なれば、二人一體を姓に金岡と改めたり、いで繪の奇特をと、社頭の繪馬の白鷺に翼を添ふれば、白鷺忽ち飛去り、口に咬へし笠にて船を煽ぎ戻し、御母子對面ある、第五段は、天皇始め大君、姫、采女、都へ歸らせ、金岡は誓の如く王子の首を刎ぬ、首冲天に舞上り、崇をなさんとす、金岡の弓勢崇を拂ひ、天下太平と治るに至る、天智天皇の御製秋の田の一首を引用して、歌の體を稱ふる挿話を添ふ。

備考[◎] 刊本に武藏屋本あり、引用本は十行、三十三枚、竹本筑後掾奥書、本屋仁兵衛板。

のものど七行六十九枚、表に竹本筑後椽直傳とある山本九兵衛板元の二冊なり、本集は多く訂正せる七行本に據れり、二本多少の差異あり、最も甚だしきは、二十四頁十八行 胸をたゝき、我らは繪師の氏久が世伴今天目の……とあるを、一本には

胸たゝきいふではなければ此宿に天目の……とあるを、一本には

畜生同意の王子の首一口所望と申ける。

とあり、他には一二語の違、若くは一二字の増減あるのみ。

日本西王母

由來 元祿五年四月八日より竹本座にて興行、時に作者四十歳、大意 天曆の頃播州の武士桃園豊舟、同國法華山に移植られたる西王母の桃を大内に獻せんとて都へ上る途中、藤原元方の次女二位の君と契るに始り、豊舟は桃を獻せし功に依り、元方の長女薄雲御前の婿たるべき勅命ありしが、薄雲の醜きを見

て逃出んとせし折柄、二位の君豊舟と契りて産落したる稀若を抱き出で、怨を述べ、始終を立聞したる薄雲嫉妬の相を現し、身を捨て怨を返さんとて出行き、豊舟もその跡を追ふ、折しも豫て二位の君に心を掛くる土師村任その兄なる此家の執權村正と共に出來り、稀若を水に投せんといひて奪去り、更に二位の君を脅さんどせる處へ、豊舟の老臣にて、八十八の高齡に達したる眞砂勝海來りて之を支へ、打擲せられて一時息絶せしが、二位の君が豊舟より遺物に得たる西王母の園の桃を與ふるに及びて蘇生し、剩へ廿餘の若侍に若返りて兄弟を打懲す、第二段は勝海の倅勝興好色の爲勘當せられ、能の眞似事を業となし居りしが、會ま村任に追はれたる二位の君を落しやり、村任主従を懲す、次は、二位の君道行にて正八幡菩薩老翁と變じ、淀鯉を釣りて、その口より出でたる稀若を二位の君に渡す事あり、第三段は勝海二位の君の腰元小萩と夫婦になり、駕籠屋渡世をなし居る處へ室の遊女屋來りて、女郎を駕籠に乗せよといひ、勝海は相方なきに困じたる折、豊舟通掛りしかば、相方として駕籠を昇かせんとせし處へ、薄雲御前二位の君を追來り、初女郎を二位の君と思違へて耳鼻を削ぎ、次に二位の君を捕へて締殺す、勝海豊舟も此様を見て無念に堪兼ね薄雲を害せしが、遊女屋が女郎の身代を出せと逼るに及びて、止むを得ず小

萩を女郎の代として遣す事となり、豊舟は剃髪す、第四段は豊舟室に來りて小萩の宮城野に逢ひ、疾より其方に懸想したりといふ、宮城野は怒り、來合し、勝海も豊舟を草履にて打擲し、耻知らずの見せしめなりとて自殺せんとす、豊舟止めて不犯の誓紙を示し、實は宮城野の或客に請出さる、噂を聞き、それを妨げん爲心にもなき戀を仕掛しなりと告ぐ、折節來りし身請の大盡村正兄弟なるを見て、豊舟等喜びて村正の首を打落す、次は梨壺の五歌仙が後撰集を撰びたる後、玉津島に參籠せんとて行く途中、夜間紅葉を焚きて酒を暖むる件あり、會ま亡妻に焦れたる豊舟此所に来り、歌仙の教にて心開け、二位の君の誓と誓ひの血文とを火に投ずれば、二位の君の姿烟の中に現れ、歌仙と問答するが、反魂香の段なり、第五段は勝海村任を打取りて、悴勝興に面會し、豊舟も勅使として來りたる五歌仙より本領安堵の旨を承け、稀若は唐桃を納めたる藏の守護を命せられて其藏を開きしに、死せりと思ひし二位の君内より出で、法華山の觀世音に助けられたりと告ぐ、折柄薄雲姿を空中に現し、我は人間の命を延ぶる寶の妨をなさんとて女の姿に變じたる惡鬼なりといひ、飛掛らんとして二天の爲に引裂かる。

備考 原本以外の刊本なし、藤井乙男氏の『近松門左衛門』にも未だ見すと記された

解題

れば珍本なるべし、編者の一人三木竹二の藏せるものは八行本にて五十九枚、巻首なる題名の下に近松門左衛門作とありて、表紙第三面には筑後様のみ名を署し、山本氏板行なり、宇治加賀椽の物語中なる『西王母』との關係を調べたけれど、引書を得ざる爲、其意を果さず。

松風村雨束帶鑑

由來 元祿七年三月三日竹本座興行、作者四十二歳。

大意 時の帝の中宮御産あり、皇子降誕まします、中納言行平の北の方司の前お乳の人行平は東宮の傳に召れしが、皇子早世ありしかば、取替子せんと尋ぬる内、龍宮の乙姫と契りて設けし子を浦島太郎より貰ひ、若宮蘇生ありしと被露す、此子人間の乳を飲ず、魚の脂にて育つ不思議に、あれよこれよと諸國より乳母を召さる一節「今様うばぞろへ」なり、其中に、行平須磨に流人の時、深く契りし松風といへる獲、行平に逢はんと交り居て、ふと召出さる、折しも人間ならぬ化生の美女現はれ出れば、松宮驚き逃んとす、女留めて、我は龍宮の乙姫なり、司の前の兄花室の三位菰丸毒魚を釣て此子に與へ、命を縮めん恐ろしき巧あるを知り、魚となりて釣、釣三本喰切りし

解題

が咽にかゝりて息さへ苦しく、今宵も知れぬ命なれば、我子に一目名残を惜まん爲
 来りたりし、しばし御身の姿を貸せよと、松風の姿となり、添乳しつゝ、恩愛の絆離れ難
 く見ゆ、司の前物蔭より窺へば、親子なり、怪しやと駈出れば、乙姫の魂小蛇と化して
 逃去り、松風は氣を失ふて伏したり、北の方扱は夫との間になしたる子を若宮に仕
 立て、乳母と偽り入込みしと、嫉妬堪を難く、松風を折鑑すれば、數多の小蛇現はれ出
 で、北の方を惱ます、かゝる處へ僧正遍照、雛形右衛門尉来りて若宮を助け、落行く先
 に葎丸、人々に追付、若宮を奪へば、乙姫の美女再び現はれ、悪人輩を退治し、遍照の帶
 せし寶劔は龍宮城の靈物なりと、再び本土に持歸る神變まで、甚だ復雜せる筋を第
 一段とす、第二段は行平龍宮の子を若宮と偽るのみか、寶劔を失へりと、恒寂僧都の
 讒にて勅勘を蒙り、行方知れず、浦島は乙姫の形見なる玉手箱を携へ、丹後水の江の
 里に歸り、龜彦の庄司といふ者の僕となりし時、行平を始め所縁の者此里に來りな
 ば助ること叶はず、この勅諭ある、爰へ庄司の悴由良太松風を連來り、行平の所縁の
 人と語る、先祖浦島より代々慈悲深き家なれども、勅諭もだし難し、今宵松風を討ん
 どの庄司の物語に、扱は我が子孫なりしかと始めて知り、浦島は庄司を殺して松風
 を助けんと決心し、由良太の女房はまた松風を落さんと、三方思定めて更くるを待

ちしが、松風の枕元に人聲あるを、庄司松風と心得、一刀に切れば、慕ひ來りし浦島は
 庄司を刺す、爰へ偽勅使葎丸來り、松風が一家の悲嘆に居堪らず、覺悟を極め出んと
 するを搦取んと争ふ内、葎丸の郎等玉手箱の蓋開けば、紫雲棚引て忽ち浦島は白髮
 の老翁となり、始めて明す素性に、皆々驚く、次で葎丸再び亂入す、浦島摺んで投殺し
 ぬ、第三段は、在原業平、伴健宗の兩人勅を蒙りて須磨に下り、業平は松風、健宗は村雨
 の鹽屋に宿る、松風、村雨都の物語より圖らず姉妹の名乗をなせしが、偶ま行平の來
 りけるを、村雨見初む、松風も言寄りたきは山々なれども、人の手前行平と明されず、
 はしなく姉妹の戀争ひあり、遂に松風は曠悲の餘り、龍宮に入て御劔を奪はんと、身
 を投ぐ、龍神風流は龍宮城の有様より、松風が寶劔を奪返す一節を叙す、謠曲「松風」の
 文辭を挿めり、第四段は、つかさの前道行なり、司の前行平の跡を慕ひ行く内、松風の
 念力にて御劔再び返り、村雨をも従へて行平歸洛の途中、夫ありとは知らず、宿りを
 求て拒まれければ、當世こまづくしの一節を挿み、藝づくしにて漸く泊を得、行平に
 對面して、これ迄の嫉妬を詫び、松風、村雨三人睦むに至る、第五段は、行平御劔を奉り、
 事治りたる御祝に、狂言師を集めて二龍神を慰めんと、『初猿』を演せしめ、祝ひ納め
 て終尾となす。

備考 博文館の刊本あり引用本は八行、六十四枚本なり。

釋迦如來誕生會

由來 元祿八年四月八日興行、卯月八日の初日なれば、釋迦一代記を上場せしと論なし、作者年四十三歳。

大意 五天竺の王淨飯大王、憍曇彌、摩耶夫人の二人の後ありながら、三十餘年世繼を得て過せしに、靈夢を感じて摩耶夫人懐胎す。姉憍曇彌これを妬み、右の司婆將軍と心を合せ、提婆達多を養子せんとす。左の司烏陀夷の妻吉祥女これを遮り争ふを發端とし、烏陀夷が一子槃特の天性愚鈍なるを歎き、日參の歸途、婆將軍の臣乗打なすを殺して一通の文を得、披き見て、提婆達多、婆將軍等が摩耶夫人懐胎の子を調伏せんとするを知りし折も折槃特を大鷲に攫はれ、後を追ふ。次に摩耶夫人産の紐解て悉達太子誕生し、續いて夫人は往生す。婆將軍宮廷に入り太子を奪はんと争ひ、車匿童子に懲さらるゝを第一、第二段は、悉達太子十九歳の時、耶倫陀羅女を娶りしが、密に遁世の志望ありて、嘗て一度も夫婦の契を結ばざれども、耶倫陀羅女懐胎あり、太子は車匿を案内に宮廷を逃れて椹特山に入る。後に提婆達多は日頃悪想

せる耶倫陀羅女を奪はんと、婆將軍の臣伯了頓を遣せしに、吉祥女深手ながらに彼を殺し、耶倫陀羅女を落しぬ。耶倫陀羅女は吉祥女の身上、太子の行方に心亂れ、何處ともなく迷ふ内、提婆の計略に陥りて危かりしを、烏陀夷駈來りて再び難を免かる。第三段は「悉達太子道行」にて、健泥駒に乗りて椹特山に入るまでを叙す。次は西天竺の林丹夫婦鷲に攫はれし槃特を子とし育つる處へ、烏陀夷、耶倫陀羅女と共に廻り合せ、それとなく對面して我子と知るとあり、さりとは知らず、林丹夫婦は、耶倫陀羅女を殺して提婆に捧げんと窺ひしに、鳩一羽飛入りしを、槃特殺せしより圍らざる難儀を引起し、鳩の目方だけ槃特は肉を切取らる。此時惡血迸つて槃特の愚鈍直る。第四段は、悉達太子阿羅々仙人の弟子となりて、難行苦行の折柄、耶倫陀羅女烏陀夷を供に登山して、遙に姿を拜し、去り難き風情あり、太子も心迷ひしが、斷然愛想を絶ちて煩惱を燒盡し、釋迦牟尼如來となり、出山するに至る。大悟徹底の態を叙し、次は林丹の妻瑠璃仙女が主なる須達長者始は提婆に従ひしが、釋迦の説法に迷暗れて萬燈を點せしに、林丹夫婦が眞實信心の一燈に光及ばず、再び佛の訓戒に大悟し、林丹夫婦を三拜するに至る。提婆達多、婆將軍馳來り、己が道力と佛力とを競ひ、狂ひ死す。第五段は、佛の涅槃の狀態を記せるもの、憍曇彌先非を悔て耶倫陀羅と共に比丘

尼となり、太子羅睺羅また僧となることにて結ぶ。
備考 刊本は博文館と三三文房との二種あり、編者の引用本は七行、九十四枚にて、竹本筑後様直傳とあり、山本板なり。

鎌田兵衛名所盃

由來 元祿八年十月十二日より竹本座にて興行時に作者四十三歳。
大意 保元の亂に爲朝が父爲義方に馳参して弓勢に譽を現すに始り、戦果て、爲義は清盛の手に捕へられしに、清盛義朝の命乞を遮りて其首を刎ぬ、義朝無念に堪えず、清盛を討取らんとせしに、清盛は逸早く内裏に籠りて門を塞し、かば、義朝も朝敵の名を受けんを憚り、鎌田兵衛金王丸等を従へて尾張へ落つ、下の巻は、義朝内海に來りて鎌田の舅長田庄司を頼みしに、庄司及伴景宗は之を討ちて平家の恩賞に預らんとし、先づ義朝の徒然を慰むと稱して、名所の繪屏風を見するが、名所屏風の四季にて、事果て、景宗をして義朝を濱の茶屋なる藥湯に導き、同時に鎌田を後に留めて酒を強ひ、泥酔に乗じて之を刺さんとす、鎌田の妻宿木情を知りて夫を戒むれど、鎌田覺らずして死す、義朝の入浴するに先ちて、狩人に姿を窺したる爲朝圖

らす藥湯に來り、秘密を悟りて義朝の危難を救ふに終る。

備考 刊本は博文館を初とす、編者の依りたるは七行本にて五十六枚あり。

頼朝伊豆日記

由來 元祿十年七月十五日より竹本座にて興行時に作者四十五歳。
大意 伊東祐近が流人文覺を伊豆に送らんとして途中惡風に逢ひあなや船も沈まんとせる折、文覺の祈念にて風靜まるに始り、祐近の息祐清が兄河津の一周忌に頼朝等を招きたる酒宴の席にて、股野と盛長の力競あり、第二段は祐近平家の聞えを憚り、娘八重姫と頼朝との中に生れたる千鶴をどききの淵に沈む、其跡へ祐近驅付け、忠孝二つに身を置き兼て自殺す、第三段は北條時政三島の社に參籠し、夢中に頼朝を佐けて宸襟を安めよとの告を蒙り、下向の途次、頼朝に邂逅して我館に伴ふ、時政の息女朝日の前又頼朝を慕ひて我伏戸に伴ひし處へ八重姫忍來りて番卒に殺され、其折番卒の言へる詞を實と思ひ、死靈となりて頼朝及朝日の前を惱まし、が、文覺の功力に依りて退散す、第四段なる「後室道行」は河津の妻の墓參する事を叙し、寺にては曾我祐信姿を窺して後室に近づき、遠からず頼朝の世となりては伊東

家の滅亡眼前たれば、せめて祐重の二孤を我子として養ひ、竹馬の友たる祐重の妾執を晴さんと云ふ。後室其志に感じて祐信に再嫁す。其前後に文覺が頼朝に旗上を勧め、院宣を乞得て歸る事あり。第五段は頼朝時政の助にて旗上し、伊東の館に押寄す。真田與市は股野を討取り、盛長は頼朝の命に依り、伊東の妻を弄殺にして、千鶴の爲に怨を報す。

備考 原本以外の刊本なし。編者の依りたるは、八行本にて五十六枚、外題の紙には頼朝の二字を細く肩書して伊豆日記と題し、表紙第三面には義太夫及作者の署名ありて、山本氏板行なり。

百日曾我

由來 『團扇曾我』にて加賀淨瑠璃なりしを、元祿十年十月三日竹本座にて興行せし以來、今の名に改む。時に作者四十五歳なれど、再興行なれば、書卸し當時は何歳なりしや不明なり。根元世繼、本領等多く曾我の淨瑠璃を書し頃の作なりとすれば、三十三歳前後なるべし。

大意 建久四年五月、頼朝富士の牧狩を催さんと發向の日、海野小太郎行氏武藏坊

辨慶の父辨真と名乗る老入道を召捕りたる褒美として、召料松島月毛を賜はりたしと願へば、新田四郎忠常罷出で、先頃富士の人穴へ入りし時、松島月毛拜領を願ひしに叶はず、今日海野に賜りては忠常の武士道立難しと、異儀を唱ふるにぞ、新田海野の内三度高名せし者に下されんと誓はる。忠常は大磯の遊君に懷妊の者あり、敵の餘類の胤なれば詮議して高名にせんと、並木まで來りしに、曾我の下人鬼王、團三郎の妹花野走り出で、曩に海野に生捕れし入道の娘なり。曾我殿原は大磯の遊君に深き馴染ありと聞く。若し其腹に子あれば助けられよと頼み、返禮に虎の生爪を送る。心は同じ海野は、虎懷胎の由を知りて詮議するを、新田虎の生爪を誓紙の證に、自身虎に契れりと、海野を誑かし難を救ひし折、富士の御狩に荒猪を追出せりと聞き、新田駈付難なく刺留て二度の高名す。十郎祐成新田に近付、虎が再生の恩報しには、本望遂げたる上新田の手に懸りて、三度の高名なさしめんと約して別る、を第一段とす。第二段は、海野小太郎新田の高名妬ましく、辨真を罟に敵を釣出さんと、狩場を廻る折も折時宗、鬼王兄弟、花野を連來るに逢ひ、花野等を辨真の所縁と見咎めしが、五郎の頓智にて傾城に拵へけいせい請狀を勸進帳もどきに讀みて疑を解く。其日の狩に十郎祐成は鹿を追ふて祐經を見出し、一矢射んとあせりしが、懷中せる虎

の生爪に乗馬前足を折て倒れしにより果さず、後に時宗と共に求めしが、遂に志を得ずして歸る。第三段は、兄弟喜瀬川の龜菊が情にて、首尾よく敵祐經を討たる後十番斬をなし、祐成は約の如く新田に討れ、時宗は五郎丸に生捕らる。虎少將は兄弟を尋ねて狩場に入りしが、討死、生捕と知て涙ながらに歸る。第四段は、忠常が三度の高名に松島月毛賜はらんと、新開荒四郎を使に新田がり牽せけるを、朝比奈道に馬を奪ひ去る。次は、とらせうしやう道行を叙し、末には頼朝が兄弟の弟禪師坊を召捕り、刑せんとする處へ、老母來り嘆くを、禪師坊母を慰めん爲、三ぶきやうを説き、尋常に刑に就んと云ふ。仁田高名に代へて禪師坊の命乞ひをなし、朝比奈は奪ひし馬を忠常に返す。第五段は、曾我の老母、禪師坊、虎少將等往來の人に茶を施して、兄弟の供養をせしが、頼家兄弟の孝心に感じ、遺子等を召出して近習となし、本領安堵の墨付を下し、最後に頼朝父子曾我兄弟の神靈を拜し、社殿に掲げし三十六歌仙の物語す、一本「歌仙」として行を改めたるあり、これにて曾我一家愁の肩を開くに終る。

備考 刊本に武藏屋本、博文館本あり、十一行、三十四枚、竹本義太夫直正本と記せるもの三冊を引用す、但し初一枚は十行なり。

當流小栗判官

由來 元祿十一年二月十四日より竹本座にて興行時に作者四十六歳。

大意 小栗判官流人となりて相摸の配所にありし時、横山郡司の娘照手姫と馴染み、その兄三郎と隙を生ずるに始り、第二段、后藤左衛門蟲盡にては、左衛門判官の恩に感じて蟲商人となり、判官を姫の局に忍ばしむ。郡司は判官の位高きに愛で、姫の婿となさんとせしに、三郎之を妨げ、判官を鬼鹿毛といへる荒馬に乗せて殺さんとす。小栗鬼鹿毛曲乗の段は判官が之を乗鎮むる件なり。第三段は、横山一家の者和睦の宴を開くと稱して判官を毒殺し、郎黨鬼王をして姫を相摸の沖に沈めしむ。鬼王は姫を落して三郎を欺きしが、照手の妹更衣が姉は眞に入水せりと思ひて身を投するを見るに及びて、弟鬼次と共に剃髮して藤澤上人の弟子となる。第四段は、上人が上野が原の墓中より出でたる餓鬼に熊野の薬湯を浴せしめ、返魂の法を修するに起り、美濃青墓なる萬長方に水仕業して小萩と呼べる姫の夫と知らずして供養車を曳くが、照手姫車の段なり。第五段は、薬湯と姫の信心とに依りて平癒せる判官は本領安堵となり、萬長方に來りて小萩を召し、始めて照手なるを知りて奇遇を感

ずかくて兩人は藤澤寺に詣で、三郎が又判官を刺さんとせしを見破りて之を殺すに終る。

備考 刊本は博文館本を初とす。編者の依れるは十行本にて廿八枚表紙の貼紙に「おぐり判官竹本筑後様直傳正本」と題し、本文の初には當流小栗判官とあり、山本九兵衛板なり。

源氏烏帽子折

由來 土佐淨瑠璃の「源氏烏帽子折」を訂正したるものなり。外題年鑑によれば「鎌倉袖日記」よりも古し、竹本座興行は元祿十二年正月二日、作者四十七歳。

大意 平治の亂に義朝長田に殺され、常盤始め幼き者、流浪の困苦を嘗る態を骨子となす。初段は、長田常盤の隠れ家を探し出し、常盤牛若を召捕りしを、義朝の家來澁谷金王丸、藤九郎盛長邂逅して、圖らず常盤母子を助け、長田を殺す。第二段は、とまわ御せん道行として、伏見の常盤とも、雪の常盤といふ有名なるものにて、三人の幼児と雪に路を失ひ、宗清夫妻に救はるゝを叙す。一中節の「妹が宿」は同文なり。第三段は、牛若成人して元服せんと、都三條烏丸烏帽子屋五郎大夫方に至り、左折りの烏帽子を

購はんとして源氏の公達と覺られ、五郎大夫は六波羅に訴人す。大夫の娘東雲一目見るより牛若に懸想し、元服の祝儀にとて、鎌倉武士ぞろへの一節あり。烏帽子折名づくしといふ。大夫の訴に六波羅より捕手を遣す。鎌倉武士大勢ある様子に遁入りかぬるを、金王丸の土佐坊昌俊來りて追散す。烏帽子折の名は本段に因す。第四段は、宗清の妻白妙は藤九郎盛長の妹、源氏譜代の者なり。牛若に扮せる娘東雲を救ひ、共に牛若の跡を追ふ。東雲の叔父に雷玄法師といふ悪僧あり、追手を連れて牛若を尋ね、却て無慘の最期を遂ぐ。第五段は、盛長、土佐坊等伊豆に赴き、頼朝に説きて牛若を迎はしむ。牛若宮めぐりは、牛若伊勢參宮の處へ、盛長頼朝よりの迎として來るに逢ふを終とす。

備考 武藏屋博文館共に刊本あり。本集の引用本は十行、三十三枚の山本土佐様直之正本と、十行、三十一枚、竹本筑後様正本との二種あり。間々少しく文辭の差異を見る。

浦嶋年代記

由來 元祿十三年正月六日、竹本座興行、土佐の古淨瑠璃に「浦嶋太郎」宇治に「浦嶋

太郎七世縁等あり、後者の如きは異名同種ならんと思はるれど、原本に接せざれば、正否を断じ難けれど、竹本座興行は書卸しなるや疑はし。
 大意 安康天皇不豫にまします上、妃中蒂姫懐胎ありて誕生なく、皇弟泊瀬皇子を召して帝位を譲らんとし給ふを、姫の父圓の大臣悦ばず、葵の臣の娘綾織姫、丹後に世を遁れある泊瀬皇子を伴ひ歸るに始り、乾平馬が漁りし大龜を、浦島太郎命乞ひす、太郎の女房入水して死せしが、命助りし龜女房に化けて、夫婦皇子の御伴して都に上る一節を挿む、第二段は、曩に中蒂姫に心を懸し大草香戀の叶はぬ意恨に、姫の懐胎を封せしを、圓の家臣に切殺され、断末魔に不思議を示す、泊瀬皇子いよ／＼歸洛ありて即位し給ふ、此時大草香の亡念中蒂姫の飲む盃に入りて俄に亂心し、皇子に懸想せらる、浦島の女房は祝酒に、龜の本性現はし酔潰れしを、夫に見咎められ、夫婦の縁もこれまでと入水して去る、泊瀬皇子即位ありて雄略天皇と申せしが、御母中蒂姫の不義に御身を責められ、宮中に獄屋を構へて自ら入牢し給へば、綾織姫の嘆聲へん方なく、怨の詞に中蒂姫戀の一念に黙止しかね、互に争ひ給ふを引分て、中蒂姫は葵の家臣鶴國へ、綾織姫は圓の家臣諸宗に預けらる、鶴國は中蒂姫大切と侍くに引換へ、諸宗は綾織姫に横戀慕し、まさきに手込になさんず振舞に、隣れる鶴國の

館に逃げ給ひ、諸宗は父諸門の刃にかゝりて死す、かゝる騒の隙に、諸門の妻鶴國の邸に忍び中蒂姫の腹を割きて、王子を取出し歸り、始めて諸門夫婦諸宗は、圓の仲なれども四十二の二つ子故諸門の娘中蒂と取替しことを明し、悲嘆に沈む、第四段は、中蒂姫の腹より出でしは、忌はしき袋子なりとて、葛城山に捨られしを、御父安康天皇親子の情忘れ難く、山奥に分入り尋ね給ひしに、袋裂て悪鬼の如き男子現はれ、天皇に仇をなし、我こそ大草香の怨靈中蒂姫の胎内に入てなせる祟なりと申す、眉輪王の變を轉化せるなり、次の浦島太郎入部の體は、太郎龍宮に至り、龜と化したる乙姫の妻に再會する一節にて、龍宮に滞在中七世を経しと知り、鏡に映して郷土の變遷を遠く眺むる條は、改めて龍宮七世の鏡となす、第五段は、鏡に映る七世の孫久富が、嚴島の神職に系圖を盗まれ難儀に及ぶを、浦島見かねて郷土に歸り、玉手箱を開きて證據となし、舊の筈に返る。
 備考 刊本には民友社本、博文館本あり、本集の引用本は七行、八十四枚、竹本筑後掾の奥書ある山本九兵衛板なり。

長町女腹切

由來[◎] 元祿十三年正月六日より竹本座にて興行時に作者四十八歳。
 大意[◎] 堀川に近き刀屋石見の手代半七を石懸町なる井筒屋のお花が半七の伯母
 と偽りて尋來りたる折柄半七の眞の伯母なる大坂伽羅細工商甚五郎の妻も亦此
 所へ來りしより二人の企露れんとせしに、伯母がお花を眞の妹の如く言紛らし、
 爲事なく濟み、後にて伯母は二人に異見をいひ、こたび研を頼まれて携へたる信國
 の脇差は、今こそ出入屋敷の品なれど、元は祖父なる武士が此脇差ゆゑに傍輩を打
 果して切腹したるものにて、その爲父も浪人中に死したれば、末を氣支ひて賣拂ひ
 しが巡りく、て目に掛る事不思議なりと告げ、粗末なき様仕上げよと言置きて歸
 る中、の巻は石懸町にてお花が坊主客に揚げられ居る所へ、お花の養父西陣の九兵
 衛來りて宿の主太郎左衛門と年増の相談をし、半七の悪口するを聞兼ねてお花出
 來り、半七に添はれねば殺して呉れといふ、九兵衛が打擲するを門口に立聞せる半
 七見兼ねて内に入り、二十兩の金を出してお花は我女房なりといひ、九兵衛と争ふ
 を見て、太郎左衛門店の邪魔なりとて半七を突出し、九兵衛をも明日相談せんとて
 歸し遣る跡に坊主客お花等を伴ひて西石懸へ飲みに行きし出先にて、お花は阿彌
 陀籤を抽き、豆腐買に行く振して小蔭に忍びたる半七に逢ひ、宿にての金は預物の

刀をすり替へて質置したる者と聞き、手を携へて大坂なる伯母方を差して落行く
 が、お花半七道行の段なり、下の巻は半七お花長町なる甚五郎方を尋ねて伯母に逢
 ひ、一度は刀が無事に屋敷に納りたりと聞き、喜びしが、今日屋敷より甚五郎が呼
 ばれたりと聞きて、扱は露顯と覺悟を極める折柄、甚五郎歸來りて脇差のすり替り
 たる申譯に自殺せんとす、長持に隠れたる半七出でんとするを伯母素振にて止め
 脇差を我腹に突立て、我身自殺せば此品は上り物となり、甥には詮議かゝるまじ
 ければ、お花と末永く添遂げて、親祖父の名字を襲げと言置きて死す。
 備考[◎] 刊本は武藏屋本博文館本の他、櫻庭氏の巢林子撰註本あり、編者が依りたる
 は八行本にて三十七枚あり、表紙第三面には筑後椽及作者の署名ありて、山本氏板
 行なり。

淀鯉出世瀧徳

由來[◎] 元祿十三年四月、作者四十八歳の時の興行とあれど、文中の事實によりて然
 らざること明白なり、恐らく數年後の興行ならんも、年月不明なれば、暫く傳説に従
 ふ。

大意 上之卷は、八幡の金持江戸屋勝二郎、大坂新町茨木屋の遊女吾妻に深く馴染みしを、手代惣七主人の放埒を好きしほと、財産を横領し、主思ひの手代新七に暇をやりぬ、新七夫婦主の身を案じ、廓の歸りを待ち、勝二郎に意見なして再び機嫌に逆ひ、足蹴にせらる。勝二郎の放埒愈増長して吾妻身請の相談を整ふ、吾妻は大勢に送られて八幡に赴く途中、惣七の悪事露顯して行方知れず、勝二郎も其罪に連累して土地拂ひとなりしことを聞き、今更廓へ歸るにも歸られず、悲嘆に沈むを、廓の者の情に身代金二百兩を出すことに約束して、再び茨木屋へ歸らずに事済となる。下之卷は、身代金二百兩を償ひの爲、吾妻は奈良の木辻山城屋へ身を賣り、二度の勤なせしに、藤といふ大盡に思はれ、身請の話あるに喫驚し、勝二郎を招きて談合すれども金の出やう等なく、男の爲と藤大盡を殺して繩目の耻を受んとせしが、駈付し藤の兄は忠僕新七にて、吾妻を身請して勝二郎に手渡せん下心にて、弟の藤五郎を客に仕立てたること明白し、勝二郎、吾妻は新七の志に感じ、これ迄の過を悔悟の折、新七の忠義上に聞え、淀屋の家再興するに至る。

備考 刊本に武藏屋本、博文館本あり、引用せしは十行、三十一板本なり。

蟬 丸

由來 元祿十四年五月六日興行、作者四十九歳、此年竹本義太夫受領して筑後縁となり、名弘めの祝儀に因みて、音曲の祖と仰がる、蟬丸を新作せるなり。

大意 蟬丸の宮天性美男の上に、琵琶堪能の聞えあり、宮廷に管弦を催さる、夜、琴を枕に伏したる蟬丸の目を覺さしめ、北の方長枕を二に切り、夫婦になりて二年越一度も枕ならべねば、長枕の用なしと怨ずれば、蟬丸遁世の志あるによりて色を慎むよし答へらる。時に一年春日にて契りし直姫といふ女忍び寄りしを、早廣見付、落せし誓紙を證據に北の方を煽る、北の方嫉妬に狂ひ、丑の時詣して、同じく蟬丸を慕へる芭蕉の前に逢ひ、直姫を祈殺さんと、共に釘を打つを、蟬丸の乳人清貫窺ひ知る。第二段は、千手太郎直姫を搦めんとする早廣を追散し、蟬丸姫諸共我家に隠し参らす。芭蕉の前御所を出で、我家の門を叩けども入道夫婦入れさせず、以前より宮の行方を窺ふ清貫は、此女こそ宮の祟と一刀に刺通す、蟬丸直姫走り出で、名残を惜む折柄に、早廣此家を取圍み、入道を斬殺し、蟬丸直姫は虎口を免かれ落失す。第三段は、蟬丸逢阪山に世を忍びて、琵琶を彈じ在す、蟬丸あふさか山入道行の一節これなり、直

姫庵室に尋ね來、蟬丸は「これやこの」の一首を詠す、第四段は、左衛門督清實養育せし宮の有様に無情を感じ、修行者となりて、或庵に宿り、直姫に逢ふ、千手太郎はまた父の敵早廣を討ちて蟬丸、直姫主從廻合ふ、第五段は、直姫懐胎せしが、北の方の一念胎内の子に祟れば、宇治川に七七日魂しづめの法事をなす、懐胎十月由來、是なり、後佛果を得て子孫繁昌するに至る。

備考 刊本は武藏本、並に東京専門學校の巢林子評註中にあり、引用本は八行、四十七枚、竹本筑後椽の奥書、正本屋善四郎板なり。

源賴義 平師氏 大掛物十幅一對 付、北國落

由來 元祿十四年九月九日より竹本座にて「十二段長生島臺」の切に出せり、時に作者四十九歳尤も此作は井上播磨椽の爲に作りたる「賴義北國落」を改題したるものと覺しく、その曲中なる懸物揃は節附の好かりし爲、當時の見物に喜ばれたりと云ふ。
大意 公家大臣等源賴義の硬直を忌み、平師氏を召して賴義と相將軍たらしむ、師氏我館に來りたる賴義を辱めんとして却て耻を受く、第二段は師氏闕下に伏し、賴

義天朝に對して異志ありと譏し、追討の命を受く、賴義聞いて自殺せんとし、獨武者及四天王の後繼者に諫められて京師を出づ、第三段は師氏の嫡子師秀及師氏部下の四天王等これを道に要撃せんとして、却て源家五勇士の爲に殲せらる、第四段は賴義若狭なる小濱に着して、邊見唯光に寄る、唯光雨中の徒然を慰めんとて、名書十幅を示す、これ即ち「懸物揃」なり。
備考 原本以外の刊本なし、編者が依りたるは八行本にて三十枚、表紙第三面に筑後椽及作者の署名ありて、山本氏板行なり。

曾我五人兄弟

由來 元祿十四年十一月一日竹本座興行、或は古淨瑠璃を改刪せしにはあらざるか、やゝ疑なしとせず。

大意 賴朝の嫡子賴家養育の爲、古今の名將を書きたる繪障子を作るべしとの、重忠の發意に始り、工藤祐經の息犬坊丸、虎の足駄にて作りし笛にて鹿を狩り出し、近江、八幡の取持にて虎御前をも手に入れんとする處へ、十郎祐成來掛り、敵共に生捕れんとして山深く逃る、跡追駈けし犬坊等は、祐成に命乞ひせられし白鹿の十郎に

化たるに打懲さる。第一、第二段は曾我兄弟の姉娘二の宮太郎に嫁ぎしが、二の宮は大名曾我は聞ゆる貧乏にて晴小袖なきを、十郎才覺して大磯の遊君より小袖を借出す一節を「小袖もんづくし」といふ。祐経は婚禮に事寄せ、己を敵と狙ふ十郎を殺さんと、祝儀に事寄せ石打する狼藉に、箱王祐経を懲す。母箱王の振舞氣に適はず、勸當なし。若し許されたくば、出家となりて衣を着よと命す。第三段は、虎御前一心に十郎祐成に敵を討せ、繪障子の敷に入れんと念する折しも、鬼王より箱王母の勸當を受け、剩へ鎌倉殿の憤りにて、剃髪せざれば命危きよしを聞く。次は大磯の遊君少將かねく、十郎虎の語ひ羨ましく思ひしに、出家を嫌ひて逃端を失ひし箱王を隠まひ、祐成の弟と知りて契を結び、箱王は元服して五郎時宗と名乗る。終は、つはものぞるへ」と云ふ。初段に見えたる障子の繪解物語なり。第四段は、富士の御狩の日、十郎弟五郎と見物せんと心ざす途中にて、母に出逢ひ、五郎の勸當御免あれと、只管に詫れども聞入なく、弟禪師坊の初談義聽問の爲、十郎同道にて寺に赴く。次に、とら少將道行を挿みて、同じく初談議の席に列る道行を記す。斯て其寺に入りしに、禪師坊虎を見て戀ひ慕ひ、傍若無人に口説くに、一同呆れ果つ。中にも老母の嘆一方ならず、此態を見ては五郎こそましなれと、勸當を免す。禪師坊かくと聞て、兄時宗の勸當御免あ

るやう、偽りて虎御前を口説きしと本心を明す。第五段は、河津三郎一代記の辻講釋なして、赤澤山の最期を讀む者あり、鬼王兄弟聞答むれば、曾我兄弟の異父兄京の小二郎なり。一つ腹の兄弟なれども、工藤に心を通はし、誑つて兄弟を搦めしめんと、祐成、時宗を欺き、近江、八幡を大磯に手引せしを、祐成、時宗首尾よく祐経を討ちしと見し夢の内にて祐経ならぬ小二郎を斬殺すに終る。

祐成、時宗、禪師坊、二の宮の姉御前に、京の小二郎を加へて曾我五人兄弟とは名付しなり。
備考 刊本に博文館本あり、引用本は七行、七十七枚本。

大磯虎稚物語

由來 元祿十五年五月二十八日興行、作者時に五十歳。
大意 奥州高館にて討死ありし義經、辨慶以下の首鎌倉に送られしを、畠山重忠、梶原景季に實驗を仰せらる。靜御前忍寄て重忠より義經を貰ひ受けし後にて「首實驗」ありしに、義經の首は賈物なれば、梶原不審を立て重忠と争ふ。辨慶の首咬へし矢の根を梶原に吹掛く。第二段、しづか道行は、靜御前弟を伴ひ東海道島田の宿まで來り

しに、弟重病に罹りて落命す。庵の主小柴の郡司同じ病に患みしが、静の情にて一旦本復なしたれども、梶原の郎黨番場の忠太に殺害さる。第三段は、郡司の倅小柴掃部父が非業の最期を聞き、大磯の廓に身を沈めし妹虎と共に敵を討んと、客となりて尋ね、虎を伴ひ箱根山なる五郎方へ赴く。第四段は、五郎の勘氣を宥めんと、祐成、虎御前老母へ取なし、兄弟烏帽子、小袖を貰ふ。第五段は、鳥山の家臣本田次郎の智略にて、小柴掃部、十郎祐成土民となり、頼朝がみかり馬ぞろへの場處に馬を牽き、率領馬場忠太に近付て、父の敵、舅の敵と名乗を揚げ、難なく本望を達す。

備考 民友社博文館の刊本あり。引用本は八行、五十九枚。竹本筑後縁奥書の山本九兵衛本なり。

賀古教信七墓廻

由來 元祿十五年七月十五日より竹本座にて興行時に作者五十歳。大意 播州の惣郡代鹿兒川教孝の一子孝房が大内造營の命を蒙りながら九條の遊女宮城野の色に溺れて御普請料を失ひ身を隠すに始り、孝房の繼母は兼て、我連子教信を世取としたさに孝房夫婦と其子光明九千壽の姫を忌み、山神の洞に調伏

をなして却て洞中の蜘蛛に喰殺さる。その蜘蛛に繼母の一念入りて千壽の姫と老臣山蔭秀光の妻を殺し、光明丸を捕へて空中に飛ばんとせし折、教孝の郎黨須磨藏身を捨て、蜘蛛を退治す。第二段は初に津の國櫻塚にて祭文語、櫻祭文を唄ふ件あり。この祭文語は教信にて、實父なる坊門中納言の仇なりとて、隠士高梨友重に斬掛けしが、隠士は眞の友重ならず、友重の息友風が父に代りて討たれんため、假名したりと聞くに及び、病中の仇を討つは本意に非ず、全快の上勝負を決せんと云ひて別る。領地より逃來りたる孝房の妻は追手の爲に害せられしが、疵口より生れたる嬰兒に心引れ、病死せる友風の骸に憑りて嬰兒を中山寺なる眞如上人に托す。折から教信もこゝに來り無常を感じて出家す。第三段はこれも上人の弟子となりたる光明丸の眞光、西行が佛體が見たくば江口の君に見せよと、或人が云ひたるを信じ、都より神崎へ賣られたる父の馴染宮城野の許に通ふ。宮城野は孝房の父が孝房の代りに流さるゝを見て、其罪を贖はんと眞光に金の無心す。眞光閻浮陀金の觀音を奪はんとし、して上人に見現され身を隠す。第四段、夏野のまよひ子は眞光の道行にて、飛田の墓所に來て縊れ死す。次の鉢たゝきは七墓廻せる教信此所へ來りて孝房宮城野に會し、眞光が火の車の苛責に逢ふを見る。已にして地藏菩薩現れ、教信の道心堅固なれ

ば眞光を娑婆に還すといへる折、土民御用木を曳來りて、教孝の流人を宥め、この材木を献すと告ぐ、第五段は眞光黄泉に到りし事、寂閑に達し、本領安堵の鹿兒の莊に伽藍を建て、教信を導師とし、甥には法如上人の號を授けらる。北の方繼母姿を現して己の成佛せるを喜び、眞光を還俗せさせて孝房宮城野の子として育てよと云ふ。

備考 刊本は博文館本を初とす、編者の依りたるは八行本にて五十九枚あり。

最明寺殿百人上臈

由來 元祿十六年三月四日興行、作者四十一歳。

大意 北條時頼の嫡子天女丸は源義經の再誕なりと、大江の僧正の詞に、猶も文武の道を奨めよと、宇都宮新庄司友平を師範となし、弟冠者時定の兩人に政治を委ね、最明寺時頼は禪に入る、よし經ふくみ狀は天女丸を教訓中の一節なり、然るに冠者時定は、兄最明寺の入禪を幸に、佐野源藤太經景を語ひ、天女丸をなきものにせんと、伊豆の御崎に陣を構ふ、天女丸これを攻落さんと、登に淺瀬の案内を頼む所、佐々木先陣に似、經景、廣綱馬を波に入る、節宇治川の戦に彷彿たり、遂に天女丸宇都宮等

海を渡りて經景等を討つを上の巻となす、下の巻、最明寺殿道行は、謡曲「鉢木」の前半を轉用し、女せいぞろへは其後半にて、共にシテを女になし、勢揃へも凡て女武者なれども、筋は全く一なり、女鉢木の想はこれを始とす。
備考 刊本に武藏屋本、博文館本あり、本集の引用本は八行、五十五枚にて、竹本筑後様、近松門左衛門兩名の奥書あり、山木九兵衛板。

337445

天 報

徳若に御萬歳常御殿茶にまします。ありけうあり新玉の、年立返るあしたより、水も若やぎ木の芽もさ
 しさかえけるは、誠に目出度ひひき。昔の京は難波の京、中比は奈良の京、今の京と申すは、イヤ萬世
 の中は御太平平の京、おりゐの帝は寛平法皇京の司は關白殿、ふとみの縣主、時景が奉るばんざい樂を
 中ロシめしつれて、院の御庭に入俯のたもともかくや初春の、慶賀を御覽に入たまへば上下の女中玉座
 に、のぞきこぼれつ院參の卿上雲客一同に、猶悦喜は今年より、千代ぞと祝ふ萬歳樂いやく、ごつと
 ぞほめ給ふ、竹の園生の、末葉の宮箒の親王、御威の餘り御階近く出でさせ給ひ實も興ある見物かな
 〇扱我朝に萬歳樂をかなづると、いつの代よりか起りつと御尋ねありければ、あがたぬし謹んで、さん
 ひ初春の千壽萬歳と申は、其上聖徳太子推古天皇の攝政として、高麗の伶人を召れ一越調の鳥の樂をう
 つし鳥追をはじめ、平調の萬歳樂をやはらげ、萬歳樂と申す事を造り創め給ひ、時に千年こう經る狐
 の草にて張たる鼓、天竺より渡りしを是を天鼓と名つけ、萬歳傳授もろともに呂律の家に傳はり、故三
 位富士丸まで數年傳へひへごも、富士丸死去の後家を繼ぐべき男子なく、娘澤瀉と申て當春明て十八歳
 〇こゑも拍子も無類の器量されども女なれば憚を存じ、これなる二人の者徳若智界之介、才若武界之介
 と申す譜代相傳にてひ故、主が名代相つとめひ、又某は澤瀉が母方の伯父にてひ故、うしろみ養育仕る
 といとこ女やかにぞ申ける、親王は時景が言葉の色に見ぬ戀の、心の水の下草とむもれて繁る澤瀉が、
 噂に深く迷はせ給ひ、我も帝位を踐むならば、其澤瀉を召入て、一きよく見てましものをとて思召入た

天 鼓

人目、忍びて便せよと申す。心かよは侍てのきみを、つれてのかんの合言葉、澤瀉ちやくと聞付鼓を袖におし隠し、そつと抜出で鳥追と手を引走り出んとす。時景嫡子宇治太郎やれ盗人よと追かけ澤瀉を引きもごせば、是までと鳥追は笠引ちぎつて懐中より、隠し指たる太刀取出し、あらはるゝ上からはむざと手ごめになるまいと、そりを打てば宇治太郎大の眼をひつくり返しきつとねめ、やい鳥追め、あの者は親王へは宮仕に奉る。父の爲には姪身が爲には従妹なれども、主同前の者なるをかごはかし行くは大盗人己れ、びくともせば蹴殺さんとさも悪、さげにぞ罵りける。鳥追ちつともひるます。是さ宇治太郎、是程のと仕出す身が、命生んと思は、こそは分が目玉もこはからめ、去ながら盗人と云ふが奇怪なれば仔細を云ふて聞せよ。某は呉服の中將雪枝が家人巴九と云ふ童なり、主君雪枝とおもたか姫人知れず玉章を通はし、御夫婦の約束有る所に不慮に勅勘を蒙り、都をよそに流浪となり互にわりなき御心察しまゐらせ姫君を、すかし出し添はせ申さん爲なるぞや、戀の媒介比翼の鳥追尤と了簡し、許せば珍重合點行かすば夫から夫まで、獨は死ぬぞサアまゐらふと語かくれば、時景聲を上げやれ待て汝等聊爾すな、やれまてくゝと押鎮め、是々巴九、堪忍し難き所なれども深き戀と聞からは、中將殿も痛はし、姪も不憫の上なれば、某夫婦が了簡し如何にも遣はし添すべし、御所へは幸ひ我娘夕映を差上て、おもたかと許らんが何と重代の、狐の草の鼓を夕映に渡すべきか、澤瀉姫は手を合せ扱添き御仰や、此上は何が扱鼓を如何で惜むべき、しかし智略之介兄弟が、田舎より歸りなば、よもや合點申すまじとてもの、に此御思案さうぞ、叔父様叔母様と涙を流して頼まるゝ、時景聞てマ、皆まで云ふな、狐一疋求め皮を剣ぎ鼓に張せ、智略之介兄弟に實の鼓と云ひかすめん、とは云へ急に狐の皮求めんとはと有りければ、巴九頭を下け扱結構なる御了簡、幸ひ某狐釣ると得て、姫君の御供致し今宵の中に一疋釣り、御目に

天鼓

四

懸け申すべし萬事首尾能く御沙汰有り、姫君の御事を兎角頼み奉る、先今日の慮外の段眞平御免蒙ふらんと宇治太郎にも禮儀を述べ、おもたか姫を誘ひて出でゆく、野遠ぞ、三馬物さびし、まぶしの蔭に巴九姫君諸共身をひそめ、息をつめて居る所に、草原戦ぎ物音す、すはやと目をつけ透し見るに、器量勝れし若侍、朧月夜に心をなやまし、春宵一刻千金と、眺めすてたる男つきいづくの、誰ととはまほし、巴九腹を立て、狩場と見ながら不遠慮千萬、しかつてくれんと出でんとするを姫君とめ、男同士は大事のものみづからに任せよと、するゝと立よりてこれ申、近頃申兼ねたれ共ちと樂に入りまして、狐をつらせひ故わなをかけ置きひへば、爰を退て餘の所であそばさんせとのたまへば、男はでなる目付にて、何が扱お爲にならばいづかたへものきませんが、去ながら女郎の、狐釣とは似合ぬ事人に夫婦のあるやうに、狐にも夫婦有り妻を釣られれば其つらさ、人間同前とおほさぬは神ぞ夫は戀知らず、平に殺生止め給へ、狐の代に此男お氣に入らずと手枕の、情の罫に掛らんと御手を取ればもぎ放し、扱も卒爾や初對面に戀知らずとは何事ぞ、戀を知らる故にこそ戀路の爲に釣狐、罪に成らふとなるまいといはれぬおかまひ邪魔になるに、其所のさやしやもと云ひすててまぶしの内にぞ入給ふ、下もへ出づる、眞葛原恨めしげにて行く方もなくね、ばかりや我は化たと思へども、く、人は何とか見るべき是は丹波國能勢と云ふ所に、千年かうへたる古狐のこつちやう、爰に巴九と申て狐釣の大名人が御ざつて、我眷族の若狐をもをひたと釣て殺す故、餘り不憫に存し色有男と變げ、兎や角申せども中々承引致す體で御座らぬ、と申て捨て置かれねば、今度は彼が叔父坊主に化、意見を加へ止めふと存じ、先此如く化てござるが何と彼の叔父坊主に似たかしらぬまで、や、幸これに清水が有る水鏡を見ませよ、ハア、まんと阿闍梨になつて御座る、さらばそろくまゐるふ、程なう此あたりじや、先づ彼が名を呼で見ませ

天鼓

五

たると思ふたれば道の真中に掛て置た。あらおそろしや既に踏まふといいた。是に付ても人間程怖いものはない。いや／＼に懸られてはなるまい道をかへてまゐらふ。ムウ、旨い臭がするとかな。ハテ氣の毒な。後へは足が戻れず先へはつんど行かれぬ。ムウ行かれぬこそ道理なれ。若鼠を油でとろりつと揚げをつた。せめて杖の先に付てなりとも臭ふてみよ。ムウ、旨さうな臭の。是はさうも堪へられぬ。飛付て喰ふか。いや／＼。ハア恐しい只おさませよ。但し食ふ。思へば多くの眷族が取られたも此鼠故。眷族共が仇一打打て食てのけふ我には晴る胸の煙りこんくわいの涙なるらんワイ。くすはや狐の懸りしとしもを振上げかけよれば。忽ち道士の形を現はし妙なる御聲にて。汝知らずや我はこれ。能勢の稻荷に仕へきて千年の白狐うかの神。汝が家の天鼓は我妻狐の皮なる故。附添守護を加ふる所に。太見の縣主夫婦心を合せ。鼓を奪ふ偽りをそれども知らず殺生の。罪を助けに來りしなり其鼓だに持ならば。彌守護に歸りこんこん。わい／＼くはいせんと。勇みて。飛びさり。三層給ひけり。巴丸も姫君も身の毛も立て有がたく。扱は叔父御の悪心にて鼓を取らん爲なりしを。みやうぶの御告ならずんば只うか／＼と渡しやせん。悉なし有がたし彌加護したび給へど。伏し拜み／＼歸らんとせし所へ。時景同宇治太郎むら／＼とかけ來り。これ／＼澤海。御所より急に召さるれば娘夕映を上るなり。其鼓をも上る筈いざ此方へ渡すべし。則ち公卿達御迎ひと。衣冠たゞしく殿上人御代を。廻らし見えにけり。姫君巴丸にさ／＼やきたと宣言なればとて。智略之介兄弟が歸るまでは得渡さじ。一生の大事此時と鼓をしつかと身にそへて。隙間も有らば逃出でんと目をくばつてぞおはしける。迎ひの公卿聲に。ヤア何とてをそなはる親王の仰は勅諭に同じ。異儀に及はば官人をも奪ひ取れと罵る所へ。智略之介武略之介飛鳥の如くかけ來り。片端よりつきのけ／＼智略之介大音聲。我々物詣せし留守の間に筆の

親王より。天鼓を捧げよとてお公家衆の御出とや。シテ其公家様のお名は何と申すぞ承らんと云へば。ヲ、サ我は藤三位の中將同頭の中將よ。ヲ、左様に宜ふからはお公家にまがひ有まいが。扱も不束な御公家衆かな。なふはお公家様達。此鼓は萬歳樂の家に傳はりしを院様よりお望みとや。然らば序に御前人へ萬歳を傳授して。其上で渡し申さんやい才若。お公家様達へ萬歳を教へ申しつかと囁せ。あら興がるたくみやな。むかしのお公家はやさしうて。中比は位高うで。今此お公家は不束にイヤ。面は髯面奴の／＼。ぎもの太見の叔父に頼まれお公家衆といつはりて。寶の鼓を奪はんとは。誠にのぶさうひひき。是から萬歳／＼。やしよめ。生首を打たり。叔父御従弟六尺かさ持。偽のお公家衆。それ／＼。逃すな才若と二人を取て上て落し。冠裝束引剝はそりさげ奴の下部共。紺のだいなし高からげうるたへ廻るはをかしけれ。時景今は現はれしそれ／＼。餘すな宇治太郎と。おめいて掛れば徳若才若姫君をおしかてひ。やいさ悪人共。能い所へ驅つけ姫君を助けまらせ誠に目出度ひひき。いで此悦びに汝等が。生首取らんと太刀抜かざし面もふらず切りければ。言葉にも似ず散り／＼に後をも見ずして逃げ失せたり。ヲ、さもさふす。いざ此上は何方へも一先のかん尤々。是も稻荷の御惠神すしめの萬歳樂。囁せや才若歌へや徳若萬歳。萬歳樂と。和歌を擧げ名をも擧げ行く大和路に喜び。勇みて急ぎける

第二

桃に柳の唐錦。都の彌生眺めん。かやうにひ者は。吳服の中將雪枝が弟。小六郎雪長と申者にて

れい。さる程に餘り都なつかしさに、去々年京都に上りてはひへ共。兄にては呉服の中將勅勸を蒙り、おもだか姫とやらんを伴なひ行方知れずなりてひへば、頼むべき人もなくそのまゝ東へも歸られずし所に、山路の判官梅豊と申侍の情により、當年も京都に逗留致しひ。然るに某若年より笛を好み吹きやひ間、此度都名人の笛を聞き習ひ、藝一道の上手となつて、東の土産に致さばやと存じひ。比も早彌生初の春の今日、早咲櫻、おくれ梅桃は盛り、堀越に、女の住めるひはだぶき。三日の節句遊遊びほそめに明し路次口にて、見る人ありどもしら菊のほかい「飯びつおりひつこもの、桃つみ入れて盃を男雛にさしも草、蓬のあものふくらかに、肥り肉にてひんなりと。下におかれぬ生れ付つきくはしたの立居まで、皆氣の毒の種ぞかし、小六郎思ふやう、京へ上てこのかた随分女中を見たれ共。是程のはつひに見ず、どうぞ近くで見たいもの如何してつり出さん。ヤア、思ひ付たりと。腰より横笛ぬき出し、歌口しめす柳の露花にきてなく鶯の、巢籠りと云ふ曲を暫し、が程ぞ音取三響吹れける。奥には笛を聞き入て皆縁先にこぼれ出で、感に堪へつ、姫君は、扱面白き笛の音や、戀する秋の小男鹿は笛を好と聞けるが、鹿でなければ好た物、ふさての顔が見たいまでと耳を、澄しておはせしが、是なふ女房達、鶯ははいぬる時、今の笛に引されて時鳥など啼くならば、それを肴に酒事せばどうもかうも云へまいと。宣へば腰元衆ほんに左様にひは、なほ興あらんにこりや、ほどきす。粹ならばたつた一聲きなけくどさめきし女中の、遊びぞ風流なる。小六郎つくつく聞き何れあちな者共かな。いで此笛にて時鳥のまねを吹、呼出し見んと横たへて、ほんぞんかけたとかすらせ吹きけし、三響まね給ふそりや時鳥めやれ出て聞ん我こそと。お主下人の別もなく其方よ此方よとまんがちに、路次に駈出で走入りま一聲、所望くとばかりにてうはの、空のみ眺めける。小六もとより好色もの、後の小松の蔭

天 鼓

よりも又吹けしてかみみけるそれあの松にと走りより皆うるくと尋ぬるを、堀の蔭に立隠れ吹けして身を隠すそりやこそあれにと駈戻れば遙か此方で又一聲いやく、此所よ彼所よと走りまはるや後の方おなたこなたに手分をし尋ねれば小六郎、今は隠るゝ所なしやれ時鳥こそ來りたれ、手ごらへにせよやとて各一度にばつと寄り、逃しは遣じとすがり止め女子を、らす悪性鳥、サアま一聲啼て聞しや、サア啼や、啼すば啼して見せんとて、つめりこそぐりなふられて小六術なき迷惑さに、時鳥を打忘れ鶯の音を吹ければ、いやなふそれは遠ふたは、ほんにそんならちつくは、ちうくかあ、鳥やら雀やら鶉やら、色香にをめて花鳥の鳴音後前わけもなし、姫君小六が袖を扣へ、妻なし鳥のねぐら近くおとづれ給ふ雄鳥さま、ほぞんかけたの御聲に妻は雌鳥思ひ懸たぞきかけたぞ、羽がいの下で一番比翼の鳥となりたやと、素袍の袖を我肩にかけて抱き付く、粹の小六初心な顔にて、女中方に嫩られ申さすのが時鳥もほつとしやうげ鳥になつてひ、最早ゆるして放鳥と逃んとするを引止め、姫御前の近比はでなど御さげしむも耻かしけれども、今日よりは自らが殿御に持ねばなりません、出合たを御不承に是非、夫婦の盃と、宣ふ中に女房達鏡子、土盃持來る、小六彌合點ゆかず、はて扱ふつと參つていかい御造作、さりながらあもともふもとも御存じなく、夫婦とは誠しからずと申したる御事と、不審晴れ顔付を姫君見給ひ、御氣遣は御尤仔細を語り侍ふべし、自は太見の縣主時景が娘、夕映と申者、妻が従妹におもだか姫とて、天鼓と申寶の鼓を持たる人のおはするが、鼓諸共御所様へあげよとの事なるを、妻が父母慾にふけ、彼寶を奪取り、みづからをおもだかと偽り宮仕させんと、恐しきたくみ故痛はしやおもだか様、鼓を持って館を出でその行方知れざれば、いよく父母怒り強く搜して殺し寶を奪ひ、妻に告んと巧み給ふ、夫が悲しうひへば、みづから早く男を持ち、父の邸を出るならば斯様の愛事聞まい爲、

天 鼓

卑う殿御が欲さのまゝ、あれ御覽せよ今日の節句の雛遊びも。女子雛は一つもなく男のひいなばかりにて、妾がどのを待つ心、奇縁を祝ひし折からになふひな男の御出は、守本尊の引合せはそんなけりたはその證據猶二世かけて此上は厭でも應でも夫婦ぞやと。背はどく時鳥さすな顔せずしつばりは、いやか〜と有りければ、小六横手を打扱はおもだかの従妹、夕映姫にてひよな。是は〜、某は、其おもだかと契約ある吳服の中將雪枝が弟、小六郎雪長と申者、叔父御夫婦のたぐみにて、おもだか憂目を見給ふとは傳へ聞きひへ共、兄中將は勅勘の身尋ねん様もなき所に、御身やさしき志願の通り夫婦となり、おもだか姫の先途を見つぎ兄と一所になし申さん、して先づおもだか今は何國におはするぞ心あてばしないかとあれば、さればつね〜津の國西の宮のえびす、丹波の國能勢のさと稻荷明神信仰なれば、能勢の里か西の宮かにおはするは必定とて、父母兩所へ内通し、詮議ありと承ればいよく氣遣にひなり、大事の出来ぬ其先に何とぞとありければ、いやなふ少しも氣遣せられな、爰に山路の判官とて思案第一の弓取と、某熱懇致すなり、彼とくはしく相談せば、嫂おもだかに恙はあらじ委細のことは重ねてと、出でんとすればいや申、はや今日明日にもみづからをおもだかと名付、似せ鼓を拵らへ御所へ上げんたくみなれば、片時も早く父の家を先づ何方へものけてたべ、ム、尤々然らばつれて立退申さん、されども白晝なれば人や尤めんいかはせん、ハア何とかなと有ければ、いやなふ幸こそいへ、毎年の家例にて今日の節句の雛遊に、男雛を輿に乗せ、腰元共を供廻りの男に出たせ、殿様事して門外を練遊びひへば、今もそれにかこつけて、忍び出で申すべし、夫こそ屈意サア〜用意と腰元衆、中居茶の間は六尺つゝみ雛乗物しやなく〜と、おつや、おつねは、つゝの挾箱おややおやよは槍振、おもちおふりはおもちで振れさ、〜、振れさよい〜、殿の御入府お道具やい、おつたてろハアイよいよやさ

けり、丹波の國能勢の里、稻荷の社はおもだか姫しん〜歸依の御神なれば、則ち宮司松垣藏人興宗を頼みて忍びお在せしが、智畧之介武畧之介巴丸に近付て、方々は何卒して、中將殿の御行を尋ねてくれよと宣へば、實に御尤いさ〜らば三人「尋ねに出でにけり、痛はしや姫君は、松垣夫婦を力にてなき日暮しお在する所へ、小六郎夕映は案内請ふて入給へば、おもだかはつと驚き奥に遁入給ふを、なふおなさけなやと夕映はする〜と走りより、袂にすがり涙をながし、御身さまごみづからは従妹とは申せ共、ちいさい時より一所に育ち、姉は持ちしと存する我を妹とおぼさずして、何故に心おかる、ぞや、妾が父母悪心にて、御身様の寶物奪ひ取らんとかくまでに、御難儀に逢せ参らするも皆是妾を世に立てんと、愚痴から起る悪念ぞと様々意見致せども、聞入とてもひはねば、兎角屋敷に居ては御身様へ一分立たず、親と一味で無い證據に、是まで尋ね参りたり打解てたべなふおもだか様と誠をあらはし嘆かる、おもだか姫も、涙を流し、扱や嬉しきころさし、隔つる氣ではあらねども、見知らぬ殿御の御連なればといはせも果す小六郎、イヤすこしもお氣遣な者にてひはず、御身と妹背の契約ある吳服の中將が弟、小六郎と云ふ者なるが、不慮に夕映姫と縁を組み、先途を見つがん其ために同道致してひぞや、必らずお心置れなと心底殘さす語り給へば、扱はさやうにひか頼もしの人やや、斯様に思ひ合ふからは、みづからも中將殿にめぐりあはん瑞相なり、今宵は三人一間に寝て越方語り申へし、いざ先づ奥へ立給へば夕映につこと打るみて、小六様ごみづからとは、口で契約致したま〜にて直に是へ参りたれば、遂しか肌を打解てさうしたわけもひはねば、そこらはおの様氣轉をさかし、間を明けて寝てくだんせと云ひすて「奥に入りたまふ松垣が女房夫を招き、なふ何をうつかりとして居給ふぞ、縣主様よ

り頼み故おもだかが寶の鼓をひ取て參らせんと。かたぐ請合ひ御褒美まで受け給はずや。早う春ひ取り給へと妾が直とせつけども。せくなくと油断してあれ。あの如く夕映とやら小六とやら。徒然多くなつたれば最早自由に成るまいか。どうぞ思案が有るか云へば松垣聞て。御身が云はるゝ如く我もはうご行當りたり。何とかなや。よき思案し出したたり。御身狐が取附たりと俄に物に狂ひ。我はおもだか寶の鼓の革に張られし千年狐の夫なるが。おもだか悪性故。鼓の皮を取かへさんため附たりとにつこらしう口をしやべれ。其上にて某智慧を出し。彼の鼓を取らんと云へば扱もよの上分別。につこらしくしやべるとそこは妾に任せよと。我と髪をかき亂し眼を見つめ大聲上げ。ハア來ぞ。山から來ぞ。小豆の飯に芥菜のあへもの食ん。くくくはい。くくくをとり上るを松垣取て引すへ。扱あさましや己れには狐の附たるか。ニ、情なやと喚くにぞ。小六を始めおもだか夕映はしりのできもを。消たたる許りなり。松垣女房をはつたと睨み。己れは何方の野狐何の意趣あつて女房を苦しむるぞ。早く立のけ退かすは己れ目に物見せん。退まいか。とさんく。に打ければ。女房けら。と打笑ひ。ヤア我を大抵の狐と思ふか。あのおもだか寶天鼓の皮に張られたる千年狐の夫狐ぞや。おもだか心不淨にして叔父親を反き。男狂ひに心身を汚す故。稻荷の守りめ切ればてれば彼狐の皮の鼓を渡せ。左様なければつき殺しそれから松垣己れ等はいふに及ばず。一家一門容易は落まじい。落したくば鼓を渡せ。くくくと飛び躍つをどり狂ひて口走る。かねて手ぐみし社人神巫小豆のくう神酒を捧げ。五色の幣帛振立て。くくくはらぎやてい。はらぎやてい。はらぎやてい。はらぎやてい。はらぎやてい。はらぎやてい。あがり。幣帛おつと飛ぶ空の雲井に響く鼓を渡せと。おもだか姫に飛附くを社人神巫立へたて。是々

天 鼓

人々。此狐は世のつねに變り新加治にては叶ひがたし。暫時が間鼓を渡し給へ納得させて詫申さん。はやく鼓を渡されよと聲々に云へ共小六郎合點せず。たとへ狐の祟ればとて。身を放さぬ重寶なれば渡すとはならぬと云ふ社人口々に。まこと渡さずは御身達に祟あらんがそれにては渡さぬか。フ、たとひた。有りればとて思ひも寄すと云ふ所へ。山路の判官梅豊は。小六密かに丹波の國能勢へ忍ぶと告げれば。心元なく思ひあつとより急ぎ驅つたり。其身は二重の大紋に。山鳥の尾にてはいだりける真羽の矢二筋重藤の。弓に取りそへ松垣が館に來れば小六郎。こは明神の御告かと。始終詳しく語りひとへに頼み申すとあれば。フ、何のとかならんと狂女を睨んで。立てば。狂女きつと見。ヤア己れが引目におちる狐とは違ふたぞ。千年経たる白狐なり我にあだを爲すならば。五萬五千の眷族にいひつけ返す汝が命を取る。はや歸れとぞわめきける。判官少とも憶せず大紋の弓手をぬぎかけて。抑ひきめと申とは。天竺のおんたらし我日本。本の天のかく山の楯の木。佛神せいさの一張弓。うら等に日天子もと筈に月天子。握り革をば七重に巻くと七代の天津神。矢すりのどうに弓矢神武聖土。かぶらどうに速日の命重藤の數廿八宿に配つて四方にはいし弓はまるくて外に圍り。弦はけたにて内に位す天地方圓。自から備つて。矢は其中にて業を爲すと人間。天地にめいせられ動靜するに異ならず。たとへ千劫萬劫の狐なりとも某が。神明のかぶら矢にか。りなば。命を失ふのみならず盡未來際畜生界を出やらず。四苦八苦の苦みを受けんとはたい。掌をさす様に覺えたりサア。退か退ぬか去るか去らぬか。如何に。と弓引しはり既に。放さん氣色なり。女房はさたまられず。なふ恐しや最早退を歸ぞと。わぢ。震ひてけつまるびつにげて彼所に伏たりけり。をつとの松垣はつと驚き大事の所を仕損せし。如何せんと思ひしがちやつと思案し大聲あげ。こりや其所な侍めおのれが弓矢に怯るものこそ怯もせめ。かたじけなくも稻荷

天 鼓

大明神の使者なれば弓も引目も怖からず。鼓を渡せ渡さずば己れにも附殺すぞ。渡せくと喚きける。判官聞て、ム、扱は女房を退てはや松垣にお附やつたか。さすが千年切経たる古狐程あつては扱神機奇體。まゝ千年経たる狐ならば少と物間はふ。シテ、當年より千年先の帝の御名。其年の年號は何と申たぞ承らん。さあ何と云ふたると詰かくれば。△松垣ふつと行わたり。ヲ、狐は神通の物なれども年寄たれば物忘れしてふつつりと忘れたは。○ヤア、なんと老耄の狐千年先を忘れたとや。然らば五百年先は何と云ふ。△イヤサ夫も忘れたさ。○然らば近う持て参らう。三百年以前は如何に△それも何も皆忘れたさ。判官かつらと笑ひ。扱々物覚えのない狐殿かな。夫程物忘れする心で千年先の妻狐の事を忘れず。懸幕はるゝは扱もくぬれた狐殿じやなふ。よし何にもせよ判官が手なみの程を見せんとて。太刀のつかに手をかくれば△社人神巫巫々に。狐の大將にあだを爲す故眷族の小狐共皆我々に附たるぞや。彼奴に構はず鼓を取れとどつとよれば。をこへと云ふて突退けはりのけ。ヤア我狐の附をこなひめら。以前より偽りとは見て取たれども。隱便に濟ばすまさんと口先にて威しておけば。ぞんざい千萬サア。己等誠に狐が附たならば。好物の赤飯を振舞はん去ながら。大抵の小豆では赤み薄うて氣に入るまじ。かたつばしから元首を切落し。其血を搾て何かの飯にして振舞はん。誠の狐か偽りか白狀せよと詰かくれば△松垣夫婦起上りニ、現はれたり口惜や。此上は腕づくにて鼓を奪へ彼奴は我々請取たりとすがり付を○判官取て踏付。ヤ、此際小六殿兩人連れて退給へ。心得申てひと鼓の箱を擁抱き。姫君達をおし圍ひ。社人を四方へ。三重○おつばらふ。ヲ、心地よしと判官鼓を好む松垣夫婦。皮に疵の付ぬやうにしらべを懸て打てくれんと一つ繩にて夫婦をからめ。女は小鼓大鼓は男めと。拳を握りて二人が面。たつたたゝたゝつはつた。つたゝゝゝ。拙き悪心殺すも如何に罪作り。今より己れめ音を

止よと縛りながら取てなげ。しんづくと弓と矢かたげ都に誘ひ立歸る。猛き心の梓弓。春の心地ぞいささよき心地よしとも中々申ばかりはなかりけり。

才 三

折節のうつりかはるや月弓の。射るが如くも爾生過卯月の空もいつしかに。呉服の中將雪枝は勸助の身の置所。日影のかづら來人も。つかふる人も波寄する西の宮にお在せしが。妻にもたれん。持つべしと云ひ固めたる澤瀉も。叔父時景が惡逆にて。行方しらすとはの聞けさもいひかたらはん友も無く。侍にも下部にも家來としては只一人。巴丸が兄金目丸ばかりなり。此金目丸生れ付てりちぎ者。愚鈍愚痴にして年は廿七なれ共。心は三つ子同前にて。人の挨拶辭儀作法物云ふ術は猶知らず。雪枝彼を近く招きやい阿呆。汝が知ることくおもたかを迎ひのため。弟巴丸を遣かはせしに。其たよりも無くあまつさへ。叔父の悪人に迫込られ行方知らず成けるとや。我勸助の身ならずはいづく迄も尋ねんに。世を憚かればそれも叶はず。然れば堺の大寺は。澤瀉が父富士丸の墓所。一先立越え彼寺にて住僧に内談し。いかにもして澤瀉に巡りあはんと思ふなり。供せよと夕づく西の。宮より便船し。難波津三つの。濱づたひ。心細くも只二人。徒走路の旅のなぐさめにやい阿呆。何にても一節話へとあれば。あいと答へて高砂や此浦船に帆をあきよ。月諸共に出舟や。はや住の江の。住の江や。も忘れまじ。何じや忘れた。扱々いかいたわけ其次はな。はや住の江の彼方なる。堺の寺にぞ着きたもふ。かくて中將寺中にはいり給へど。澤瀉姫の行方とて尋ねんよすがもなき折節。寺僧に行あひ是々尋ね申度事のひ。此寺に故三位富士丸と申樂人の墓所由。我々ゆかり有て廟參致ひへば。教へてたべと有りければ寺僧心得ぬ顔付

にて、由縁ありて墓参り成さるゝ程の御方の御存じなきこそ不思議なれ。其富士丸の娘澤瀉姫と申人、叔父縣主時景に養育せられおはせし内、登の親王より御宮仕へに召されし所に、吳服の中將雪枝と申す勅勘の人に密通あれば、女なれ共宣言をそむくおこの者尤も朝敵同前。其者の父が墓王土にはかなはしとて縣主が承りて去比富士丸の墓所堀穿ち、白骨を山に捨て石塔も打碎かれしとてはひはずと語り、教へて通りける。はつと驚き中將は暫し、呆れて御はせしが、やい金目丸、今の法師の物語聞つるか、汝はしかと知るまじきが、我勅勘をうけ流浪となりし其起りは、大内に在りし時陸奥の内侍とて禁中一の美女に戀慕せし、其咎に因りかく勅勘を得る。うれさへ有るに又澤瀉と密通故、親王の御とがめふかくおもだかが父の墓、屍迄も罪を得る事は皆我一身の落度なり、おもだか御所へ参らずば彌とがめ強くなり勅勘御免あるまじき。所詮おもだか我事を思切り、親王の心に従へば、波風たゝす某も勅勘御免有るべきなり。ごうぞ彼が親王へ参る思案ひざとも談合、ふんべつ有らば云ふて見よ、ごうがなとありければ、あはうの金目も小首を傾げ、ハアごうがななわ、ハアごうがなと餘念なく、思案するこそやさしけれ、中將しばらく有てやれ上分別が出たわく、先某は腹切て死たる分にして何國へも落行べし。汝は此小袖刀脇差書置を取り持ち、何卒しておもだかに巡り合ひ涙を流しはふには、兎角我世に有る故心中立てて旨を背き、一門眷族勅勘の身と成こと未來の劫も恐るし、中將可愛と思はれば親王様の御心に従ひ、宸襟を休め奉れ、さも在らば來世にて長く夫婦の契をなさん。若しさもなくば七生迄夫でもなし妻でもなし、回向も手向も受けまじき。來世で我に添はんと思は、此世にて親王様の御心に従へと、返すくの遺言にて且那は腹を切られしと、誠しやかに涙を流し書置見せて有るならば、台點せぬとよも有らじが何と呑込だかと宣へば、あいくとは申ながら、心には能呑込ましたれども。

一へんや二へんでは覺えにくし言ひにくし、何通も教へ下さればと云へば、夫はよく云ひ聞せん。又書置をも認めん先々是へと門前の茶屋をかりてぞ入給ふ。斯とは知らず、おもだか姫人々のかいほうにて、松垣が難儀を逃れ父の菩提所とて此寺の、宿坊の由縁を求め深く忍びでお在せしが、中將雪枝の御行方、御息災安穩に尋ね合せ給へとて、住吉に口参し下向の道にて金目丸にはたと行逢ふ。やれおとは巴の兄金目丸にてあらざるか、我こそはおもだかよ扱婦しや中將様は何方にぞ、早く逢せてくれよとあれば、金目はこゝぞとならひし通り大聲上げてぞ泣にける。なふ心元なや涙の體は、ごうぞく様子を語れと言へば、なふ悲しやひよんなことで且那様はお腹をと、云ひもはてぬにヤアそれは誠か悲しやともだへ、こがれて泣給ふ。扱もく情なや叔父御夫婦の悪心の様々浮目をまぬかれしも、一所に添はんだのしみにて智畧之介兄弟、巴丸諸共に尋ねさせし甲斐もなく、御自害とは何事ぞ、誰に恨の有事ぞや御遺言は無かりしか、語れくと抱つき聲も、惜まず泣給ふ。ア、御遺言とて餘の儀もなし、兎角親王様に反きては日本の地に住むことはならず、先の世迄も夫婦になること叶はねば、此世では先我事をふつゝりと思切り、親王様へ上らせ給へ夫ならば來世では、めうとも夫婦眞夫婦になりやさん、我を可愛思はれば内裏へ参り給へとの、返すくの御遺言お書置も是に有り、又此太刀お小袖は御遺物とて渡せとて、且那様の教への通りついてもおとしも致しませぬ。ヤアまだ忘れた此あとで泣く筈じや、なふ悲しやくと聲をはかりにわあく、身を投うちてぞ泣居たる。姫君はたへ入咽びかへりてお在せしが、ア、曲も無き心や、假令天子なればとて思ひ變て肌をふれふか、君を先立て片時もながらふる心でなし、同じ道にと刀を抜き自害せんとし給へば、なふ情なや夫ではわしが叱られますると刀もぎ取りつきのければ、やれつれなや如何に御身が止むるとて、いきて有らるゝ道ならず淵川へも身を投て、是非

に死ぬるぞひと思ひに死なせてくれよ刀をくれよと。取付給へば金目丸の其等では御坐らぬと。逃れば取付引止め。是非に死なんとすがらるれば詮方なきにあぐみはて。エ、氣の毒な旦那の思案とは皆すまたじや。有やうにも云はれず云はねば又死なふと云はる。どうもしちやうに懸つたがなまなかなりやうに云ふてのけふか。いや。云ふては叱られふ。ハア何とかななあと獨語を聞付姫君不審晴れ給はず。是々金目。おとが今の云分一つとして心得ず。有様に云へと押伏せ何ぞとせちかはれ。エ、情なや私獨に迷惑させ。あんまり是はむごい仕方そんなら誰にもかくし給へ。旦那は死はなされぬ共。お前様を内裏へ上御苦勞やめて進せん爲。私に今のやうにと云ひもあへぬにおもだか姫君とせき上げ上氣して。ヤイあほう皆迄云ふな推したり。我より先に大内にて陸奥の内侍とかやと狎れ親みの有と聞く。昔の戀に引されて自を思ひ捨て。親王様へ参りなば思ひのまゝに陸奥と。添はんが爲に偽りて腹切て死たるとな。エ、腹立や嫉ましや叔父に悪まれ世に疎まれ。生る瀬死る瀬渡り凌ぎし思ひの淵。浮世の望是一つと忍びかためし一念の。胸の巖は。われじ碎けし年月焦れし戀男。他の花とはよもなきと死しても添はんと思ふ身が。此世で添で置べきか勅命宣旨は愚な事。神の託宣佛の御法反かば反け奈落の底。上は有頂の天迄も追かけ行かんと馳出で給ふを金目すがつて引止む。振はどけば抱きとめつきのくれはすがり付き又。引止むればもぎ放しなながら邪淫の狂女の如く戀慕に迷ふうば玉の。髪も亂れ氣も亂れ戀しなつかし嫉ましと。空にかなざる恨みの聲起つ。轉つ馳出るは憐れにもまた。三重。おそろしし。神に祈りの。御日待。五月五日の短夜も待ば久しの菖蒲草。芦屋の里の菖草に女中の住居たゝならぬ。琴の唱歌も植込の松に通ひていとやさし呉服の中將雪枝は。堺の濱よりしやうごもなく夜半にまぎれてとほくと。足に任する五月開るなかに稀なる女歌。心悪げの柴折戸は古郷戀しく忍ばしく。離れ外而

に立やすらへば。よし有る女の隠家に。日待の遊と覺しくて。歌ひかなづるなりけらし。あら不思議やあの歌は。一歳我契りてし陸奥の内侍。歌ひ出せし一曲なり。斯る田舎に誰家の人か傳へてはやるなつかしやと。更行鐘も有りし夜を思ひ合して聞さるし所に。奥に老女の聲高く是々腰元衆。最早夜明に間も有るまい。お日様への供への粽お庭に於て備へましや。あつといらへて障子を明け。庭に「供ふる音聞ゆ。中將打うなづき。ム、出来た。日天子へ粽を備ふるさうな。今朝より食事に乏しければ。身にも足にも力なく行先の旅覺束なし。何でも此粽を盗み今宵の糧にせんものをと妻戸をそつと押ければかけがねはづれ開けたり。聞はあやなし軒の蓬やあやめもわかず香をとめて。そろり。とはひ寄れば三方に行當る。誠に天の奥へとは此事なめりと押頂き。油團を解て押開き包まんとする所に。後の障子を明る音に驚き粽は懐中し。油團を捨て。縁先の手水鉢の石に身をよせそる。ふるひてお在し。此度は又神酒を持お腰元立出で。ヲ、くら。粽は何所らに有らんとさぐりあつてハア。申お局様。そなへの粽を誰取たやら見えませぬと云ふ聲に。中將いよ。息をつめ身を縮。めてぞお在しける。以前の老女障子の内より。なふは白洲に置く故犬めが引て行つらん。其は神酒をもこぼさぬ様に手水鉢の上に置や。おいと答へて神酒を持そるり。とすり足し。手水鉢と居ならびし中將の頭の上に神酒の三方置ければ。足の内へつふりは入肩の上に坐るにぞ。よしと思ひてお腰元障子の内にぞ入にける。中將元より酒好にて。是も天の與へぞと手を指のべて神酒の鏡。そつと取て三方のぐりかたより瀧飲にすつと乾て我を忘れ。ハッ。よいちやつと口を押へ。夢になれとぞ觀せらる。や。あつて局は縁先に立出で。お日様のお出まで。御經讀誦申さんにて手水をと三方を。そつとおろしなふ誰そ手水をかけてたも。腰元は柄杓を持出でいかうくらのとかなと。中將の月代をかざり。とがすれ共。水の有べき様はなしイハ

申お局様。宵に汲たる水なれども石鉢がもるかして。水は雫もなしと云へば局あざ笑ひ。あのいやるとはいの。何の石が漏ふぞ忘れて汲ますに置きつらん。誰汲たての水を持て来て入ややあど呼ばれば。南無三寶頭から水掛られては悪かりなると。椽の下よりくぐりもておもてへ。漸く抜け出で。溜息ついてぞ。お在しける。主の女君行燈もたせ椽に出で。まだ夜深さうなりねふさも来る。庭に下て目を覺さんと飛石つとふ高下駄に。油團包を踏めてア、怖。是は誰が置きつるぞ開き見よとて腰元衆。解て見れば。是は。皆々女ごの文玉章扱は下の男衆の。いたづら文ぞ名書を見ていざなふらんとさゝめければ。なふ音高し此文を誰手跡かと思ひしに。皆自らが筆にて有り。我大内にて陸奥の内侍と呼れし時。呉服の中將雪枝朝臣と云ふ人と。深く契りを交せし故寂聞にひき。不義の科とて中將殿勅勘を受け給ひ。妾も此身を成りけるが。其君へ自が取交したる文ごもの。爰に在るこそ心得ね。誰が持て来る不思議やと宣ふ中に中將は柴折戸をほとくと音信て。拙者は行暮たる旅の者。御門の外に宿りひ所に油團包を犬が啣へ。御門の内へ入ぬれば慮外ながらお尋ねなされ。此方へたべと有りければそりやこそ主の出たるは。如何様の者なるぞと各々覗いて。立歸り。なふ。斯様の文持ばさぞ有らんと存せしに。紙帷子の單物山田の案山子に異らすと一とに。とつとぞ笑ひける。内侍御覽は是々かたくな笑ひそよ。妾容は賤しくとも此文を持ちからは。中將様に由縁の人か呼入れてよそながら。御噂の聞まはし其者召せとて燈火を。彼方にそむけ闇がりの奥床。しくぞ座し給ふ。女房達柴折戸あけ是旅の人。包みし物も返すべし。又何やらん御用も有れば是へ入て茶でも飲み。夜明て行やと呼入れば忝しと内に入り。椽の端に腰打かけしほくとせし有様を。みちのく奥より見たまふにいにしへ契りし中將殿なり。あらなつかしやと出でんとせしがちやくと心をおししづめ。是々旅の人。御身の姿たゞ人ならず。如何やうにも古は殿上

天 劇

三三

のまじはりをも爲されし人と見請しが。何故左様に零落給ふぞ。なふ痛はしや語り給へと他になして問給へば。中將あたりの女中に向ひ。あの闇がりよりも仰せらるゝが奥様にてひか。ア、さすがにてひよ。斯様の體なる某をよし有る者と御覽有り。憫はしなごのお詞はいやはやおやさしや忝なや。如何にも御目鏡の通り其昔は。雲井の住居も致せし者。仇なる戀に名を流し。斯様の風情と成てひ。され共是も戀故と昔の玉の臺より。草の袂の樂みは心も軽く身も軽く。彼孫晨が葉一束。許山が持ちし瓢箪の川ながれ。ふらりくと。世を渡れば。何の苦もなく。行付次第。一寸先は。闇の現の夢の世の中悔しうもひはず。戀もぬれもいたづらも今仕度てもならぬ事。今で思へば昔致せし悪性が。徳に成てひと氣作に云ふてぞお在しける。内侍は涙にくれながら。御身の落せし文の中にしのおずりと云ふ文もあり。おもだかど云ふ文も有りいづれが誠の戀なるぞ。語り給へと有りければ。是は一大事のことを御尋ねひものかな。去ながら。お志の忝ければ語て聞せやべし。其しのおずりと云ふ文は大内に有りし時。みちのくの内侍とて禁中一の美人なりしが。あぢ者のしなもの。たてこきの通り者。歌を詠で手が能て。琴が名人音曲のよさ。高いも卑い男たる者心を懸ぬはなかりしに。どうした縁にや此鼻めと。相惚にはれ合て互に忍び逢ふ程に。宮仕の隙々に弘徽殿の細殿や。清冷殿の几帳の蔭里歸りには小宿を拵らへ。階老同穴は磯千鳥比翼連理の契りの中。榮耀が餘り少せかせて。嫉妬しられて見たしと思ひ。折しも八月十五夜歌の御會の小夜更て。さる女中の局に往き酒盛し戯れて。じやらくら遊び居ることをみちのく聞付腹を立て。十二一重緋の袴ぐわらりと脱で白無垢に。ひつしをさの帯をしめ小裙はら〜かいごり前。丈なる髪をばつと亂し。十二の局の長廊下をぐわら〜とかけ來り。生畜生の男めと胸倉取て引廻し。彼方が睨めば此方もねめ。兩方睨み合ふ程に夜半の鐘から睨み出し。おひだしなるまで睨み合ひ

天 鼓

三三

男早も有るやうに。此人ならで男はないか男盗人いたづらものと云ひ譲取て投げれば。局の籠を打破て。まりかゝりまで投付られて砂まぶれになる程に。そりやこそ局に喧嘩が出来たと女御后女嬪お末。卿上雲容隨身白丁其次々の腰元下女。ちちのお主の仕返とて彼所ではたゝき合ひ。爰下は打合ひ跳合ひ鐵漿壺にこけかゝり。頭からさつとあび眼も鼻も眞黒に。三ばさもごきな女中を見て。やれ黒坊が出たはなふ怖やとて逃さまに芋煮る鍋へ足踏込みあら熱やとて泣叫べば。やれ醫者坊よ檢校よと呼につかへば聞違へ。取揚ばやを呼で来て火創の女の腰を抱き。しきりが来たぞうんと云へ。くわめくやら種鉢茶碗にけつまづき。皿鉢打缺くへつゝ踏碎く。茶釜。茶壺備前徳利踏碎くあつたら今年の盆帷子盗まれたとわめくやら。庭では犬が吠るやら屋根で猫がさがるやら。前代未聞の妬氣いさかひはや。報聞に達しう。其夜に勅勘蒙りて冠裝束召上られ。斯様の姿に成り果てい。さ程契りし中なれども。其陸奥より我家へ其後のいなせのたよりもなし恨むに付ても戀しさのやむとなさの忘れ草。爰にふとみの縣主時景が姪たりし。おもたかこ云ふ女に心を通はし。せめての事にうさもつらさもゆかしさも。慰まばやと思ひ互の心憎からず。深き思ひとなりし間に此澤瀉も。盤の親王より御宮仕とて召るれ共。某に心中たていづくともなく落げる由。宣言を背く曲事とて彼が親の墓迄も。掘捨られしと承る。兎分澤瀉に我等が事を思ひ切せ。親王へ上ん爲相果しと偽り。斯様にさまよひ出でい。一方ならず二人迄。思ふにそはぬ戀の道。遇ぬ縁とは存じながら語るに付て床しさも。憎さもまさりいと。涙にせきくれ語らる。陸奥は中將の。やつれはてたる御姿昔を今の物語。身にひししと思ひ出られ始終泣入り。おはせしが。されともさめらぬ體にてなふ旅人。只今の物語我身の上に能似たり。自も其いにしへ。さる御所に宮仕。御身のやうなる戀しりの男と深く契りし故。其男も御身の如く御殿の内を追出され行方。知らず

天 鼓

二五

なり給ふ。自もおいと云申。尼法師ともなり世を捨んご。二、に忍べども上より出家のおゆるしなく。つらき月日を送るぞごよ。彼殿御は斯ども知らず。御身の陸奥を恨み給ふ其如く。自恨み給ふらん。女の殿御を思ふ心我人變る事はなし。今自が云ふことを。其陸奥の意見と思ひふつと思ひ切り給ひ。又おもだかをも内裏へ上げ勅勘御免の訴証あれ。ア、いつの世に誰人が戀と云ふこと始め置き。人に苦勞をかけぬるぞと聞きを中の籠にて。我身をよそのうき涙。皆々袖をぞ絞りける。かゝる所におもだか姫。中將殿のあどをしたひ火影を力に此屋の門。抜捨し草鞋と扇のあれば拾ひ上げ。不思議や是は我方より中將殿へ贈りし扇。まさしう爰に給ふべしかくれてもかくさじと。門あけなく打たゝき。此内へ服の中將雪枝と云ふ人をつけこふたり。我こそ妻のおもだかなれようも。死したりと偽り。我を捨て落給ふよな。爰明け給へと叩き叫べば中將驚きは何とせん。彼に逢ふては某いよ。答の重くなれば。どうぞかくしてたべと有る陸奥顔をかくしながら是々女房達。爰はみづから思案あり。先其御方を奥へ入れ。衣裳を召替へさせよとく。と奥に入れ。其身はおもてに立出て。誰様なれば夜中と云ひそふな事を宣ふぞ。是の亭主は留守なれば盡よりおもてをさしこめて。左様の人は名もさかず。近比狼藉千萬どあればイヤ偽りを云ふ人かな。慥な證據有からは是非に入らんと推入るぞ。内よりいれじと押出し互に強く押す程に。柴折戸開けてつゝと入る推参なりと女房達。手取足取突出し柴折戸。はたど押する。おもだか怒てこぶしをにぎり。ニ、口惜しや淺ましや女は相見互ひなり。たど中將おはせすとも。詞でなりともあはれまんこそ情をしれる道ならんに。扱腹立やと躍上つてどうと伏し消入り。泣き給ふ。サアしすましたり。是々中將様。偽り返しめへば。此際は何方へもはや落給へと宣へば。なふ御身は陸奥の内侍ならずや。扱なつかしやと抱付んとし給ふを内侍つきのけ。ニ、其御心故にこそ。

天

鼓

二五

かやうにおちぶれ給ふなれ。自もおもだかも御身様に連添ふては。帝の逆鱗世の聞え勅勘いよく理なり。御出世のあだならんと宵より名のらす忍び参らせ。おもだか様にもつれなくわたり偽り誦していぞや。妾が事を思切り。おもだか様をも内裏へ上げ。勅勘ゆるされ世に出で、耻辱をすゝがせ給へ去ながら。此世の名残の盃を。自飲でまゐらせんと。二つ受たる盃に沈む心の埋れ水。おもだかの魂は焰と成てぞ。三重、浮みける。うれ共しらす。取上げてはすより早く内侍の顔色忽ち變り。なふ中將様よりも我を捨給ふよな。親王様は扱置梵天王の勅命とて外に心のうつるべきか有りし誓は遠へまじ。是非二世迄も我夫と抱き付けば中將は。怖敷も興さめて。扱はおもだか一入替りしと思ふにぞ。そつと身の毛の立ければ。つきのけふり切給へとも。うれはつれなしみづからは言替したるばかりにて。終に一夜もろはぬ身に何を見かぎり見おとして。いつのまにかは秋風の立るに。物を思はする波のあしやのわしがきに。へだつる心つらにくや。うらみのかづら。くり返し思ひ返せと捨難く。忘れ難なの戀の刃の鋭くして。憂き身も命も寸断に切らば切れ。きつても切ぬは戀の一念生て思へば哀別離苦。死で又来てそのくく。その先の世も慕ひ待。人と生れば人と生れ。男神とならば女神となり。鳥と生れば鳥となり山野の獸うろくづ共。生れかはつて何時までもつがひ離れぬ我妹脊放ちはやらじと泣叫びかつばと伏して。絶入れば。移りしほむらの魂は。返れど人の目に見えぬ女の。思ひぞすさまじき。中將はあきれはてとほうを失ひおはする所へ。縣主が指圖にて。嫡子宇治太郎家來の者共引具し内侍家に来りしが。ふしぎや女のふして有と引上げ見ればおもだかなり。エ、彼奴が是に有るからは中將があるに極つたり。先其女を搦めおけ戸を打破れとひしめければ。内侍も今は正氣付。あれ開給へ追手ならんが落し参らせん道もなし。此柱を登り天井より屋根へつたひてにげ給へ。心得たりと柱に取付き

天 鼓

すべり 「廻はりてはひあがる。宇治太郎戸を押破りぞつと入り。此内に呉服の中將雪枝があらん早く出せとのしりける。陸奥側發の上臈にて。されば昔のよしみとて中將來り給ひしを。叶はぬ由を申けれど。是非にも奥へ逃げ入らるゝ搦め給へとたらさるれば。ヲ、よくこそくのかさじと。一度にぞつとぞ走せ入ける。中にこそさかしげなる若者鎗引提げて跡より來り。何とやらん屋根の上がめさくといふこそ心得ねと。そばなる櫓子を軒にかけ。鎗を捨てあがりしは危うかりける。三重、次第なり。中將今は是迄なり諸天三寶加護し給へと。櫓子を取て引替へせば宙にさがつてゆらめくを。内侍鎗を押取上げ胸中をつきとほし。落る所を埋れ井の井筒の中につきふする。奥より皆々走り出で兎角屋根が氣遣し。突けや登れとひしめければ内侍聲をかけなふこれ各。中將めは自が。此井の内へ突入れたり皆々寄て殺し給へ。エ、でさましたそれくと鎗さしおろしつく隙に。中將ひさこしわなくと生たる心地はなけれども。漸屋根をつたひつ。辛き命をのび給ふ。宇治太郎大きに悦び。中將めは殺しつ。おもだかめは搦め取る寶の鼓もこつちの物。先おもだかを引出し討て捨んといふ所に。金目丸大汗になつて駈來り。私に呉服の中將が家來金目丸と申者。世になきまを頼まんよりはと分別いたし。即ちおもだかが家の寶天鼓を盗み差上ひ。今より御扶持を下され。召仕ひ給はれと。鼓の箱を差出せば彌太郎悦喜してヲ、ウ、ウ、ウ、でかいたく。褒美は望み次第といへば。おもだか姫齒がみをしヤイ物しらすの大だわけめ。せめて御主の爲にこそならずとも。あだをなすは何事ぞや恩知らずの道知らずの。人下なしと怒らるれば。イヤ申太郎様。あの口がにくければ私に刀を御かし給はれ。彼奴が首を切て見たうみと云へば。ヲ、サ逆も生ては置ぬ奴。切て見よと刀を渡せばおつ取てひらりとぬき。澤瀉を縛めし繩すんく切ほとぞ。打掛を脱で捨姫君を押固ひ。やい宇治太郎のすつばりめ。何と此阿呆が智界を見たか。姫君毒

天 鼓

ひ返さん爲箱の内なるは風の神の古太鼓。欺すに手なしと云ながら己れは我に二三日もつよさうな阿呆
ぞとかんら〜と笑ひける。内侍奥より走り出でなふおもたか様。我こそ陸奥の内侍なれ是へ〜と呼
び入れヤイ宇治太郎め、彼の井の内にて殺せしは己れが連し侍よ。中將様は自が智畧を以て落したり
女に欺され彼態はど一度にどつとぞ笑はる。宇治太郎齒がみをしあれものな云はせぞ討とれ承ると
つと寄る。おもたか姫館おつ取り内侍は長刀ふり廻し。金目は大刀をさしかざし面も振らす突立て。切
立てなぐりまくれば宇治太郎等共諸共には叶はじと夕風に秋の木の葉のちり〜。むら〜は
つと逃行けば夜は波の〜と明方の日待の御利生ありがだし。たふとし目出たし喜ばしやと皆再拜。三
拜かぎりなし

あつら娘なり

「慕ひ行く。情の渾邊。思ひの沼。懸に育ちしおもたか姫。夫に逢はんを力帯。心一つにとつおらつ。
杖よ。笠よ。夕波の立行末も。當途なき。おる〜涙目の内の。明方。残る星の影ちらちらちらら
つすりと。心細くも忍び路や。のこり大寺出て行く。叔父に凭りし折柄はかりそめの物詣にも奥よ車と
さはがしく。腰元はしたすゑ〜まで。都女のなりふりに。しやんと小裙をかい捕へ。行列たて、長羽
織。岸の小松の引かへてねぐら。定めぬ山鳥己が容の朝露に。數は一二みづかき。腰を屈めてすさか
てに。たむける幣もそこ〜に。男思へば神々の社やも目に付す。七度の濱の波間より。見渡すうみの
。此處彼處あれは明石よ。こゝは須磨と。心に問ひ心に答へ夕日うつく西の宮右手に。鏡塔の影
。はたう晨に飛ぶ南浦の雲。龍うづまいてさかのぼる。天王寺ぞと伏し拜み。しよろ〜川の一條に港

み。がちななる板橋の。秋行水の暑を避て。さつと吹來る冷風の松に入ては夢をか〜。松はたいらか追手
馬場先鬣馬。がいに冷たい今朝の雪。殿の御馬はさび月毛。連錢葦毛かけかすげ。し〜打ては驅翻
り。江戸育ちのしげ〜男。お馬の口をばしつかとさ。つりりん〜鬣男。〜。つりりん〜
〜。りんとはねたる鬣男。つなぎこめたよ。戀の關札と。節をこめたる篠竹の。杖にもつる〜てふて
ふのなれもひとりよ。我とてもあはれは同じ。野邊の草。董こん菊女郎花むかしもつまにより風の。恨
みてくねる此花は。はりの。つよいは女の疵と。え知れぬを〜と。我身最負に。引潮の入船あ
れば出る舟。並木の。間にはの〜と松露拾へるわらんべの。打まじはりて振袖の。袖に結べる數々の
片言勝にうたかたの。泡で思ひはかす〜あれと。よしや雪にや簑も笠もぬれしはたれてハッハ。鐘を
かこちて。待宵は。腕を曲ては就とし曉うらむくたかけの。きつねはめなでまてしはし鳥の内にもいな
おふせ。妹春教へし手習の。戀の墨色あかぬけてきさう肌にて忘れぬば。人もかくやと疑はれわらふ時
あり泣く折あり。獨亂る。昔の石しちやうにかゝる憂さ辛さ。よしそれとても夫ゆゑ逢たらをうしてか
うしてと心の内にもくさんし。一叢茂る森の内にや。立。やすらひ。三重。給ひけり。是は扱置。智路之介
兄弟は中將様の御行衛。尋ね廻りて足引の大和路におもむかんと。木津の渡に立懸り船出せとぞ叫びけ
る。渡守さしよすれば。兄弟打乗り押出さんとする所に。十五六なる童一人舟まで〜と走り來て飛乗
り。急の若ぞはや出せ船頭竿を取直し。是々乗手乗。一人前に十錢づ。各用意したまへ。是程の小勢で
はあふとをりない。つぶやく中に程もなく舟は岸にぞつきにける。智略之介兄弟は料足を相渡し。
舟より上れば彼童飛おりゆくを船頭追懸ひしと捕へ。是運賃は何とすぞ。此みせよせの渡しをた〜乗
らふとはあたたか餓頭サア。錢つけとねめ付るヲ。とはり云ぬが誤なり。急用にて泉州津迄今日の中

に行ねばならず。勘忍して通してたべ其返禮には。御身が一家一門悪魔悪病の入りぬ様に守てやらん。錢は一文もなし是非に〜とかけ出るを。ヤアするなく。うらが家へ悪病悪魔の入りぬやうにわごりよが分にて守らふか。いやはいきがたりの大盗人。何もいらぬ錢を出せさなくば河へ取てはめん。引すり戻せば智略兄弟船頭を押止。持合ないならば乗ぬ先にことばらで。是は船頭が道理なれ共せがれの事なれば。堪忍せよと云ひけれ共いやく。理不盡なるしかた。其上代に身が一門を守つて取らせんとは大がたりのとつこめなり。おのれ所へことはつて急度をきめにせんと云へば。此童氣の毒げに。身の上を語つたり共よも誠にはし給はしが。我はもと人間にあらず伊賀國にかくれなき。上野の彌左衛門狐と云ふ老狐が子彌介と云ふ狐なり。聞きも及びつらん故の富士丸の息女おもだか姫。狐の皮の賣の鼓を持って泉州堺の寺に隠れ忍びまませしが。彼おもだか密通の男吳服の中將の跡を慕ひ。鼓を寺に捨て置何方ともなく出で給ふ。然るに此鼓は。丹州四松の白狐の御臺狐の皮なる故。四松殿の仰にて日本國手下の狐三日代りに番を勤むる。今夜より明後日迄我等が親の彌左衛門。當番なれども少し用ある故名代として某。只今堺へ参るなり。をそくて番の時違へは四松明神の咎めを受け。官を剥れて野狐となる。はお侍と見受たり宜しく頼み奉る。偽ならぬ我委聊かしながら見給へど。詞もひかぬに野干となつて南を指て驅り往く。二人は驚きなふ我々こそおもだかか家人。しばし〜と呼はれどもはや行方は無かりけり。兄弟は立返り。扱は又姫君も堺の寺を御出とや。狐の守りめ有るからは鼓に於て氣遣なし。猶々姫君中將の御行衛を尋ねんと船頭にも鳥目あたへ智畧之介は大和路へ。武畧之介は都路へ別れてこそは。三重上りけれ。去程に。太見の縣主時景子息宇治太郎。堺の寺に澤瀉姫忍びお在する風聞あれば是非に天鼓を奪ひ取り。親王へ捧げ申おもだかを非分におとさん。我々利潤に爲らずしては身の置所立

がたしと。やひとをえぬ邪の悪欲日日に超過して。あばれもの數百人かたらひ寺中に込入りおもだかの宿坊を。二重三重に取圍み賊を〜とぞあげにける。塔頭大きに騒動し何事やらんと辨めければ。縣主大音上。故富士丸が娘おもだかを當院に匿ふよし抑彼女は親王の宣旨を違背し。救勘の雪枝に戀慕せし條朝敵同事の大罪人。早速女を此方へ渡せ又彼が家の寶。狐の皮の天鼓をも急いで渡せ。若しいたはり餘黨せば同罪。たらんと罵りける。宿坊威儀を正し門前につゝ立て。抑我佛法は王道の補助天子是を輕じ給はず。普天の下王土なれば誰か竹園親王の宣旨を違背申さん。去なからおもだか姫の事は親王一旦召る〜といへども。其後強て御尋ねもなき段世こそつて存じの。去に依て愚僧代々師且のよしみ故かくまへ置に憚りなし。然るを各宣旨と偽り富士丸の墓を掘り穿ち。夫さへあるに只今道場を兵塵にかけ。姫を渡せ天鼓を渡せなごとは近頃狼藉とや云はん邪義とやせん。其上おもだかは中將の行衛を慕ひ此寺にはひはず。又天鼓をばいかにも當寺に預かれども。おもだか歸り給ふ迄は人手には得渡さじ。たいし劍戟を以て理不盡に取らんとらば。是非に及ばず御相手になり申さんと憚りなくぞ答へける。宇治太郎から〜と笑ひ。扱々あたじさいらしい芋掘坊主片端から縛り付け。鼓を奪へと下知すれば理も非も知らぬ無法者。鎗長刀太刀刀ぬきつれ。〜と喊き叫んで切て入る。法師達も命をすて追まはし追もどし。二三扁支へしが大勢に打すへられ住持を始め下僧迄。残らず擲取られしは無念。云ふも餘り有りし。時景親子笑盡に入り。ヲ、でかした〜此上は。探して鼓を取れやとてめんざうに押入りける。當番の彌介狐鼓を取られかなはじと。おもだか姫の姿と變じ鼓を抱き逃んとするを時景見附。ヤレこいかた〜澤瀉が落しとは偽ぞや。鼓を持ちて逃げ出るは餘すな取と云ふ聲に。馳せ集つて止んとす元より野干の其奇特。取て投伏せともせず切て懸ればひらりと飛び。打つければかいく〜り飛鳥などの如くな

り時景すかさず飛びかゝりむんずと組で脇腹を。二刀指貫すきやつと云ひしが目を見出し。振返りて時景が首の骨にしつかと喰付切れてのけと振廻る。宇治太郎これを見て扱すまじき女めと。たゝみかけくさんどくに切殺し。難なく天鼓を奪ひ取り半死の父を肩に掛。悦び勇み立歸る是わざはひの初めなりとて皆舌を。まかぬはなかりけり

才人

斯て笠の親王は。和州三笠山の麓に御遊の御殿をしつらはせ。折しも七月初七の夕乞巧奠の音楽有べしと。織女祭のかし衣歌人文人梶の葉に。心をのべて諸共に君を慰め奉る。時に縣主親子の者天鼓を携へ參上し。扱もおもだか君御心を懸られし其御情を振り捨て。勅勘の中將雪枝に愛着し行方なく罷りなつてひへごも。一天の皇子に惡まれ奉り身の置所なきまゝにや。自害仕てひなり。然ればおもだかが一通の書置。此天鼓を捧げ奉り。拙者が娘夕映をおもだかと思召。御宮仕に召上られば。草葉の蔭の悦びと遺書仕ひと。誠しやかに涙を流ししみとぞ奏しける。親王驚かせ給ひ何澤瀉は死したるとや。ア、不憫やみづから彼が噂を聞き懸慕ひ。しばし思ひは懸しかど。呉服の中將雪枝と深き戀路を聞しより。其後ふつと思ひ切過しとさへ悔みしに。我故自害したるとは不憫の者の心底やと。打しほれさせ給ひける。扱重ねての仰には。澤瀉が家の本領故富士丸が家督縣主にえさする條。追善忘るとなかれ。又汝が娘のと。尤もおもだかが遺言とは云ひながら。世の聞え懼りあれば必ず望むにあらず。幸今宵七夕祭を巧奠の音楽におもだか形見の天鼓打て心を慰むべしと。御手づから取上させ打給へども聲出です。あら不思議や若し打方の違しかと。取りなをして遊ばせども更に其聲出でざりけり。伺候の諸卿不審晴れ

す取や打て見給へごも。いよゝ其音出でざれば親王を始め奉り。是は希代のためしなりと眉を。観めておはします。時に雲林院の左少將進み出で。昔唐後漢の代にかやうの例もひひき。如何さま主の別をかなしみ鼓も聲を出さぬと覺えてひ。折から近き于蘭盆會。聖靈祭る折なれば此猿澤の港を八功德池になぞらへ管弦講を以て水施餓鬼を仰せ付られ。彼者の菩提を御吊ひもやと申さるれば。げにこればさも有るべしと其役々を仰せ付られ。なき魂まぬく聖靈會灯籠梢を輝かし。同じく寶の鼓をすへ糸竹呂律のこゑに。法事をなして管弦講御吊ひぞ。三重有がたき。ころは初秋の。空なれば。はや三伏の夏たけ風一聲の秋の空。夕月の色も照添ひて。見ぬ唐も思ひ出のそれはるすの礎枕。是はまた猿澤の水たうくとして。波ゆうくたり。あら有がたの御吊ひやな。救を反さし天罰にてやいばに伏したる身にし有れば。後の世までもくるしみの。海に沈み波に打れて呵責の。責も。ひまなかりしに。思はざる外の御吊ひに。うかび出でたる有がたさよと。波の鼓のうつゝに見えて忙然。として立居たり。左少將御覽して。不思議やなはや更過る宵月に。けしたる者の見えたるは如何なる者ぞ名を名のれ。おも耻かしやおもだか。冥途の姿あらはして御吊の管弦に引れて参りひぞや。扱はおもだかの幽霊かや。然らば今宵の音楽も。御身がための手向の鼓打て其聲出づるならば。げに成佛のしるしならんはやく。鼓を仕れ。嬉しや扱はみことのりと夕月輝やく玉座のもと。△玉の笛竹聲すみて。○月宮殿も斯くやらん。△天人も影向。○菩薩も爰に。口天降ります氣色にて。寶の鼓死井の。調は秋のはの。紅葉たねの手の内に。珊瑚の玉を打出す聲もよりひく糸竹の。手向の舞樂は有がたや。○面白や時もげに。おもしろや。時もげに。秋風。樂を調べては。松の聲。りんくんと柳葉を。はらひて夕の。雲條々として月をはく。星も相逢ふ天の河。鳥鶴の橋に置く霜の。おもしろしく。夜も更て星の契も。なかばぞと夜半樂にも。はや

爲りぬ。されば人界の南に流れ行く水の。星は北にたんだくの天の海づら。水やそら。行もまた雲の波の。波の鼓の海静樂。青海波をもうつべしうつやうたずや。仇波の。立より打てば此鼓。いんくかんく心耳も。妙に是やこの。蕭鼓天にかまびすく樓臺に般たりと云ひしもかくやと。思ふばかりの聲出て響きは感を催ふせり。夜遊の舞樂の時去て五更の一天鐘もなり。鳥は八聲のはの。夜も明白む。時の鼓数は六つの巷の聲に。また打よりて現か夢かまた打よりて現か夢まばるしならぬ姿を見よと。袂をかざし立たるはあやしかりける。三重有様なり立舞ふやうにて。おもてもかづらもかなぐり取れば口のごがりし大男。時景親子に飛掛りとつて押へて踏つくれば。すは狼籍と立騒ぎ君を守護し奉る。其男大音上ア、申々。全く上へ對しれうと致す者にては候はず。ヤイサ親子の奴原。身共は伊賀の上野に隠れもなぬ彌左衛門と云ふ古狐。丹波の國千年狐四松殿の仰にて鼓の番に當りけれども。其比用事有て梓彌介と云ふ子狐を遣せしに。己れら親子勅誑と偽り。押入りしを若狐の悲しさは。おもだかに化てふせぎし故不憫や我子はおのれらに殺されたり。恩愛親子の別れ人間に變るべきか。悲の涙骨髄にとほり。取殺して我子の向養にせんと思ふうへに。あまつさへ親王の仰せと偽りおもだか主従に愛目を見せし。我子狐の化たるを眞實の澤瀉と思ひ切殺し。上へは自害を讒し鼓を奪ひ重々段々の惡逆。いとをしや中將殿も勅勘の身なれば世をはいかり。おのれらを今迄生て置る。事のはがゆうてならぬ所に。斯る時節も有りがたき御吊ひ有るにより。化るとは得て物ゆる幽霊となりて現はれたり。親から先に了はふか。子から先に捨殺さうか。エ、悪いやつばらやと齒嚙をなせば縣主。イヤは彌左殿皆悼がらみしと。拙者は助け給はれといへば宇治太郎聞きもあへず。ア、親爺手が悪い。是夜の殿。我は未塵もたくなぬ事皆親爺の無分別よりおこつたイヤ。身は許て知らぬこと。イヤ。どうでも親爺の所業

じやと。親子ぬりあひ命を惜む見ぐるしさ笑止にもまたあさまし。彌左衛門からくと笑ひ。さて。卑怯物どもごちらにしても逃れぬ所。觀念せよと二人が鬚を兩手に取り。兩足に腰骨ふまへる。いとやつと首引抜てすてけるは人間ならぬ所業なり。親王おごろき感じ給ひ。皆是塵が誤より事起り。且は又彼等が善惡の理非の差別分れぬは。父天王御政道くらきに似たり。中將が在所を尋ね勅勘をやなだむべし。其他おもだか一家主従をも召出し。本領本官悉なく宛行はんはや。尋ね召歸せといと有。がたき救誑ある。あつと悦び彌左衛門こんく。と呼びければ。皆人間の容と現し播磨の姫路のお次郎狐。中將おもだか召具して庭上に現はれたり富田林の與九郎狐みちのく夕映勝ひ来る。江州月の輪。小左衛門狐と名乗り小六判官つれ来る。勢州鹽谷の小坊主狐。巴丸金目丸兄弟をつれ来れば。京都六條左近狐武路之介を同道す。大和狐源九郎智路之介をともしなひ來て。剎那が間に一家の人一度にめぐり合たりし狐の。威力ぞ不思議なる。親狐いよく感じ給ひ。是より直に京都に召つれ參内させ奏聞せん。猶狐共路次を守れと宣旨有れば承ると云ふより早く皆やおもては狐となり。大明神の氏子殿御出世の都へて御先をはらひ悦び。都路に歸り上りて富貴の家。福神徳神五穀神。稻荷の神の御神力目出たし。たふとし有がたしよろこばし賑はしと。猶しんく。に榮えます萬歳。萬々歳目出たしともなかく。申ばかりはなかりけり

根元曾我

近松全集

木枯の吹すさびぬる枯野邊も、正東風そよぎて春の野や梅の初色松の花、枝きん／＼たる其かたち誠に
 景氣を美せしむるも、もろこし人の筆の跡めでたき今の眺なり、敷の新草下萌に、春を穿ぐみて世も人も
 戀の種まく畠山、重忠の二番ばへ小六郎重春とて、美男の譽關東の小六ついたる竹の杖、もとは尺八
 中は笛末は吹矢の筒に切る、竹のきりよごふし付て、あづまわらへの歌ひしは此若者の事なりし、時な
 るかなや初春のお禮納めて歸るのは、はだれ雪間をあさるてふ小鳥狩して遊ばんと、小鷹すゑさせ犬曳
 せ其身は吹矢吹筒に、心をよする並木の枝しげみ／＼に氣をくばり、濱松風と諸共に吹落し／＼、ひま
 なく鳥を取る時は、罪も報も後の世もわすれ「はて、面白やあら面白やと、ゆく道の右手のすさきの松
 が枝に、女子模様のきぬかけて、へにをぬぎ捨て一つうを芦の枯枝に残してあり、重春何事やらんと立
 寄り、文を開き見給ふに卑しからざる女筆にて、何々わらは、宇都宮友綱殿のひとり姫、玉照様に召使
 はる、みほぎとや女なり、誠に戀のせつなさは男も女もかはらねども、わきて女は色ふかく胸にあまれ
 ざいひ兼ねて、心一つぞこがれ行く、棚なし舟のよる、となく、晝ともわかでおむづかり是非は媒介サ
 せとて、さまざま頼ませ給へ共斯と傳へん便なく、一筆を残しおき身を投げ空しく成り侍ふ、哀れと思
 する人あらば此由傳へ何とぞは縁を結んでたべ、戀られ人は畠山小六郎重春殿、あなかしこ扱一首、早
 川の、せぎりの舟のつなで繩、くるしやいかで、しらせそめましと、よみも終らず手を打て、扱しなし
 たり／＼互に戀はあるならひ、左程に思ひこがれしを何しにむげに致すべし、命の内知らせなばどう

ぞ仕様も有べきに。扱々女のはかなき心今更かくとつげんにも。命なければせひもなしエ、残念なり不便やし。涙にむせびしが、いかにとしても心ざし男まさりの女なり。せめて死骸捜し出し跡吊らひて得さすべし。いさかたぐいひもはてぬに側なる舟。管押のけて出ける者しばしと押さめ。是はみほぎとや女全く命に仔細なし。姫君がこれ給ふ故に媒介はせ共何と傳へん様はなし。此は歸りを幸にかやうにしつらひひなり。最前聞しに詞にお偽は有るまいが。あはれも一とぢきくには返事をとすがり付。重春みほぎが手を取て。神八幡をかけ奉り何しに偽りやべし。玉照姫の事はは容色といひ情といひ。先立て承りこなたも思は同じ事。然しながら見ぬあきなひ心元ない所も有り。とうへ投金せんよりは今現金の一あきなひ。此君が買得さあ手を打んと寄添へば。みほぎ重ねて扱々浮氣な殿御かな。姫君様を指指てわらはに思が深いとや。先添しよろこばし。さりながらお姫様。いとしげさうに此年月憔悴れわびさせ給ひしを。わらはが寝取やなばさぞや憎ませ給ふべし。其上こちらのお姫様シヤおの様にみせましたら。わらはが事は今の間にひひ變改にあはふもの。あらいやうのと立退くを小六袂にひしとすがり。これは聞えぬ一言誓へば主人玉照殿。佛菩薩の化身三十二相の形を現じ。我にとやかく宣ふとも心にそますは甲斐あらじ。此上はみほぎ殿今日よりして奥様ぞ。それしたく共乗物もて急げくと進みしを。みほぎ重ねて押留め。あつはれ殿御やものふや。我こそ君を戀ひかねて心の闇の光なき玉照にてひなれ。其お心をしらんため七草摘むと偽りて。是迄忍び参りしなり必ず違へ給ふなる。遠からぬ内首尾次第便の文を参らすべし。よろづの事は其折柄先今日はおさらば。はんのみほぎはあの舟に來いよみほぎと召るれば。アツ答へて女房達管押のけて現はれ出で。手々に櫓かいを立直し供中歸る波あさ。さつとさつと連まして。ゆくを見送り留るを見もごるまじりに戀ふくませ。心と

心をかよはせて別れ。行こそ 三重戀路なれ。やもめ住む家は。ごこやらが。物のさびしき事こそあれ。世の憂よりは住みよしと。思ひながらもゆるさねば。又後妻をむかふるも。浮世の中のうきよなり。其頃會我の屋形には河津の後室入り給へば。又にぎくと家富て。軒にかされる松竹も千代の「しるし」と植るにける。折節工藤祐經はちくば花桶かさばこそ。次第くにかざらせ小六を始め若殿原。六七八騎手を揃へ。祐信の廣庭へ一はなだつてしかけつ。當番の若黨一人招き寄せ。汝祐信殿にいふべきは。先以ては祝言しゆよく調ひや段。目出度存じひ。夫に付野子を始め何れも若水祝ひやさん。祐信殿に支度あり。さつと出ひへこそがくしうぞ云入れける。時に老臣田澤の庄司祐經に對面し。未だ餘寒も甚だしくひ所に歴々思召よらせられ。若水祝ひ下さるべき旨千嬉萬悦是に過す。人々仰せ下さる。如く主人祐信後づま迎へひ共。内々存じ知る。如く。悴を養子致すに付子供の母も別を悲しみ。附添参りしばかりにて祝言なごや儀は毛頭これなくひ間。只は歸り下さるべしとぞ相述べける。祐經聞いていやく庄司。二度目にもせよ。五度目にもせよ。婚禮有りしは必定よ。是程祝儀を催ふして只歸られふ物なるか。いやでもおうでも此上はさつと一水参らせんと。是非を論せず云ひつの中にも重春袂をひかへ。いか様庄司や如く他の婚禮と事かはり。養子に付ての事なれば水参らする迄もなし。一つは上への聞えも有と方々無用にして。歸るまじやとありければ何れも是に同意して。何様小六云はる通りやせば是は勝手づく。さのみに事を改まり無理に水こもやされまじ。いさく祐經寒いのにはイザ往ぬまいかどありければ。左衛門猶もとまらずイヤサ。此をのこが云ひか。り只歸るべきやうはなし。然らば水は更も角もお内儀是迄出有り。一禮云ふて戻されよ左衛門は歸らじと。さうを座つて身をよぢらせいなんす。氣色はなかりけり。祐信の奥こらへ兼ね衣折被ぎ立出れば。前後の腰元さし心得

思召よらせられ。若水祝ひ給はんとはる。出でひ事。嬉しさ計りのは禮に是迄は出ひなり。扱々無理な望お主様にも幾程か。は耻かしさ氣の毒さ世にもうるさく思さるれど。かつうはは馳走殊には又殿御様へのおたてふん何と皆様結構な。は心中ではおはせずや殿様達にもはあやかり。追付嫁御をさせ給へ。其折柄は若水祝ひ参らせん。あらお目出たや目出度やと會釋してこそ居たりけれ。祢經少し面を直しヲウ。は出過分。しかしながら逆もの事は近付にも成中さん。コレかづきを取られよと立よる所を取て投げ。かづきを取れば朝比奈角前髪のだて姿。勢勝れて見ににけり。其後義秀居直つてイヤ珍らしやとくごう。某も用事有てとくより是にありつるが。近頃ぞんさい千萬なり。尤も祢經女を娶れば水浴せんとは僻事ならず。又祢經が宥せとて老臣田澤に託言させ。水を浴ぬもおとなし。はた又詫びるを了簡有り何れも許し召る。己れ一人用ひぬさへよつほど無禮の至なるに。剩さへ諸侍の女を出せとは何事ぞ。出したらうぬが何とするサア。今一言吐出せ鯉骨みしやいでくれべいと。諸肌ぬいて肱を張り。はつたと睨みし有様は偏へに鬼神の如くなり。有合ふ人々最前より工藤が振舞悪ければ一言挨拶する人なく義秀に目くばせし。聞ぬ顔にて立ければ祢經も云が。り。何と治めん様はなしにかにも朝比奈よい答。女を出せ會んとは武士の諸禮にないこと此祢經も合點たり。畢竟君へのは爲に女を出せとは望みしなり。其は爲といつは。聞ば祢經河津が後家をめとらる。よし。鎌倉中の風聞是は和殿も知らる。如く。當は所様へ對しては不忠の者の女なり。去に依て是を見届け申上んす心底にて。女を出せと云ひけるが何祢經が誤か。いらざる所へ罷出で祢經が肩もつは。何と其方も叛逆の餘黨なるかと云ひければ。朝比奈かつら。と打笑ひ。いやはやこ。なのんひよこめが扱ぬかしたり。ヤレ。叛逆人の娘謀叛人の後家。是等をめとる輩を罪科に處せらる程ならば。此朝比奈は木曾義仲の妾也。

子。然らば父の義盛も叛逆謀叛と云ふべきか。ム、合點たり。河津を己れが討ければ二人の悴をおそろしがり。君へさへて殺さん爲な。此朝比奈があらん限りはいつかなくならぬ。親の敵を討けるに上様よりの法度はなし。成長の後に至つては此。義秀が腰押して己れが首は飛ばすぞ。随分名残を惜みて置けとあざ笑ふ。てぞ居たりける。祢經大きに立腹し義秀の卑怯者。己れむしつを云はずとも侍たる身の意趣あらば。なせ真劔の勝負をせぬ。シテ。某河津を討し證據やある。筋なき事を云はずとも云分あらば打果せと。鏑元くつるげ突かくれば朝比奈につこと打笑ひ。ヤレ腕なしの億病者ほども合ぬ太刀さんまい。反り直さぬかとおしくつるげ兩雄互に怒り合ふ。人々中へわつて入り無用の争論は所への聞え。かた。以て宜しからず平に。と制すれば。是非も及ばず人々は双方へこそ。三重別れけれ

あつとせり

あしたの露の。玉照姫思ひ初たる戀衣。あはでつらさの増鏡見ぬさきこそは。ましならめ。なまなか見もし見えられて猶しも。ふるさ。戀のう。み。逢瀬はいつとまつら舟こがれ。て。つき山の。後の亭の堀越に。伊豫藤まかせて伽羅柱きて胸に比ぶる身のふりは。人待女と見答めん。女房達は差寄りてまだ涙返る春の空。雪模様やらや。寒きに今日のみ端居は何のお爲ひと。問ひ参らすれば姫君は。されば今日は彼人の會我祐信殿お屋形人。わやくな若水参らすとて殿原達に誘はれ。けさ疾と通らせ給ふ由是なる小笹が告げる故。定めて歸らせ給ふにも此道ならめと心ざし。夫故爰に待けるが何と思ふぞ方々。けふ水浴せの歸るさは皆々若いお衆じやげな。彼人様に似た人も有るか見たいと計りにて。また殿

寝せぬ懐へ。顔指入るも戀なれや。乳母のたんごさりとてはよき思付面白し。幸小笹は鎌倉しりつづき覺えひらん。尋ねては覽遊ばせと上れば姫君は。オウ〜よくこそでかされたれ然らば直に此所を。姿の鬨と名付小笹に問ふて書止め。男競をして遊ばんサア〜見えなば知らせよと。墨磨り流し筆くひしめとむる。姿ぞ。關所なる。とは知ずして人々は。會我の屋形を立出て。我家〜に歸りぬる。男揃へや姫君は硯引寄せ筆を染め。まづ先立て梅の花苔がちな折枝を。地白淺黄に染散し。矢筈付たるゆかたをもたせ。廿歳ばかりの男は誰。さんひ彼こそは當は所様のは前よし。梶原殿のは次男平次郎かけはや殿。は器量はすぐれね共鎌倉一の強弓引。矢つぎばやの精兵あたりこまかに手だれの上手。歌道の達者殊には又。は手蹟拙からざる由は心さまは知らね共ア、奥床しどほのめけば。げにまこと武士や。色淺黒くたくましく眼の見返し清らかに。毗あがつてすんとして男子らしき生れつき。そしるかたなき風なれど。柄の小さきくせとして鼻が高うて悪てらし。さて其次は地淺黄に濃きくれなるのたぐり繩。むすび留めし荒駒ののがみ亂れし。いさほひを。どのこんかきやそめぬらん。手をつくしぬる湯帷子。仕丁が肩に。掛させて。先に進みて行きしはいかに。彼こそは相馬之介よしおき殿のは末子。大手之介よしすけ殿谷七郷に隠れなき。和漢の詩作。和文の達人。弓矢は勿論。文武をかねし優男と。や上れば。姫君は。筆投捨て。ながめやり。げに此人は耳馴し當世の風流。遊舞になれし通りもの粹な男と聞けるが。少いはふならつふりつき。後高撫いやらしく。惣じて髪は高からず又低からず真直に。あつからすうすからす髪も多きはむくつけな。やつこが肩にた。ますもさつとかけたる水色に降りみ降らすみ。さだめなき。時雨のふじをそめわけに。たごときよみをかけ。ひなた。干す細の手はすがいの四郎。此方は相澤。あなたは瀧口。扱又少し引さがつて。庵木瓜のゆかたをもたせ。大の男のふりかけて

大道狭し歩むはいかに。いかにとや伊豆の國。工藤左衛門祐經殿是も平家のは時は。小松殿の奥小性工藤の。一郎やさ男とぞ召されける。ゆかり残りししるしにや。人情賤しからずしてひと器量ある武士なれど。さうやら意地の悪るさうな。小面のにくい男かな。こゝにすぐれて色深く戀と情を染分にはでな。模様を一つまへ。二つ刀のつかみざし三重のふさ帯しやんとして身振。優しく。美しく。素顔さめよく艶てつて女子見る目の二かには。思ひ溢れてしほらしく愛嬌ありてなづみあり。此世稀なる俤は問ふに及ばぬ我戀と。思へばそつと身もふるひ詞をかけぬも恥かしく。一筆かいて。明日の夜は必ず待つとくごからぬ。文を丸めて打付て兎角の詞いはまゆく。水の通ひの如くにて底の心を。汲みあひし祐經主従取て返し。見たか汝ら重春め。玉照姫と密通し忍びてあふと見えてあり。内々おこと等知る如く某が心をかけ。艶書數通に及べ共終に一度の返事なし。扱は彼奴めが障と成り我手に入らぬと覺えたり。所詮今夜の歸るさを待かけ討て捨べきなり。去ながら小六めも。聞ふる手利の早業なればよもたやすくは討れまじ。幸先陣行過ぎぬ何卒先へかい〜つて。あら川の邊なる網代守等に出立ちすのくま〜に隠れ居て川の中にて討取るべし。ぬかるな方々此方へと。裏門筋を横ぎれに脇道へこそ。三重廻りければかくて重春。迎ひの若黨下部等共十七八騎暮にかゝり。荒川おもてを五六段瀬を窺ふてあたりかゝる。所に網代のすかけより甘騎あまより水を蹴立て。一度にどつと討て蒐る重春すかさず飛しさり。よく〜みれば工藤左衛門とは狼藉や祐經。いかなる意趣ぞ仔細をいへ時に左衛門意趣は定めて覺がらん。玉照姫は某がかね〜文を遣はして。よつほど口説きかけゝるを汝奴に邪魔を入れられし。恨の劍を受とれと打てかゝれば重春は。素より得たる水心抜つ潜つ紛れ入り。思ひもよらぬ波間より透をあらせず切まくるは。偏に水鳥羽を打て波間に遊ぶ。三重風情なりさしもの祐經。小六一騎に切立られ波につれ立

つ川魚の網代をぬれし如くにて一度にさつとぞにげてける。重春續いて追ひもせず手の者共を招きよせ。汝等かきひて長追すな誠の武士はわたくしの。宿意に命は捨ぬものかたぐ土足を洗ひつゝ。しつかとせよこつちへとさも鷹揚にかへりしは。天晴臣たり忠たりと末の世迄も荒川に。其名よとみて水鏡うつさぬ。姿はなかりけり

才

待つもうし忍ぶもつらしとにかくに。戀の奴と身をなすは心のつかふ心ぞと。思ふ心の心より迷ふ心ぞ心なる。心苦しや重春は君がしらせの文のつて。来よと叫びたが嬉しさに暮待託ぶる忍び路や。姿かくして行きなやむ。道ほの暗き軒の隈。笛を来たとの案内にて。わなたこなたと吹通ふ。風が告れば。姫君は小袂かい取り駒下駄に。雪踏分けて走り出で。敷ならぬ身に絆されておられぬ振やおいとしゃ。先此方へと手を取て奥に伴ひ給ひつ。枕とる間もありやなし外面の扉の下かぎに。簀笠着たる男共背より臥して居たりしが。合圖の聲に目をさまし一度にはらりと起直り。手さるの石を引おこし。でいのしとみ遣戸折戸の嫌ひなく。さんくんに打つれば重春姫君興さめて。こはそもいかにと呆れ果身をひそめてぞおはしける。朝綱一家駭き騒ぎ松もしつれ走り出で。こは何者なるぞ狼籍や。宇都宮彌三郎朝綱が屋敷なるが。何故石を打けるぞシテ先奴等は何者ぞ。仔細を聞かんと呼ばれば祐經真先に進み出で。何狼籍とは心得ず。今夜婿入ある故に石打たるが僻事か。工藤左衛門祐經が祝ふて石を参らせしが。何と狼籍か。但し云分是あらば賀君是へ出われ。對面の上狼籍か祝義を糺しやさんと口々に呼ばれば。朝綱方には素より知らぬ事なれば。こは心得ぬ云分かな全く此方に覺なし。定めてうれば門

違ひいよく粗相千萬なり。其上主人朝綱は登城致して留守なるが。シテ賀入あるとは何を以てやさるぞ。近頃迂論な侍但しは狂氣致されたか。一旦の義は是非もなし。とうく罷歸られよと嘲笑ふてぞ居たりける。祐經重ねていや無禮すぎた奴らかな。己れ證據のない事を侍たる身が云ふべきか。則ち賀は畠山小六郎重春黒い眼で見えて置た。是程確な賀入を朝綱殿は留守つかひ。たつて争ひ召さるゝは扱々しわいなされやう。お振舞が大儀な座頭猿引傀儡師に。やるべき金が大儀さに夫故隠し召さるゝか。いふても娘玉照が一世一度の嫁入なれば氣を張られたがよい筈よし。それは内證づく石をいやどはゆされまじ。否でも應でも打やさんやうて方々物云はすな。只ひら打に打拉げと手々に石を打けるは。賤が板屋の夕時雨敷たはしる如くなり。朝綱の侍共今は堪忍なり難しと。前後左右より打てかゝる「シヤしやらくさい奴原と。透をわらせず切結ぶ其隙に小六郎。姫君の御手を取り行方知らずなりにけり。祐經早くも見付スハ重春め姫を連。彼處を忍び出けるぞ討取て玉照姫を奪取れ。續けや面々此方へと跡を慕ふて追て行く。朝綱方の侍共ついて追懸証もなし。扱は姫君重春殿と密通し忍ばせ給ふに疑なし。其上重春諸共連て立退給ふ上は。別の仔細も有るまじきぞいざ先主君朝綱へ。告参らせん尤と打つれ。立て。三重。神の恵を頼むにぞ。榮行末のたのもしき。抑是は大和の國に隠れなきくわんしやうたうばんせいとや繪師にてひ。扱も我天の香具山の奥に降誕し。父もなく母もなく。元來師もなきくわんしやうにてんせい喬工の妙を得て。廿九年の春秋を不幸に愁ふる山住の。草を敷寝の岩枕苦の衣に身をなして。みそじの春を迎ふるは世に口惜き身の上と。門人四五人かたらひて。今日立出る足曳の山跡の國ながめ捨て。旅の草鞋のかる草や鎌倉。にこそ着にければんせい門人等に打向ひ。誠に長途の疲勞思ひやられてひなり。扱やつがれ此度當所に赴くと全く餘の義にひはず。方々とも存

しの如く、我學ばずして書工一道に妙を得。齋ける鳥を囀らせ牛馬六畜に野山をかけらせ。人の形を笑はせ泣かせ。世に類なき身なれども、未だ天運來らぬにや終に天子將軍にまみえず。去るに依て我謀をめぐらし何卒上つは方にまみえん事をこひ。當社八幡宮に祈誓かけ奉るしくはの繪馬。見らるゝ如く是はこれ。當將軍頼朝公石橋山の合戦に打負。土肥の杉山に籠らせ給ふを大庭伊東が追かけ來り。既にお命危ふかりしが伏木の中に隠れ入り。暫く事をうかゞひ給ふ所に、曾我の太郎祐信忽ち源氏に心を通はせ。味方をはかつて忠をつくし。初陣に勝利を得給ふ圖にてあり。扱又是成水瓶にてうじ入ぬる磨墨は。鶏卵ふくと名付。鶏の玉子を腐らせ是にて摺し油煙なり。抑この墨といつは某故郷かぐ山にて。つかひ出せし秘密の大事。人身は中に及ばず衣服器財に是を塗るに。いか成るうんたう靈水を以て百日百夜洗ひても。更に落ると云ふ事なし。且又是を落さんには。元の玉子の腐らざる白味を以て是を消すに。其驗神の如し。何れも是を與ふる間。此神前に隠れ居て姿を異形にやつし替。往來の貴賤にぬり随分忍びやさるべし。然る時んば鶴が岡八幡宮の神前に。すみぬりと云ふ化生が住んで往來をなやますと鎌倉中に沙汰あらん。其時墨を落さんとぐわぐを尋ねる事あるべし。鎌倉中の繪師共が幾千萬人寄たりとも。墨落すべき術を知らず定めて此方が手に入るべし。時には縁を求めずして縁を求むる道理あり。兎にも角にも縁をもとめば前へさへも出たれば。當。此所様の繪所は此ばんせいのが筆先ぞ。硯の海のことなく此處や彼處に隠れ居て。随分うかゞひやされよと師弟諸共姿をやつし。忍びくりに付にけるじゆつぢの。ほごぞ。三重すまじきやいばの巻を。のがれ出で覺束なくも戀の間。ふみ迷ひ行く島山小六郎重春は。玉照姫を肩にかけ飛ぶが如くに鶴が岡。此神前に馳付しが敵は手痛く追て來る。いつちに影やかくさんと彼方此方を見廻りしに。幾年経るとも知らざりし楠のうつろの有りけるを。是幸と忍び

入り暫く息をつぎけるは。妹背雉子の狩にあひ草がくれせし如くなり。所へ工藤祐經は手の者共を引具しすきをあらせず追付。は資殿の隈々を此處や彼處と尋ねれど。其行方は見えざりけり左衛門や、思案して。やら不思議や神前なるは堂の影に人影の。ちらりと見えて有けるが天へや行きけん地へや入りけん。いかにとして身を隠すべき木蔭もなし。どうでもかうでも此神前が氣がへりなど。又立戻つていふやう。最早尋ねる所もなし若し此空洞の中にもや。何と方々一詮議致すまじやと云ひければ。勇勢さかの若者共尤是はいぶかし。いで小六めを引出し我は機嫌に預らんと。前後を争ひける所に不思議や繪馬に掛置きたる。祐信が形忽然と有りつるまゝにて顯はれ出で。暫く待たれよ祐經殿。は邊の尋ねやさるゝは定めて秩父の小六郎重春にてぞあるらめが。全く伏木の中にはあらず。最前若き女を連廣野の方へ行つるが。シテ又それは何の爲斯様に詮議めさるゝぞ。祐經聞ていや。仔細は語るに及ばず。あへばさらりと埒明くことば邊はかまひやされそ。それ若黨共詮議して引すり出せと立寄るを祐信やがて立ふさがり。コレサ祐經。重春是に居ぬ事を某たしかに見届け。夫故たつてとめやを用ひず詮議召さるゝは。扱は此祐信が虚言をやと思はるゝか。其上此朽木のごとは其方とても存じの如く。我君は初陣の節は命を救ひし名木とて。君此所へ移し植ゑ畢竟神木同前にあがめ尊み給ひしを。不淨の身をもち入らんとは勿體なし。ひらさら餘方を尋ねられよ。たとへ重春空洞の中にありとて。此祐信も云が。いりいつかな事見せぬ。サア見られふばほらふせと。長刀杖につきながらふんちかつてぞ立たりける。祐經一圓合點せずイヤサ祐信。某と重春とは聊か云分これあつて。斯様に尋ねまわる所に其方たつてとめられ。其上見れば甲冑弓箭を帶し。此神前に籠らるゝは何とも愚意に落す。察する所謀叛よな。まづ重春は追ての事汝漏すな打とれと。前後左右よりおつ取捲く時に階の下蔭より。鬼とも人とも

所に、昔のよしみを忘れずして人々力を添へらる故、先祖の恥をきよむる事は皆偏へにかたぐの、別心これなき處いつの世にかは忘るべし、西國表は範頼義経日夜戦をばげむの間、追討源氏一統にをさまれる世となりぬべし、しかし當國北國の軍勢過半範頼義経に屬し、鎌倉方は無勢なり、然ればかゝる折をうかゞひ敵當國を心がけ、紛れ入んもいざ知らず何れも随分心を付、其沙汰きつと致さるべしとぞ仰せける、時に人々烏帽子のひながたを席に付け謹んで上らるゝは、証の如く今日のは祝義別して平家追討の爲、は連枝馬を向けらる所に運に叶はせ給ふにや、兩歳共には勝利あり平家數ヶ所の城を破られ、西海の波濤に漂ひやなにかゝれる魚の如く、もれて行べき方もなく命を風波の下に沈め、大方自滅いたす由、且又當國は用心のこと、何れもは譜代相傳の諸武士前後左右を圍み、番頭厳しくいへばいかなる忍びうかゞひて、ごりうの術をなすともいかでかたやすく入ひべし、追討は兩所は歸陣あり秋津洲の外異國まで、源氏一統の世となり萬々歳と治まるべし、あらおめでたや目出たやと皆一同に領掌ある、然る所へ工藤左衛門祐經後ればせに登城し、某いさゝか宿願の仔細あつて、鶴が岡のは寶殿へ夜に入り參籠仕侍ふ所に、曾我の太郎祐信甲冑を帶し、鬼ども人ども知れぬ者四五人かたぐひ、神前なる朽木のかげにかくれ居て、某が下部等にことごとく墨を付何處ともなく逃去りぬ、其後私宅に立歸り、様々洗ひ落せども少しも落る氣色なし、其外町人百姓共老若男女の別なく、墨をぬられし者共凡二三百人もは座ひ、其上祐信河津がは家と最愛し二人の子供を養育す、彼是以て存するに正しく謀叛に紛れなし、急ぎ祐信召出され、さつと証議下さるべしと言上す、頼朝暫くは思案あり、何とも是は心得ず、此曾我の太郎祐信は頼朝が初陣に、命を助けし忠の者いかに野心の有るべきぞ、定めて是は人違若殿原が醉狂ならん、しかしながら世の中の變り易きは人心、証議は後日の沙汰たるべし扱又二人の作

が事、頼朝伊豆にさくらへて伊東が館に有りける時、隠して設けし子なるとて已れが爲にも孫なるを、とゝさが淵へ沈めかけ、憂き目を見せし其恨、骨髓に徹して忘れがたし、汝は急ぎ曾我に立越え二人の子供を受取由井が濱にて首を刎ね千鶴若に手向くべし、即ち其方檢使として太刀取は彌三郎朝綱中付るの間、兩人さうく馳せ向ひ打て捨よと宣ひて、は座をたゞせ給ひければ皆々、お暇 三萬たふでけりわが物の、我まゝならぬものはたゞ、心一つに定りぬ、朝の實はしばしまの、夕の仇とかはりゆく、浮世の中はなかくや、わきて女の心から夫に立つる誓文は、水に繪をかく如くにて、根がぬれからの事なれば、もとのぬれにぞ返りける、初も河津の後室は舅の禪門了簡にて、曾我の館に移りつゝ浮名ばかりを後つまど、同じ家には住へども、夫祐信は朋友の、子を助けんごばかりにて、呼迎へたる中なれば、つまの如くももてなさず面白からぬ月と日を、うつらうと過しぬる、幼馴染に別れける、今はの時はいかな事他夫とはふつゝりと、思切つたる黒髪も、ゆふべあしたに櫛取てのばす心の亂れつゝ、寝しなゝの薄化粧、ひにゝがねの色濃くも、染むる氣になる、ことはそも我身、ながらも恥かしと、獨りごちたくてづからやくしげしまふて立さまや、弟の箱王が寐おびれわつと叫ぶにぞ、ちやくとさしより抱きよせ、いとしい者よ何としたり、怖い夢がな見しものときぬ引させてたゞき付、いんのこゝと、添乳ながらの手枕は寝覺、さびしき身のふりや、祐信も寝所に入り枕はどれぞかたぐは、あきてさびしき遣方なくうつもれ伏して物思ふ、心の春を夏になし夏を轉じて秋とうれへ、又冬枯のきになしつ千々に碎くる魂の、中にも無常のきになせば萬わはれに思ほゆる、戀に心をなす時はこかに心の通ひ行く、又軍術に氣を結べば寝ながら及の巷に遊ぶ、五つの常の道を思へばこりも、なほさぬ武士なり、今此太郎祐信が今日の人界、去てくるよの事を悟れば眼前極樂世界なり、さりと云ふも外になし

迷と云ふもひとつ。只これ一心迷悟の二つ別れ〜て善となり悪となり行事ぞかし。然れば僅かの此しどねにしんばうらくのおきやうにて。地獄をも見つ極樂も又仙境も見ゆるなり。たゞ是萬法唯一心。心外無別法なご云事はかゝる事をややらん。去程に〜寝て居て物を思ふのは。扱面白物かなと又寐直つて思ふやう。去ては世の中に義理程悲しい物はなし。我れ朋友の河津が子助けん爲養子とし。母をも娶り同じ館に住みながら。草葉の露に身をなせる河津が心を耻らひて。枕距つる義理の關明ても暮てもみればかり。よつほど見事なるなるを獨り寝させておきけるも。ア、是だけが浮世じやと。思ひなぐりて引寄する。枕に近き煙草の煙。わにふき雲を吹き霞吹捨て。すつほりと。又引かづく夜着の内よるづの思を籠めにける。子供が母は目も合す夫の閨をながめやり。さりとは堅い男かな。いつかに義理があればとて。夫婦と名を呼ぶ上からはもうかうはない筈の事。石塔卒都婆がいつの世に恨云ひたるためしやある。義理も仁義もよつほどおいたがよいと呟きて。枕はこれ寝入られず男欲しがる寝姿や。我膝抱いて。ね、しても色もなづみもあらばこそ。寝衣ながら密と起きつく〜案じけるやうは。兎に角さきの手を待ては中々逢瀬はよもあらじ。ハテどうぞして我夫の。閨へ行くやう有るべきか。ハアどうがなと差勝伏きしばし案じ打うなづき。ソレヨよい事思ひ出したり何かは云はず恐ろしい。夢見て怖いと走り込みこゝに寝させて給はれと。無理やりいだきつくならは何程堅い男でも。これではこるりとゆかふもの。出来たは是よとかけ出しがいや〜。是も古い格。中々是ではゆくまいと又立歸り思案して。假令かしこへ行たりと殿御の顔を見るならば。あからさまには云はれまじごうぞ妻は彼處へ行き。顔見ぬ様があるべきと知慧のありたけ振に出し。二人の若がもて遊ぶ般若の面これ幸と顔に當て。かうした姿で彼處へ行き妻が恨む一念が。枕に立と思ふ事すつへり云ふてのけふぞと。上なる小袖を脱

ぎかけて行かんとすれば弟の。箱王は目をさましユレナフ母様わらはを捨て。ごこへと云ふて取付ば我子ながらも恥かし。當座の返事にあぐみつ。音せで寝さいよ殿じや。母はそなたの面を借り父様をおどしてくる。やはり寝や〜と云ひければ箱王何の別ちなく。父様おどしにござるならわらはも行んと立ければエ、氣の毒な子じやわいの。其方が来れば邪魔になる兄と一所にね〜しやと。叩きつればすや〜と。又寝入りしをさいはひにや〜。彼處へ忍び行く。逢ひた見たさの思のため。形は閨にありながら。是まであくがれ参りしなり。もはや浮世に亡き人にあつたら義理を立んより。生きて焦る。女房に少しは義理を立て給へ。なまなか再び嫁入して月日ばかりを敷ふれど。女房らしい事もなく。人には兩夫に見ゆると浮名ばかりを立られし。恨中に来りしと立添ふ襖にござる〜うたせ。戀慕の生靈通ひ来る狂言つくるも戀なれや。祐信ちやくと見てとつて扱は女の心亂れ。賢女を立かね智恵を出し戀のしかけに我をはめ。枕寄せんと云ふ事な。さらば此方からはめ返し一はいくはせてやるべきとこよるの下をそろりと脱け打伏になして寝た姿。下着一つにすみほうし掛物袴を杖につき。さも苦しげなる聲をあげ。あら閨浮戀ひしや妻戀ひし。ゆかしの人の面影と。草葉の蔭の三瀬川こがる。舟を乗かへて。又よの岸へ寄波の恨みてあはぬふる夫の。河津が是迄来りしぞや。尤新夫祐信もほ身に心は有明の。月とも花とも思へども。某てまへ立ふんにて閨を隔て。帯とかぬ。まる寐勝なる床の海深き心を淺墓にせよとてく〜私言。道き冥途へこたまして胸にこたふるせつなさに。閨王に暇を乞ひ恥かしながら見ゆるなり。今はふつつと思切りもとのふしごへ歸られよと。戸障子襖をがたつかせ誠しやかにぞこたへける。女心といひながら戀にはささきならひにて。早くも夫と氣を付てしばらく案じ打うなづき。こゝは一はい喰た顔して又こちからからはめてやり。まんまと思を晴さんと般若の面をかなぐり捨て。何河津

殿とや珍らしや。別れてよりも此かたはゆかしささうも堪られず。思ひ煩らふ折節にうれしの今宵や忍ばしの昔やと。抱きとむれば祐信は思ひの外にはめ返され。コナフおれじやと逃げゝるを。ヲウワノおれがてんしや放ちはやらじと絶りつく。後には互にしらけ合ひ。きつと笑ふが媒にて圍は一つに。ナリにけり二人の若は。母が圍枕ならべて臥したりしが。弟箱王目をさまし。兄一萬が傍により。ナフ。兄様ちやつとおきや。母上様は面を着て父様おとしに行かしたつた。いざ。行つて見ばやとて何の別ちはあらね共。兄弟諸共さし足し襖のそばに立寄り。兄は弟におれ見よと教ゆるゆびが弟の。箱王が目にかたりわつと叫べば祐信も。母もあはて。走り出で。コハ何事ぞそち達は。乳母に抱かれて寐はやらで此處へは何しに來りしと。髪搔撫れば箱王はわらはが疾より見てゐるに。兄様の見よ。とわらはが。をどいたいな。手して左手の目を教へ涙ながらに告げれば。兄一萬はなま心顔を赤めてさしうつぶさ。箱王それは指合じや譯もない事いやるなど。きつとにらめば父母は餘りの事に興さめて。恥かしいやらをかしいやら。夫婦諸共顔見合せふつと吹出すばかりなり。然る折節工藤左衛門祐經上使の旨を云ひ入るれば。祐信装束改めて上座に直し席を退き謹んでかしまる。時に祐經上使の趣餘の儀にあらす。今度伊東が二人の孫養子に致されし事録倉に於て隠れなく。不忠の子孫たるの間早々召連來るべし。並に其方甲冑を帶し鶴が岡の神前に隠れ居て。往來の貴賤に甚だ狼藉致さるよし。以ての外は機嫌則ち君の前にて。きつと証議あるべきとの使。あけなば早々うつ立べし何れも支度いへしと。愛想なげにぞ相述べける祐信上使の趣謹んで承り。先は詮意とやながら近頃は大儀千萬なり。誠に二人の悴儀は。不忠の者の子孫なれば恨の段は尤。素より某彼等を養子仕るも。親み深き河津が子供にいは。何卒一命助け度養ひ置てはみへ共。詮意の上は是非もなし。并に某狼藉の事いさ。か覺えみはず。

存せぬ旨はは前にて申開を仕らん。それ。女房子供を仕立出されよと。端下者して云送れば母は涙に目もくれて。生きたる心地はなけれども上使の前を耻らひ忍び涙と諸共に。二人の子供を伴ひて上使の前に直し置き。襟かき合せ引繕ひ。おはち伊東夫婦の人我君様へ情なく。あたらせ給ふは恨に和御前達をば召さる。おほちも親も繼父も人の知つたる人なるぞ。は前なりとて恐る。な最後所へ赴くとも未練の振舞召さる。なと詞す。しき言の葉も。跡は濁りて清みわかず。胸にせきくる涙川末は。まつ毛にしがらみぬ。子供は何の心もなく只涙にぞ暮れにける。左衛門祐信に打向ひ。最早明方近付ぬと。は出ひへと。先に進めば祐信も。二人の子供が手を引て。涙ながらに出らる。心の。「内こそわはれなれ母もしばし。はつ。めども別れになれば上使をも。人の見るめも厭は。こそ續いて表に走り出で其面影の見ゆる程。伸上り飛上り是は別れか悲しやとひれふし。嘆き給ひしが。やう。涙を押さめ。かくあるべきとのしるしにか着せたる衣のいまはしや。一萬朝顔箱王が。紅葉に鹿は何事ぞ。扱もあたる朝がほの。花のうは露時のまも。残るためしはなきものを。扱箱王がきぬの色。濡てや鹿の獨なる是も愛身の心地して。いとしさ悲しさいやまさるやがてといひし別れさへ。差當りては悲しきにまして不定の生別れ。見かゆる事も今ばかり思へば。悲しさの猶し増くる物思ひ。又後づまを重ねつ。氣に入たいもいとしさも。何とぞおこら二人をば世にあらせんと心の心から。様々氣兼をなしつるに今日別れつ。あすよりは。誰をか指て一萬とも又。箱王とも呼ぶべきぞ扱淺ましき愛身の果。過世いかなる因果ぞと絶入り。消入り給ひけり。ありつる女房端下者げに。道理去ながら。秩父様にも和田様にも北條様にも縁あり。は身の上はよき様に。定めてやさせ給ふらんた。は心強かれと様々いさめ参らすれば。よくこそ力をつくるものかな尤も縁は多けれど不忠の人の孫なれば。何程や宥むともやはか助けは

し給はじ。定めて由井の邊渡にて失はれんは治定なり。せめてはあとを慕ひ行き最後の名残を惜むべし。供してくれよ方々。涙に曇る心の開覺束。なくも。三重ゆくみぢの

兄弟をくむる行

思草かる。鎌あらば我にもかしてくれよかし。涙の露と諸共にかりて束ねて浮世川。水に流して其跡は。忘れ草をば植ふもの。ア、まゝならぬ世の中の。中に嘆は多けれ恩愛妹背のわかれ程世に悲しきはなかりけり。痛はしや母上は。我種こぼす初花の。つばむ二本を思はずも。嵐のいたく吹分て。ちりく。になる。身の歎。女房達にいさめられ。うき鎌倉へと。あくがれ給ふ親子の。中ぞ睦まじき。常の物出の折ならば。年の始の初旅と門出。こと。ぶき事くよくよほひ。かざりて販々と上下。さめまめふへきに歎きながらの。道なれば。面影かくす乗物も。急ぐ心にまだるくて。妾あらはに腰高く。あばきありくぞ哀れなる道の。ほとりは。春めきてしづが屋なみのむしるとも今日は扉に立かはり。松は連理に一五三したは。ひよくと。のしばして。風にしなへるもる翼。軒に巢をくむ如くにて猶目出。たさぞいやまざる。今の我身にくらぶれば賤をしづ共思はれず。豊に見ゆる風俗や。女子はねつく手廻つ。手じな身のしな。歌のしな。くるつまとサテヨサ。寝巻のきやらは。覆代とめてもとめあ。かぬ。とめてもよくよ。いくよとめてもとめあかぬ。さめつぎせぬ言の葉は。野でも山でもあま住む里もかはり。ないぞや此ひとつふたうら川の淺き瀬の。流れはもとの水なれどつまや我子の渡る瀬と今我身のこゆる瀬は。落る涙になほ深く。思を染る。ふでつ草。いかなるあだを今までは。書さも盡してつくつくしづさぬ。恨があらばこうかづら亂れて。根にぞふす。假の枕と早敷が草のはこすに手を出せ

ば。甲斐なくたゝん名の惜しと思ひ。ながらも。寄りそへば。二つ心と妬むらんつものぐむ。あしの怖るしく小袖掻取り行過て。こだちこしもと招きよせ。山路はるかに。ゆびさしてあれ。くノ。霞隠れの木の間より左手につく高峰を見よ。木のめ立たる林ありあれこそ名に負ふ花所。鎌倉の御所櫻花になりたやア。フさく。らの。花に。いろともつれて。むとむとむとささる。もつれて色と。色と綻れて。むとむと。むとむとささる。兎角此世は。花と色。我も昔の我ならば花に心を。よすべきを子故に。迷ふ道なれば名所古跡はいざ知らず。心ばかりをわくせきと。歩み苦しきさや。れ川。渡りくらべて。今を知る。あはれ果敢なき兄弟の。若が命を今一度守らせ給へと伏拜む。神路邊に鶴が岡正。八幡大菩薩。聖代せんれつの宗廟。源家中興の靈神氏子を見放ち給ふなど。神力を頼にめて。佛力を胸にいたさ鳥の啼音辻占にさきはひつ。おくれつ慕ひ行く道はさまざま多けれど。開路といふは子に迷ふ此道。すぢのことならん

分

工藤左衛門祐経は二人の子供を具足して。鎌倉へ入りぬれば宇都宮彌三郎朝綱は前にかしこまり。は上使として工藤祐経伊東が孫を召連。夜前私宅へ罷越し二人の悴が首を刎ね。早々登城致すべき旨頻つて申されいへども。夜陰に及びみ故明るを待てし所に。父祐信罷越し様々歎きやす段言上りに詞たらず。誠に朝綱一生の不憫なるめを見ゆ。尤木刀取致せとのは上使下されひ上。違背仕るにてはひはねども。戰場にして命を捨て。は用に罷立事は物の數とは存せねども。斯様の難儀はひはずと打萎れてぞ言上ある。君も哀れと思されけんさぞく母も惜みつらん。同じ答とは云ひながら未だ幼き者共なり。なげき

つらめと宣へば此は詞にすかり朝綱や上らるゝは。おほそれ多き條にていへども。親共が歎きの體餘り不便にひ上。殊更幼き者共なればあはれ扱成人の程。此朝綱に預け下さるべうもやひらんと恐れ入てぞやける。君や、打笑せ給ひ。ヲ、汝がや一通りことわりとは云ひながら。おほち伊東夫婦の者。我につれなく當りし事定めて聞きも及びぬらん。寵愛の若を殺され剩さへ女房迄。取返されし耻の上由井の小坪の夜軍に。頼朝を討んとせし恨は盡ぬ物思ひ。せめては伊豆一國の主にもなりたき事かな。明暮神に祈りしも何とぞ仇をかへさんと。伊東を惡む故にてあり。さればさやつらが末と云は。たとへば乞食非人なり共なか。生けては置くまじきに。まして況んや現在の孫なりしかも嫡孫なり。急ぎ誅して孝養に報じて得させよ朝綱と。其後返答もあらざれば。重ねて中詞なくさしうつふいてぞ居たりける。時に和田の左衛門義盛。少しは面よきを見すまは前に畏り。朝綱やてかなはぬ所。重ねてや上る條。おほそれ多くいへ共。人を助くるは。かりなれば免を蒙りひべし。義盛君のは大事に立事たび。なりとせ共。わきて去ぬる衣笠にては命に代り奉り。は世に出させ給ひぬる其忠節に思しかへ。曾我が子供を下されなば生前の恩。此は事にいはんと謹んでや上れば。頼朝仰せ出さるゝは。彼者共が訴訟の儀は一言取あげやせぬ間。必ず無用千萬なりとぞ仰せける。義盛重ねて。コ、我君の一言と覺へず。罪軽くして追罰せらるべきなを。やあづかりひはさのみは恩と難し。重罪人を給はりてこそ。おきてを背くは恩などいはずべけれ。義盛が一期の大事。何事か是にしかんとや切てぞ居たりける。君も難義に思さるにや暫くは思案まし。て。は分の所望何ぞか背きやべき。しかしながら此事は。頼朝深き恨あつて。報を報する事なれば。たとへば天子の勅にても。なか。かなひやせぬと有んずは氣色なかりけり。土肥の二郎土屋の三郎目配し。人々やて叶はね共若しやと思ひ出らるゝを。君遣

に覽じてけふの訴訟は叶ふべからず。構へて中出さるゝなと氣色かはつて見えければ。一言中詞もなくもぢくとして下らるゝ。次に千葉之介常胤居替つてや上らるゝは。人々再三言上あるを取上もなき所を。又やや上る段ひとへに龍の鬣を撫で。虎の尾を踏む心にてや上兼ねいへども。此常胤に對しは免とや上ばこそ。最前よりの訴訟人には許し下されなば。生々世々の恩ならめと。席近く差寄つて。や上れば頼朝公は心よげにうなづき給ひ。は分の事は頼朝が身にかへても猶餘りなり。已に頼朝石橋山の合戦に打まけ。七騎になりて土肥の杉山を出で。やう。ゆきの浦に着き既に自害に及びし時。數千騎を以て力となり。天下の主となりし事偏には分の恩にてあり。少しも忘るゝにあらねども。伊豆の伊東が恨めしさはやせぬとも知り給はん。中々恨は晴れやらすと又は面を背け給へば。常胤膝を押立て。は証は尤もにては座ひさりながら。今日の訴訟人時にとつてのは大事に。身命を惜みたる者一人もいはず。彼等が祖父は不忠の者さあればこそは慈悲に。は助けとこそはやなれと詞を放つてやけり。頼朝聞召されヲ、極重の罪人は。慈悲の佛も救ひ給はず。常胤承りそれ地藏薩陀のせいぐわんには。無佛世界の衆生をば地藏菩薩の慈悲にて。救ひ給はんところ誓ひあれ。儒の仁道は佛道の慈悲是以て左右の如し。仁道廢らばなごかは太平ならざらんと詞を重ねやさるれば。君は立腹淺からずイヤユレ和殿が様に。慈悲ばかりに心を奪はれ政道せば。天下靜謐ならずして却つて亂れに近かるべし。聖徳太子の自製にも慈悲仁道にて治めんと。國に盗人ありければ貧苦のおかす所とて多くの資を與へ給ふそれ故國民いとなます皆盗人を家業とす。夫より政道事變り極めて甘一ヶ條。憲法の掟を改めは世を治め給ふとなり。佛の再來なりとて天下を治め給ふ上は。慈悲ばかりでは治らず。天下の法度式目は是將軍のせつはふならずや。筋なき事なやされそと以ての外に見え給へば。さしもの常胤詞なく。さしうつふして

退きしはにがく。しくこそ見ぬにけれ。時に畠山の庄司重忠は前につゝと出で。叶はじこのは陛下さるゝ所。又ぞや上る條おほそれ入てひへ共。成人の後いかなる振舞ひとも此重忠にかゝりやさん。其上一期に一度と存じ。常々訟訴がましき事ふつゝやひはず。只此一つは今日の。訴訟人らに下さるべしとぞやさるゝ。頼朝仰せ下さるゝは彼等が先祖不忠の事。いづれも存じやさるゝ上何とてかほごにやさるゝぞ。餘事は知らず恨深き伊東が孫のことなれば。思ひもよらずと仰せらるゝ重忠居丈高になり。おほそれがましきひへ共平治の亂れに。平相國清盛にとりこめられ既に命危うかりしを。故池の尼君のゆされてやうく命を助かり給ひ。今右大將まで經上りて天下を掌中に治め給ふ。其はひはひに思しかへ彼等を助け下されなば。且は若君様方の祈禱にもなりは家門の。現當二世の祈何事か只是に過ぎんと。詞を盡してゆさるればおろかなり重忠。此頼朝も平家の一門情をかけて助けおき。今又我に退治せらる先其如くきやつばらも。其儘助けおくらば未々は頼朝が敵にならでやあるべき。よしなき事なゆされ何れも罷り立たれよと。以ての外に氣色變り藤中深く入り給へば。人々目と目を見合せて不便や會我の子供らが。運命今日に極まりしと。涙ながらに退出ある心。さしこそ。三尊やさしけれ。花は小櫻。人は武士。未だ十にも足らざれど。死に驚かぬ有様はいと。わはれをまさりける。かくて一萬箱王は。警固の武士に圍まれて由井の汀と引れ行く。屠所におもむく牛羊。命くらぶる如くにてやう汀になりしかば。兄弟共に敷皮に法の道ぞと心得て。手を合せて居たりける。痛はしや祐信は今朝までは若し人々の。やめて助けんと恐む心もつきはて。今はの時になりぬれば二人が後にしほくと立わづ。らふておられしが。やあ一萬箱王よ。云置く事のあるならば只今父に云ひおくべし。母が方への傳言は云ひ送らすやと宣へば。一萬は小聲になりた。何事もよと様に。母上様へやてたべ。

最期は日頃彼の如く。少しも未練にひはずとくれぐれ傳へ給はれや。とにかくに父上様母様をいとしがり。力をつけて給はれとおどなしやかに云ひければ。さしもの祐信胸ふさがり途方に。暮れてぞ居られしが。子供が心亂れんとこぼるゝ涙を押かくし。初箱王はと問ひければ。わらはゝ何とぞ今一度。母上様に逢ひ度とわつと叫べば一萬はさもし箱王人も聞く。殊には又母上もかねて云ひおき給ひしを。早くも忘れたりけるかと。大きに怒つて耻しむれば。箱王顔を押し臂を張り居直つて。につこと笑ふ心ざし群集の見物宇都宮。扱もやさしいやいたいけやと。心ざしをば感じつゝ皆々涙に咽びけり。祐信涙のひまよりもヲ、いさぎよき有様かな。でかしたりくやれ兄弟よ。めづらしからぬ事ながら。それ侍の一命は。鴻毛りよも軽くして重きは家の苗字なり。尤最期見苦しゆめ。思ひよらねども。若しや未練も出んか。是のみ心にかゝりしに。思ひの外にさはなくして甲斐なくしき體を見て。父が心も安堵せり。構へて心亂さすし今はの時は目を閉ぎ。掌を合せ彌陀如來。我を助け給はれと心に深く頼めよと。云ひ含むれば一萬はとて頼みて祈るも。よもや助けはし給はしとにかく最期を急いでたべ。父上様と云ひければ祐信いよゝ涙を流し。命助かる事にはあらず分が父の精靈と。一所にむかへ取給へと佛をたのめと云ふ事よと。兄弟にすがりつき涙に。暮れてぞ居たりける。朝綱も涙を流しは嘆の段至極せり。沙汰はないこと某も獨りの姫を持つが。此頃小六と密通し屋敷を出て行方なし。是は憶に相手あり追付目出度逢ふべきが。それさへいと悲しさにましてや長き親子の別れ。身につまされては道理と共に涙を流せしが。思ひ直して立かゝり是々祐信。か様に時刻移りては却つては爲よろしからじと。太刀ぬき持て後へまはり。兄を斬らんは順なれども弟が見ば驚きなん。兄をや斬らん弟をやハテ氣の毒や心うや。武士の役目と云ひながら無慘の愛目を見る事よと。氷の如き太刀をさげ茫然として立け

れば、祐信思ひに堪かねて朝綱の傍に寄り、近比卒爾の至りながら然るべくは打物を、某に預けられよ
 祐信が手に掛て、後世吊らはんといひければ、朝綱うれしく幸と太刀を渡して見向もせず、差俯向いて
 居られける祐信今は是までと、太刀振上げて打つけん、斬つけんとせし折節に朝日にうつり輝きて、い
 と白々とさよげなる首のはどりに太刀影の、とりかやきて常よりは猶美しく見えけるにぞ、いづくに
 刀をあつべきと彼處へからりと投捨て、兄弟にすがり付泣くより、外の事ぞなき、かゝる所へ母上は徒
 跣足にて馳せ來り、群集の中を押分け子供にひしと抱き付きわつと叫び給ひけり、やゝあつて涙をおさ
 へ、此上はみづからを子供が代りに打殺し、兄弟を助けてたべ放ちはやらじと伏し、るび前後、不覺に
 見え給ふ、是ぞ、あはれの限りなる、然る所へ重春玉照息をはかりにかけつけ、二人の子供を奪ひ取
 りまづ朝綱に式代し、近頃以て恥かしながらは兩親の目をかすめ、姫とみつう致す所に支ゆる奴のひ
 故、暫く籠居仕る次に某懸幕に付、鶴が岡の神前にて祐信殿に助けられ、危うき圍みを免れ其厚恩を
 送らん爲、是までかけ付ひなり、は檢使太刀取ひ兩所へ預りつれ歸り、父重忠にや聞かせ今一訴認仕
 らん、其内あづけ下さるべしとすさるれば祐信やがてひつとつて、いかにもは自分戀慕の儀は、は承
 り及びしが少しも心にかけるな、朝綱殿へは某がよるしく挨拶すべし、扱某神前にては自分方を助
 けしとは、身に取て覺なしそれ故にこそ祐信は、君よりは不審蒙つて斯様に難儀に及びしが、シテ又か
 たぐを助けしとは確な證據みかと、ばんせいしが繪の筆徳とは、夢にも知らず争ひける互の心ぞ晴れや
 らぬ、かゝる所へ三郎義秀鐘馗の荒たる如く、埒ふみ崩し突と入りやあゝ方々論は無益、其神前にて
 祐信が甲冑帯し出でけるも、又往來に墨塗しものいかに仔細のある事にて此朝比奈が證人たり、二人の子
 供は祐信めが讒言故にてある間、少しも氣遣あるべからず、父義盛にも内談し命目出たふ返すべし、い

づれも此方へくと朝綱諸共同意して、矢來の内を出らるれば祐經つゞいてこりや朝比奈、あらざるあ
 らざることによる、我君の証意なるを後悔するなと云ひければ、ヲ、成程証意合點たり、君よりお咎め是
 あらば此朝比奈がとつたと云へ、くじはさはくといひ捨て心静に出でければ、祐經主従狼籍者夫あます
 など追駈くるを、ごこへと云ふてねめ返し又追付けは響音させ、ねめ返しねめ戻しいきはひかうでかへ
 る波、ひいき渡つて名も高き和田の小太郎義盛が、三男三郎巴腹、生みも生んだり生れもしたりたくひ
 稀なる朝比奈が、若盛りとは今此、やつこのさかぬあらものやと末の、世までもかきつたへ

牙入

工藤祐經立かへり義秀重春狼籍のこと、すぐに傳奏してける故頼朝は機嫌常ならず、双方は詮議あるべ
 き旨は上使度々に重なれば、在鎌倉の諸大名何れもは前に相つめらる、左の上座はは舅北條の四郎時政
 逸見武田小笠原新田早河吉良石堂、右の上座は千葉上總和田島山兩家を始め、相馬藍澤土肥土屋菅井
 梶原宇都宮、次第に並居たる遙下りて工藤左衛門、墨を塗られし郎黨共引具してこそ直りけれ、相
 手は義秀小六郎祐信親子をはじめとして、ばんせい師弟をつれ來りさる鷹揚にぞ直りける、いづれも大
 事の詮議ぞとほ前ひつそとしづまりける、時に頼朝仰出さるゝは、此度會我の祐信が養子由井が瀆に
 て斬罪す、所を義秀小六郎無體に奪ひ取る旨、法外とや云はん狼籍とや云はん其罪のかるゝ所なし、
 但しは所存是あつて囚人奪ひ取るか事速に言分くべしとの証なり、朝比奈謹んで承り、証意の如く
 某重春儀、存する仔細是あつて囚人やあづかりひ、惣じて政道暗き時んば、臣是以てすと傳へてひ
 へば、今一度てんそうし証意を伺ひやさん爲ともなひ歸りてひが、又二人のせがれめは、いかなる科の

ひて武士たるもの、子供等を、白晝に引出され頭をはねられみぞ。頼朝大きにほきげん損じヤア推参なり朝比奈。彼等がおほち伊東入道つらくわたりし憎悪に。其嫡孫を滅すが何とひがごとなるべきか。朝比奈かつらくと打笑ひ。伊東を憎ませ給ふ儀は世に隠れなき事。少し心のある者は笑ひこそせめ我君の道理とはやまじ。故を如何とやに。君入道が娘に通ひ子をもたせ給ひしは。何と入道夫婦の者免して通はせ給ひしか。近頃以て不義千萬武士一同のさらひもの。天晴伊東は忠の者。主命なると思へばこそ眼を閉ちて免したれ。此朝比奈でひは、弓矢八幡大菩薩。姫諸共に頭をはね不義のみどりに致さんもの。エ、なまぬるしもどかし。なんと過つる恨を以て科なき者を殺し給ふも。は政道にてみかど詞を放つてや上れば。頼朝いよくは機嫌よからすくわんたいなり義秀。未だ嫁せざる女を戀慕し不義と仇名を取るならば。此度小六玉照も不義の罪科におとすべきか。朝比奈重ねて、誑意共覺えぬ物かな。我君罪におち給は、小六も同じ科たるべし。君ゆり給は、小六もゆりん其上二人のせがれ共。伊東が家名をつがばこそは憎悪も有るべけれ。さしも忠有る祐信が子となつて。曾我の家名をつぐからは彼等も替らぬは家人。誤つて切らせ給はんをば今ひと伺ひ致さんと。中預りひが義秀重春兩人が。誤になりやさんやと七尺ゆたかの朝比奈が。居丈高く伸び上り大のこはねをさしあげて。つめかけ、隙間もなくや上れば我君も。當座の一句にせめられて重ねて何の誑意もなくや。しづ。さらせ給ひける。重ねて仰せ出さるゝは。いかにも汝がや如く二人のせがれはさもあらぬ。しかし祐信甲冑を帯し。鶴が岡の神前に籠り居て往來の者に墨を塗り。甚だ狼籍致すの事いかなる故にて有りけるぞ。さんみ過ぎし頃八幡宮の神前に。墨塗と云ふけしやうすみ往來をなやますよし風聞隠れなき故に。夜に入り社参仕りさましく窺ひ見る所に。けしたる者のみゆゑ片端ひつくゝり。やがて私宅へ連れ歸り詮議をさげていへば。

くわんしやうたうばんせいにて大和の國のぐはぐにてあり。きたいの繪師にていへ共不幸にうれふる悲しさに召出されんはかりごと。祐信甲冑弓箭を帯し重春姫を助けしは。即ち彼が奉納せし。繪馬に書つる祐信が立出るよしことごとく白狀す。虚實は存奉らず證據の爲にていへば。墨付られし者共をいづれもは前へ召出され。鎌倉中の繪師共がさまゝおとせごおとし得ぬ。墨おとさせては覽もやひらんと言上ある。君もは不審はれね共。ばんせい「召せとの誑意にては目通りを。は免あるばんせい元より得たる所。くだんの王子の白味を以て。洗ひ落せば忽ちにもとの如くになりけり。頼朝はほくは不審晴れす尤も墨はおちたれ共。いかにしても繪にかきし祐信出で、働さしとは何共心に徹せぬなり。たしかかな言譯是あらば。速にや分くべしとの誑。ばんせいこゝぞとつと出で。恐れがましきや條にていへ共。一つは實否をたゞさん爲且は又慰。これにて一筆仕りほしやう覽に備へ奉らんと。白紙をゆくだしつゝ墨すり流し筆を染め。にんしやくるすがたゆうくたる琵琶法師がかけたをば。利那が間に書き終り献上致し奉れば。同朋達が受取てやがて。床にぞ。三重かけにける君をはじめ。は前伺候の諸大名これぞ大事の所ぞ。片唾を呑んで居る所に不思議や書ける琵琶法師。次第残らず動き出で今様派手唄手づま琴。さまゝ秘曲を盡せしは奇代。なりける。三重筆勢なり。頼朝は機嫌。麗はしくばんせいをも近く召され。汝不思議のくわんしやうにぐわぐ一道の巧妙を得し。其筆徳にて人を助け我せいたうを誤らす。奇代の重寶汝に過ぎたる財なし。向後扶持し置くべきとして大和の國にて數個町給はりは繪所をぞ下されける。これとやも朝比奈重春義を重んずるが致すの所。此度の褒美として義秀は武者所。重春は王照姫則ちは前のは媒介有難しとぞ祝ひける。祐祐經は粗相ながら是も天下を大切に。思ふが故の致す所祐信には兄弟の。子供を助け下さるゝ間急いで歸宅あるべしと。は簾さがれば人々は。皆悦の和

歌を上げ本所へに歸らるゝ千秋樂は民を撫で。萬歳樂には命を延べ實に。相生の松の風枝をならさぬ
は世なれやと猶めで。たさぞ重ねける

一心み戒意

真如廣大なれば生佛の假名を立るといへども。法性すのむの雲わつく十二因縁の峰にたなびき。本有
の月の光りかすかにして。いまだ三毒四慢の大虚に出ず。悲しきかなや佛日早く没して生死のちまた冥々
たり。こゝに文覺たまゝ俗塵をはらつて法衣を飾るといへ共。悪行猶心に逞しうして日夜につくる。
いたまじきかな二度三途の火境に歸つて。永く四生の九輪を巡らん事を心に深く思ひ取り。修行の旅の
門出に。チロシ今ぞはじめて。三熊野の。音に聞えし奈智の瀧こゝろみに打れんと。さしもさがしき崖
づたひ。やうくふへの歩みして瀧元。にこそ着れけれ。頃は臘月十日余り。谷の小川も音絶て。風
さへ氷る瀧の糸。つらゝ流れて。萬仞の。つるぎをふらす如くなり。されども文覺事どもせず着たる衣
裳をかしこに捨て。瀧壺に下りひたり首だけ。づぶと身をつけて。四句の呪文を唱へつゝ。二三日迄たぢ
るかす。五日と覺しき暮方に少し精氣や劣りけん。覺えずふつと浮上ればなじかは以て堪るべき。矢を
射る如く數千丈みなぎり落る岩角の。中行く水にさつと浮ぬ沈みぬ。流れけり。斯る危き。折節び
んづら結たる天童忽然と下來あり。文覺の手を取り岩の上をのつと置き。微妙淨音あざやかに如何に此
山の人民共。大願力の荒聖人文覺を供養して。二世安樂の結縁せよと。夕日の影ともろ共に消えて。か
たちはなかりける。此は告にもよほされ近所に有りあふ山人等。我もくゝと集まりまづ。焚火にあて
んとて。臥具湯薬を口に入れ様々といたれば。息さしすこし出にけり。すはやと人々力を得種々に看
病する所に。文覺むくゝと起き兩の眼をくわつと見いらさ大音上げて。ヤ、我この瀧壺に三七日うた

れ。若如の三浴叉をみてふと思ふ大願あるに。今日はわづか五日にこそなれまだ七日にも過ぎざるに。さまたげをなす腹立やと着せたる臥具を取て捨て。走り出るを人々おしどめ。ハテサヲ行も命のあつてこそ。平に無用とごむるを捨あひはりあひ掴みあひ。又水中に入りければ。さてもしよと法師かな必定今度は死すべきに。我身を知らぬ無分別イヤ、本氣でよもあらじ。氣ちがひさうな構ふなと皆々住家へ歸りけり。されども人の云ふ事を松のあらしとよそに聞き。一心不亂におこなひしが第三日の明方に。五體もすくみ悶絶しつひに果敢なくなりにけり。時に一山鳴動して文覺の胸中より。五色のたましひひやう／＼と空中に飛上り。四方に離散し失にける中にも青色の玉一つ。空にあくがれ行く跡の一筋白くたなびきて。又消え／＼となりけり是ぞ五つのかり物の。水は水土は土にとかへせども。元より大日覺王の分身なりとさすとすれば。かりにその身は消ゆるともするの關路に光添ふ。五つの玉の置き所實に頼もしくぞ。三重見えにける。山は都の。かたたれて。峰高からず岩木まで優美なれども人心。戀の山路のさがしきに。登り詰てはあり兼る。闇はあやなし。梅の花。年の内には人知らぬ色こそ戀の苔みなれ。されば其頃按察使大納言資方卿の息女。かはる姫とせしはしな。かたち世に優れ。閑窓深くかしづかれ用意ゆかしくおはせしが。心に深き願あつて清水寺の觀世音。のうくの誓ひひたすらに忍びて詣でたまひしに。頃まだ冬の空ながらたま／＼春の景色だつ。梅の梢もほのかなる。日和につれて思はずも鳥邊の山に分迷ひ。あたりを見れば忌はしやなきを標の高卒塔婆。いよせき煙りたちのぼり物怖るしくハア是は。ひよんな所へ來りしと立歸らんと仕給へば。向ふの峰の木の間より青色の玉ふ／＼と風に浮れて飛來り。とある茂みの笹原をふつと分てぞ入にける。姫君はつと心消は覺えず土に手をついて。様子を窺ひ見給へば。不思議やくだんの笹原より十五六なる大兒の。振分髪の肩過て四方を見は

らしすんを立。小鳥をよする口笛を然も面白く吹鳴らせば。木々に囀る百鳥のおのが友々呼連れてあさる。景色の。三重面白や罪も報ひも。後の世もありとは聞けど忘草。忍び音に泣く羽拔鳥羽子にさ／＼れて鳥もちに。己れとまごひ苦氣にはたり／＼と音するを。取ては締付け捻殺し提げたる籠に敷へ入れ。心地よげに打笑みて靜に。歩み行跡をせめて便りと。姫君は後に付添ふおもかけを見振返り。ハアこゝな上臈は。何の用ばしあつて我方へは來らるゝやと言へば。さればとよみづからは大切成し願あつて。清水の觀音へ日毎に参りひが。けふしも此所へ思はずもふみまよひ。人目もかれて恐ろしく跡へも先へも行道を。いつこと分かねひと打しはたれて語らるゝ。ちごつく／＼と聞き扱はそなたには。願参りの折から途に迷ひ給ふとやそれ付。我も心に深き願あつて。此様に狩殺生をし山神を祀るなれば。思ひは以て同じこと幸ひ拙者が住所。暫らく休みひて心靜かに佛詣あれ。先づ此方へと案内して行道すがら四方山の。はなしに心打とけてイヤなふお兒様。最前向ふの峰より。青き玉の飛來り草原に落ると見し。其跡よりお主様の出ありしが。先其玉は如何なる物にや。は覽ひらふかとあれば。イヤ拙者は見やさずひが。定めて夫は魂魄にてやひらん。惣じて此山は死人を送る所なれば。左様の物はさいさいあると珍らしからずといひければ。かはる姫とつとしてア。こはやと抱付ば。ニハ臆病千萬ヤ。とかういふ間に我廬いざさせ給へと枝折戸をあけて内に招ける。茅葺き渡すのさのつま猪猿糞いろ／＼の。大鳥小鳥懸並べ床には丸木の太弓に。矢の根磨いて立たりけり姫君見るから恐ろしく。座にも居られずうろ／＼と興醒たりし。顔を。主人きつと見て察するところ上臈は。見慣ぬ體にて氣遣ひしたまふと覺えたり。些とも苦からず某が心底残らず明しやべし。シテ先そなたの願は如何様のお望みぞ。ともく談合に乗り力をそへ進せんに。さあ／＼と語りたまへと睦ましく聞ひければ。さればひみづからは。

按察使大納言資方卿の獨り姫薫ごや者なるが、さいつころ清水寺へ參詣せし折から、袈裟は前と聞えしは方を、輿のひまより垣間見し其おもかげの忘られず、寢ては夢覺ては現幻の、身にひし〜と付添ひ忘るゝ暇も涙川、深き戀路のやる瀬なくせめては一夜の枕なりとも、かはさせてたび給へど毎日に參詣なり、哀と思し給はれどさめ〜、泣いてを語るゝ、あるじ聽て扱も不思議の事を聞くものかな、ナフ其袈裟は前と我はさし渡しての從弟同士、遠藤左近の將監持遠とせし者の子虎若とは我事なり、幼稚のいにしへその袈裟は前とは、夫婦になすべしとの許嫁ありけれど、惡黨者として十歳のころ筑紫に追下され、其間に父將監は世を去り給ふ、田舎住居も物憂くてひそかに登り此山に隠れ居て、何ごがなして父が遺跡ふたゝび武家の本懐を達せんと、存じつめていと語る詞に薫姫、顔打赤め扱は左様に袈裟は前と、よしみあるは中と知らで語りし我思ひ、かへす〜もはづかしや、それにつけてもおぬし様はアノ美くしき袈裟は前の、花の盛を見捨てつゝ久々他國に在ますは、ほんに無氣なるは方やと、うらやまし氣にのたまへば虎若聞きもあへず、イヤ〜左様に色めひたる女の事は、誓文びやくらい聞くも中々けからはしと、顔打振て言ひければ、ム、すれば袈裟は前のひことは、ふつうにお嫌ひひこやヲ、お嬉しや、然らば此上は何卒してみづからが、戀の叶ふ様に膽いりて給はらば、生々世々のは恩ぞと他事なく頼み申さるゝ虎若眉を顰め、イヤ是薫姫、ろなたの最前より宜ふと拙者はかつて心得ず、そもや〜女が女に戀して、かんじんの事はハレやくたいもない人やとて、腹筋よつてぞ笑ひける、姫君さらの顔色にてハテとくとする〜の、分別をも聞きわけず氣の短いは方や、徳じて神佛を祈るには叶はぬ事を頼めばこそ、身を投打ちて願ふなり、然れば法華の功德には八歳の龍女も變生男子の奇特あり、じかれ共るれば悟りて佛に成り、永々しき樂み廻り遠く思ふなり、實にや大悲の誓ひには枯たる木に花

咲と、頼みを懸けてみづからが此身ながら男になさしめ給はれと、願ふ誠の成就せば随分と身を盡し、袈裟は前と一夜の枕かはさん事、是本望にいとくごき立て宜へば、虎若與醒め默然としてゐたりしが、イヤ斯様に思詰めたる女心の消さんもよしなしと、よい程に挨拶し、さあらぬ體にてあたりを見廻し、ヤア幸ひの物こそあれと、床に置たる遠目鏡を取出し、是は此所よりゐながら都の名所を見る、平生の樂みちとほ覽もやと差出せば、誠には珍らし、それ此方へと手に取て、先づ目に懸る白雲の雪かど、まがふ、高根こそ、アノあれ比叡の山ならん、麓の里の冬木立、どう〜として新木樵る、小野の炭蘆、細々と、煙りも絶て、見え分ぬ年の寒きにこ草の、萎むにおくれ色かへぬ、松が崎より打つ〜、杜の一ひらかう〜とゆふしでかざる加茂川や、遠里人の、歩行渡り牛の綱手を、曳く賤の、幽に寫る其景色、繪にも及ばぬ風情なり、左の方は大内の、玉しく庭のさら〜かに三つ葉四つ葉の殿作り、楡皮に續く四柱亭にやり渡したる長廊下、さも美しくしき上臈の、靜かに歩む〜なり、あつた物ではござんせぬ、コレ〜ならぬと虎若目鏡うけとり、暫し見とれそゝる震ふて、扱も〜世の中にかゝる美人もあるものか、とても夫婦となるならば斯様な人と添てこそ、今生の思出ならん抑も誰人の御息女ぞ、いづかたのほ所ならんと、魂魄を奪はれてそゝるになつてぞ見惚ける、姫君脊中をほと〜叩き、コレハマあ何んとしたるは風情、先程までは女は見る目も汚らはしと、誓文立て宜ひしお言葉とは違ふたり、ちと妾にも見せ給へと宜ふ言葉も聽入れず、ア、忙しない今が大事の所じや、彼の四柱亭はあらふ事の、湯殿と見えて美しくしひ女が肌をあらはして湯へ入は、扱も〜うまいこと、ろりや湯から上臈が上られてしやらり〜と歩まるゝ、ハアあなたの座敷から若い男が戸を明けて、浴衣ごしに抱つて何やら物を云ふよな、ハテ聽たい事かなと目鏡を耳に押あつればハテ譯もない、遠く見ゆる目鏡なりとも耳に當

で、おごないが、聞ゆるとのあるものか最早些と貸たまへと。姫君受取暫し見てハア不思議や。妾が戀せし袈裟は前には是程迄も似る者か。目元から口元なら笑ひ顔まで生寫し。去乍ら夜目遠目笠の内。まぢかく見たる戀人は是より遙かに増しならめ。正身の袈裟は前を其方様に見せたらば。いか程あくがれ給ふらんと宣へば。虎若聞きもあへすいつかな。たどひ如何様の姿なりとも今見る人には思ひ變じ。これ〜此方へ〜と目鏡受取差のぞきハア。名殘惜や見し人を。連て奥に入たるはヤレ暫くと煩悶れど。いふに甲斐なき條は雲の煙りと立おほひ。えん〜として跡もなく。かの李夫人のおだし影消えて果敢なき別れなり。又もや見ゆる事こそそなたを見れば何かは知れず。廣々たる屋敷の體中門遣り戸を押し開き。盛過ぎたる女房上に座をしめ廣縁には。布衣の侍伺候して庭に下部の奴共。長道具を閃かし彼方此方と騒ぐ體。只事ならず見えければコレ〜姫君。今度は格別のものこそ見ゆれ。サア見給へと勸むれば。姫君手に取り熱々と見てヤア悲しや。あれはみづからが屋敷なり妾か忍出でたるを。繼しき母の聽出し詮議あると推したり。コレハ先何んぞせふア、しんき。イヤ〜早ふ歸らふと。色を違へて出給ふを虎若暫しと押留め。かく騒がしき折からは身獨りは氣遣し。見えがくれに後見せん心安かれ姫君と。諫め力をつけやし飛立ばかり急げども足弱車の我からの。心も亂れ氣も消えて覺えず辿りて三重歸らる。去程に。資方卿の館には姫君見えさせ給はぬ迎。は臺所早瀬の源内武里を召され。先はう〜へ手わけして尋ねさせよとありければ。は内方の若侍お出入の百姓共彼よ是よとひしめきける。斯る所へは祈願所奇妙院の覺力坊。弟子共引連馳參じ此由を見てハテ仰々し先々静まりひ〜と近習の人々退けは臺所に打向ひ。シテ先此騒ぎは何んぞしたるは事ぞ。能く心を鎮め聞召せ。薰姫の心ろぞうになり家出をせらる。事。是以て某が行力の驗なり。然るを何んぞや得たり顔に斯様にわ〜しく振まひ給

は。資方卿の心に我子の悪事は扱置。なさぬ中とて悪様にいひなすなど、思はれては。企し事も無にならん随分柔和く待遇し。姫が悪事を隠す様に仕給は。いよく憎しみ重なり父の腹立ち強からん。ヤ人なき内に先内々の埋みし物。それ〜とあれば源内承り姫君の寢所の下。埋みし函を掘出しやがては前に持参せり。覺力坊蓋押開き中より鴛鴦の雌鳥を取出し。ヲ、我が行力の通じてや此鳥恙なくありけるよと。秘文を唱へ刺たる劍をひん抜いて。突殺さんとする手を源内押し止め。卒爾ながら些と伺ひゆたき事のひ。只今此鳥を殺し給ふ意趣は。如何様の事にひこいへば。ヲ、不審ならばは。語つて聞せん。是は愚僧が師傳にて。憎しと思ふ女の髪を捻合せ鴛鴦の雌鳥を繋ぎ。函に納め加持をして臥所の下に埋み置ば。其身淫亂になり家を浮れ出迷ふ。其時件の鳥を殺せば其女二度家に歸らぬ事必定なり。何と奇妙の呪咀ならずやと賢氣にいひければ源内不興顔してヤアラ聞こえやぬは仕業。コレは臺様。何と内々の誓約は失念ひか。今さらやもくごれども我年頃姫君に心を懸け。兎や角思ひわびひを存知せられ。此頃の仰せにも元よりま〜しき姫なれば。總領とあをがん事思ひもよらず。幸ひ心を懸し其方と添せん間。姫が心も和々爲の祈禱の供物になるべき。鴛鴦を生ながら竊かに取て参らせよとのは意に従ひ。大澤の池に行き大事にかけ生捕。進上すてより今日や其戀叶ふ。明日や文の返事やあるとらつら〜と暮す所に。今其鳥を殺し姫君失敗て給ふならば。私へのは契約は何とせふと思召す。イヤ何方の姫君を某に下さる。ぞ。サア返答あらば云ふて見給へと座を打て罵れど。は臺ごかうの詞なく差うつむいて在しける。源内いよく勝に乗りエ、楯に釘を打様に答もなき事云ふも無益。よし〜此企の事を殿へ一々や上んと。ずんぞ立を兩人袖に縫り付。ハア短氣なり先駕と心を沈め聞分よ。姫此屋敷にありては其方が戀何程思ふと甲斐あらじ。さるによつて二度歸らぬ様に道切りをして。外にて其方と

添せんとの手段なり。此所存全く偽りなしと詞を盡し宥むれば、源内少し色を直しハテそんなら疾から
 左様とも宣はでど、むぢ〜と揉手をして元の、座にこそ直りけれ、斯る所へ資方卿大内より歸らせ給
 ひ、扱姫が行方未だ何方とも知れざるか、如何に〜と問ひ給へばは臺悲しき風情にて只さめ〜と泣
 給へば、覺力坊は殊勝氣に算木數々とりみだし、ア、何とやらん占の表、凶事に見えひと静まり返つて
 居る所へ、虎若は日頃念頭に語らひし、山伏のうんこに有けるが、先達の装束借て着用し、柿の衣に
 黒腰巾十二因縁の襷をたゝみし兜巾を懸け、不淨を拂ふ忍辱の袈裟、黒漆の笈取つて肩に懸け椽端に
 うと置、いらたか珠數をつまぐり目八分に左右を見廻し、上座にむんすとなほりけり、資方は覺し是は
 何方よりの客僧、何とて入來ひとあればさんひ、元來野に起き山に臥し、嵐の枕雲の襖飛行自在の蘇民
 書札、此家の騷動天元を以て見るより早く、矢の如く畿岐の國より來りたり、それ〜家内の火を點じ
 〇洗米を供へられよと横柄らしくあしらへば、覺力坊きよつとして、虎若の姿を見上げ見下し、ハア何
 どやら合點の行ぬ眼つき、頭の掛り詞の體定めて是は天狗の變さならんと、わぢ〜顔うてゐたりしが
 〇イヤ〜何にもせよ弱味を見せばあしかりなんと、心を屹度取直し、ヤイ是其方は近頃法式を破る推
 參者、いで〜我法力の行作を語つて聴かせん、敬々しくも若年の昔より役の行者の跡を踏み、那智に
 千日大峰三度、萬城高野金峰山白山立山富士の嶽、伊豆箱根信濃戸隠出羽の羽黒、總じて日本國中殘る
 方なく行ひ廻りし某がある所へ、若輩の強力輩一座には叶ふまじと〜退れと憤りけり、虎若聽も入
 れずかつら〜と笑ひ、何じや褒人もなひ六法詞、山々の名所づくしよしなき事をいはんより、姫の行
 方を占ひ早速歸らるゝ様にせよといへば、サレバ占の表今日のほんばんゆこんに當れり、此文字を足苗
 と和訓すれば、歩行にて出給ふ姫君歸り給ふ事は難かるべし、但し其方が法力にて變りたる微やあると

たゝみ掛て言ひければ、ヲ、ゆこんにもあれ又はくわがい絶體絶命にもせよ、たんできの奇特を見せん
 と算木奪取り座をならべシテ失せ給ふ姫君の年はいくつ、何十五とや、然れば甲子の水性、又夫なるお
 侍はヤア廿五、寅の年の木性、ヲ、夫ならば相性目出度ひに何とて戀が叶はぬぞや、扱は臺のは年は卅
 八とや、癸の卯金性、其山伏殿は四十二とゆひか、然は乙の酉水性ヲ、道理かな〜、扱は臺所と山伏
 が中よく肌の場合も金生水、同性同根ならずとてなご繼子をば憎み果て、呪殺さんとはよくも〜たく
 んだり、は存知なければ大殿には嘸不審に思ひ給はん、然れども秘事はまつげ、いで〜某が占の傳を
 明しやさん、最前騷の紛れにあれなる植込に立隠れ、彼等が惡事一々残らず聞さず、首尾を計らひ直に
 姫君を父御に手渡やさんと、時をうつしひなり、是々對面遊ばせど、笈の戸扉を押開けばいと羞かし氣
 に薫姫、笈の中より出乍ら父の御機嫌、母上の妬き目色に心消え補打おほひ在します、虎若すんど立衣
 裳を取て捨て、まつ山伏ことは是迄、扱は臺からはこつちやう共が、化を顯し見せやさんと源内を捕て押
 へ、サア犬めは怨毒の呪言、一々に白狀せよと太刀を胸におし當れば、ハア何がさて〜、眞直にやませ
 ふ、少し緩めて給はれと繼母の嫉妬覺力坊が惡業、一々残らず言ひければ資方大きに立腹あり、エ、に
 つくき畜生共が仕業見るも中々穢らはしと、扱は臺所を取つて伏せ、エイと云ふて一刀に刺殺し給へば、
 費力逃れぬ所ぞと扱打に丁と斬る、虎若是はとつ〜とより、向ふやつばら散々に前後、左右に、三罵き
 りまくる、斯るまぎれに源内は、姫君を肩に懸け行方知らず失にけり、資方見給ひやれ源内めが姫を連
 行くは、たれかあるわれ止めよと駆け出給ふ、うしろより覺力坊つ〜と寄り、だまし打にはたと斬り乗
 懸つて止をさす、所へ虎若立歸り横様にむんすと抱く、弟子共左右より取付き足を取んとせり合を、左
 手右手に蹴倒し覺力坊が小腕取て捻廻し、眞逆様に取て投げえいと云ふて踏殺し、手向ふ奴等取ては投

つけ。引寄せ踏付散々におつ散し。扱姫君のほ行方何處迄もと駈出る。其有様は村雨を嵐の誘ふ如くに
て。さらさらさつと走り行く實に假初の縁により。斯る難義を見繼ぐ事誠に武士の一言は。金より猶色
變ぬ心の。末こそ頼もしき

才二 偷盜戒

片思ひ只我からと身を碎く。早瀬源内武里は薫姫を奪ひ取り。彼所此所とさまよへども身を隠すべき所
なく。嵯峨野の邊りの芝原に夜半にまぎれ忍び出で。如何に姫君是程迄心を盡し。いろく口説けど
も一圓靡く氣色もなき。心底推量やたり。たとひ命はとらるゝとも我心には従はじとの詞の詰。それは
昔から貞女立をする者の言分其手は古くひ。かうや悪る上は此戀叶はぬ物ならばコレ。此刀にては身を
殺し我も同く自害して。一つ枕に添寝をし死體を此野に曝しなば。世上の人の風聞に心中づくにて刺違
へ。死たるなど、繪草紙にも言ひ立られ。それを浮世の思出と覺悟致してひがサア。只今こそ有無の返
事の聞納め。如何に〜と言ひければ姫君兎角の言の葉もいと。涙の玉の緒の消えなん。事を露程も
惜とは更に思はねども二人死たる其跡に。仇名の立ん口惜やよし〜何とぞ偽りて。いひ逃れんと思
召し心に有らぬ笑ひ顔。にことは、笑みイヤなふ源内。それ程深き心底と知らで無情我心。思へば〜
口惜けれもう此上はなにがさて。否とは言はぬ思はくとしと。もたれて宣へば。源内はうと腰をぬか
し。ヤアそれは實にてみか。八幡添けない。然宣ふ上からは日頃はお主向後は。我女房と存すれば。先
差當りての身代咄が肝腎なり。されば某先日屋敷を立退し時。事急なれば何の貯蓄もなく明日の糧さへ
つき果たり。それに付き此下嵯峨に。衣川とて富貴なる尼隠居してありけるよし。彼が所へ忍び入り何

ぞ盗んで當分の世渡りにせん。最早かう成上からは其稼の夫婦連。さあ〜此方へ〜とかしこの「や
しきの裏道の。藪垣を切破り。外にては人も咎め犬が威てかしまし。先々内へと姫君の手を引きそつ
と立入れば。姫は生たる心地なく胸を冷して在せしが。實に幸ひの事こそあれ。隙を覗ひ此家の主を頼
み。身の有様をも語り如何にもして言ひ逃れんと。思ふ内にも何となくわぢ〜震ひ在せしを。エ、心
弱し些とも恐い事はなしコレ。此手水鉢の元に身を隠し待たまへ。奥の様子を見て來んと様手に手掛け
遣ひ上れば。假にも響く板敷の。上に氣をつめ身を縮め。拔足してこそ入りけれ。やふけ過る冬の
夜のいとご寒けき衣川。老の寢覺に起出てアッ不思議や。とろ〜寝入る寢屋のひま兄遠藤持遠殿。枕
に寄添ひ起よ〜と宣ふと。思へば覺る夢心何とやら氣遣し。誠に明日は持遠の命日にて有物を。胃
の勤の怠を進め給ふか有難や。行住座臥のいぎやうだう。勿體なくも忘れしと。持佛堂の火をかかげ。
鐘打鳴し南無阿彌陀。南無阿彌陀南無ア。何とやらそよ〜と。松吹風も騒がしく物すこき夜すがらと
。思ふも妾が信心の未結定なる故やらんと。又打鳴す鐘の音に連れて後の杉障子。そつと押明け薫姫。
おづ〜顔を差出し。やし〜と宣へば尼公はつと膽を消しア。こわ誰じや何者ぞ。いや苦しうもない
者ぞ。言へ共更に聽分す夜更てつひに見ぬ人が。案内もなしにこ〜へ來てなんばう苦しうない逆も。此
方は仰山おそろし。シテ先そなたは何人ぞと。襖に取付立も得ず念佛やてゐられけり。姫はとかうと
云ふ事を源内や聞らんと。尼公の側に寄りければ尼君いよく恐れ。ハテ用があらば其所からいや。爰
へはお出んなわれ〜と此所や彼所と任給ふを。やう〜袂に縫りつき始め終りを委しく語り。兎角只
お情に難を救はせたび給へと涙乍らに頼まる。尼公つく〜打聞て。ヲ、お愛しの事どもや心安かれ
成程勞はりやへし。去ながら其盗人を如何にもして欺すかし。侍共に搦めさせん。構へて〜心懸き

仕損じ給ふな上臈と。談合爲と示しつゝ、事をしづめて入給ふ老の「思案を物償しかゝる折節、虎若は姫君の行方、隈なく尋ね今日は又嵯峨野の邊りを心懸け、夜に入り獨りすゞと立歸らんとせし所に、白色の光物くるり〜と閃めきて、ちやう上に立止りふつと落ちて消えければ、おほえすごうと蹶つき茫然として漸しばし、心を沈めあたりを見廻しやら心得ぬ事かな。我日のうちは常の住所にありけるが、思ひもよらず廣々たる此野邊に来る事ム、出来た我日頃薫姫の行方片時も忘れず探ねんと、思ふ念慮に引れうかく歩み來りしよな。さるにても此暗夜に道の程もおぼつかなし、松明もがなしたゝめんと彼所の垣根をかなぐれば、内より女の聲音にて是なふごに居らるゝと、忍びやかに云聲を虎若悪く氣を廻し、ム、扱は此内の者共が忍びて濡をやるさふな、やらをかしや何とぞ様子を聞かんと思ひそつと立入り行き様に互にこんど行當り、なふさき程よりさぞや待兼氣遣や仕給ふらんと、睦まじく手を取ば虎若おかしさ堪へ兼、くつくつと笑ひ出す口に手をわて居たりける。姫君耳に口わて、ハテおかしうもない事をと、しと、叩けばさよとしていやなふ、奥の首尾は能いかと問へば、成程〜能くい去ながら、まだ下々の者どもが篇と静まりひはす、能い時分に此方より相圖を致しやさんと、語る言葉のしな〜を懸と聞なすをかしさよ、しばらくあつて源内は衣類調度肩に懸け、小聲に成てコレ姫君、何かは知らず手觸りのむつくりとした物ぞ、請取給へと差出すを虎若そつと手に取れば、コレまだよい物多く盗み出し此所へ運ぶべし、外へばし行き給ふなと、言捨て、奥に入にけり、虎若打領さ、扱は此奴めは盗人よな、はれやれよき幸ひかな、骨も折らで珍重々々まだ何にても持て來よと、強賊物を奪ひ取る心を染みやすき、すすきもあらせす源内は有合ふ物身にわまる程持出て、姫君〜と云ふ聲に薫姫そつと寄り、ヤア先程から相待しに何方に在せしとあれば、源内聞てヤア、只今渡せし小袖は如何

にといへば、それは先何事を宣ふぞ、ハテ確と手渡しせしいや請取らじとせり合ふ所へ、尼公障子をさつと明けヤレ盗人よ出合〜と呼はらる、源内すはや顯はれしと後の松の造木に、する〜とかけ登れば虎若は度を失ひ、垣の外へ飛越て内の様子を聞居たり、尼公長刀横たへ甲斐々々しくも下知をなし、ヤア家來の者共それなる姫には様子あり、先盗人めをかり出せと椽端につゝと立、ヤア盗賊め自餘の女どあなごつて能も〜逆盡き此家敷へ來るよな、數ならね共みづからは、遠藤左近の將監が姉衣川の尋常に出て勝負をせよ、小長刀の刃の程を見せんと、宣ふ聲に虎若はつと驚き、ナフさ宣ふは叔母君か、虎若にてひと云聲に薫姫、やあ是は不思議のほ出と縋りつきてぞ泣給ふ、尼公眉を顰め是は何共いぶかし、我を慕ひ來るならば何とぞ禮義もあるべきを、夜陰に及びかゝる騒ぎの其中へ顯はれ出るは何事ぞ、必定其方も盗人の荷擔人かどにがりきつて宣へば全く左様でひはず斯様〜の次第にて、久々他國にひ内此所に出入とも存せず、推参仕り不思議の對面致すこと、返す〜も嬉しやと涙を隠しやさるゝ、尼公つ〜聞給ひヲ、何様我此所に、隱居せしは近き頃の事なれば知られぬも理りよ、先々無事なる顔を見て、扱も〜嬉しやな、かくあるべきにや宵の程死て別れし將監殿を、まざ〜と見し夢も思へば〜理りや、サテ内々身が事上よりの内意にて、父の家名を繼がせ給はんと仰せなり、ヤア手前の話に頓着しかの盗人の事わすれたり、それかり出せと此所彼所捜せご更に見えざりげり、時に下部の末座より、ヤアあの松の枝に何やら黒みて見え、それ鎗よ突棒よと騒ぎ廻れば虎若押し止め、エ、こいつひとり手にも足らぬ鳥めを、手取にして見せんと松の根に手を懸けえいや、〜と押ければ上より堪らすごうと墮るを、取て押へ繩をかけホ、潔よし〜、明なば内裏に訴へんと、先々お休ひへと尼公の手を取り、姫諸共打連て寢所にこそは、三重入給ふ、其頃近衛の院を奉り、聖人の世の跡

を継ぎ延喜天曆の、かしこき例になぞらへ絶たるを継ぎ、廢れたるを興し萬機の繁き政、筑波の山の影
 よりも、繁き恵に民草の靡かぬ方もなかりけり、さるに因て今度津の國渡邊の橋奉行、舊規に任せ渡邊
 黨の武士に、仰付らるべしとの勅により、則遠藤虎若を武者所に叙せられ、遠藤武者盛遠と更名あり、
 實に身にあまる悦びの袂寛に束帶し、大床に伺候し謹んで畏り、資方卿の愁傷薰姫の行方、又源内が非
 道の旨一々奏しやさるれば、實に神妙の働き功に任せ、則ち津の國渡邊の庄を給はり、薰姫を婚姻し家
 門を取立すべしと、正理に任す勅りはつと頭を席に付け各、此前を三重おり給ふ、それより日々の作
 法より鏝寒孤獨の者迄も、力に應じ夫々に米錢を與ふれば、民屋豊に繁昌し既に造營み終りけり、供養
 の日にもなりしかば、元來盛遠美麗を好む若盛り、馬上勇々しく供廻り對の臺笠おつ立てる、任せてを
 ける滋藤の弓鎗二行に列を引き、橋の邊のひらばりにすつと入て着座し、眼を配つて居られしはいかめ
 しくこそ見えにけれ、扱一番の渡初め吉例に任せ、浪花の庄司二人の子供を引連れ橋のなかばに出け
 れば、頭領さんご座を立ち飾り立たる樽肴、ほうしゆに供へ三獻はして奉行職に奉れば、是も同じく三
 度酌み庄司にさせばおしいたゞき。

木名はう

それ、子供家例なるに一さし舞へ、はつと答へ立並び、拍子を、揃へて、川橋の、かゝる折にもあひ
 竹の直なる道は今とても、飛彈の工匠がすみかねを萬の木々に打渡す、雲井の軒端のどやかに春の、ひ
 のきの今日もすぎ、明日はならの木いつとてか、常盤の、松は其昔秦の始皇の時、太夫と封じ給ひし
 も雨の宿に葉を垂れて、みさほかしこき冬の日も雪を頂く翁草、君子の徳になぞらへて桐の、はわけの

秋の月よ、しと、人は浮かれてもねふりの木こそ、うたてけれ、紅葉にあかぬ立田姫、手初の衣の色
 をを時雨に染てふれやふれ、我振袖をさ、きてみよ、かしの、葉の露も、夏の朝けの風すし山時鳥
 一聲を、忍び兼たるうつきがき男、結びに、さりと廻し、しやんと結んで腰籠を、人にまがへて、鳥
 おとし、見れば木蔭に笠を傾け居るを、それ、うれと知らず餌指棹、も、ちの鳥の、聲々に心のみこ
 そあらたまれ、梅は浪花のみこの神高津の宮に跡たれし、我日本の内のみか、唐の帝の、文學に、句
 も増してさかんにて、雪を集むる窓の梅ひとへ、と鶯がふわと木傳ひ飛梅を、一枝折ていたい氣な
 子供にやるかしなの梅、梨下の月影さえかえる、庭の猪の長き日も暮に數ある履の音、うけて流して
 たよ、と柳の靡く、おり、は、風の姿とおもはゆる、いくらの春も待わびて、花の心を催して、い
 さめの鼓唄ふよ面白の、春の景色や、筆にかくともよも山の霞は、繪にも、及まじ彼岸櫻や初櫻ひとえ
 に人のもて遊ぶ、小兒櫻に姥櫻揚貴妃櫻は音に聞く、見ぬ唐土の鳥までも爰にやどりてきりがやつ、夜
 の間の雨に、散る花を、惜めばいねうしとらのをの、かには櫻や伊勢櫻散らすは風の、どがの木と思へ
 ば、いとむくつけき李から桃、水松はしばみ様々の、木々の數々千代かけて、君が齡はさぐれいし、
 巖とならん楠のつきせぬは代の橋ばしら萬々、歳とぞいはひける、こと納まれば磐固の武士、矢來をさ
 つと押開き群集の、人を三重通しけり、大勢の其中に山伏ども數百人、ひた、と集まり番所に立て
 たる鎧長刀、手々に奪取り一時に奉行の前につ、懸る、中にも七尺あまりの大法師二人真先に進み出
 り、やあ、盛遠我々兩人は、和泉の阿闍梨河内の律師と云ふ者なり、先年資方の屋敷にて師匠覺力坊を
 其方にうたせ、敵を取らんとつけ狙ふ所に、運強く今日までは延したり、最早只今こそ寂滅の貝吹かせ
 ん覺悟せよと言ひければ、盛遠空嘯いてム、誠に一寸の虫に五分の魂と聞く、しほらしいうんざい共あ

れ討取れと。下知すれば、血氣に速る者若共我も〜と拔連て亂合てぞ。三馬戦ひける數多の見物。崩合ひ老たる者は地に轉び、或は女童子共、父よ母よとさけぶ聲更に分ちもなかりけり。然る所へ盛遠は髪打亂き大わらわになり、着たる裳束我と切裂き太刀を彼所にかつはと捨て、橋の東西かけ廻りア、苦しや、さしも貴き覺力坊を、及に懸し冥罰當つてナフ熱や堪えがたや、如何に行者達疾う〜我首取て此苦みを助けてねべ、南無と云ふて立竦み眼を見詰めるたりけり。二人の山伏力を得ヲ、然もあらんいで〜望に任せ娑婆の暇を取らせんと、兩方より立寄るをむすどひん抱き引締て、ヤアうんたらたかんなまん何しに罰が當らふと、二人乍ら橋より下へごうご投げ、有合ふ山伏おん廻し東方に降魔の劍、西方に大音上げおめいて懸れば南方は、眞下りに遁て行く北方金剛力を出し、中央大日不動の利劍振立て、橋の行桁おんころ〜とどろ〜と踏鳴らしむら〜ばつと大勢を、橋守る神の手向幣扱ひ、清め奉る。

才 三 邪煙戒

老せぬや藥の名をも菊の水、盃も浮み出で共白髪まで壽の、相生の臺の物くはへ銚子のつき〜しく、儀式立たる座敷の體嫁御はそれと白小袖、日影はのかに薰姫うろ〜し氣に座し給へば、次には叔母の衣川袈裟前を始めとし、一門の女中各並居給ひける。中にも衣川お年役とて差配して、イカニ盛遠今度の祝言は忝くも君よりの勅に従がひ、取結ぶ事冥加に叶ふ事共なり。幾千代かけての盃をそれ〜と有ければ、薰姫取上げ盛遠にさし給へば手に土器をすへ乍ら受もやらす座敷の體、じろ〜と見廻し、イヤ是叔母君の次に居給ふ上臈は、何とやら見知りたる人なるが、誰殿の息女とあれば衣川聞給ひ、

ハテさやうこつな問ひ事かな。あれこそは袈裟前、五つや六つの頃迄はそなたと一所の懐ろに、添寝をせしも年長てよそよそし氣なる言葉やと、笑ひ乍ら宣へば盛遠まじ〜と打まもり、サテ不思議なる事共かな。其袈裟前は十余年この方、逢も見もせぬ面ざしの大人びたるを見知りぬるは、合點の行かぬ事かなヲ、それよ〜、何日や東山の庵より遠目鏡にて見し姿、此人にこそあんなれと思ひ出せば彌増る。其初戀の今更に見れば見る程美しく、そぞろ浮かれコレ叔母君、我幼少の時袈裟前とはいひなづけあつて、末々は夫婦にせんと、父將監の宣ひしを小耳に篤と覺え、然るを只今契約を違へ薫姫との祝言は、如何に上よりの仰せなればとて權付の縁組存じも寄らず、幸ひ事序に袈裟前は、夫婦の盃首尾よくさせて給はれと眞顔に成ていひければ、ひたひに波の衣川のやとよそれは誰人も、幼き時の根なし事ひるな遊びの戯れに、妻よ夫と云ふ事は誠にあらぬ言葉なり。其上袈裟前には源の渡と云ふ聲をとり、二つになりし子迄有よしなき事をいはんより、サア機嫌よく嫁の盃早々と、宣ふを聞も入ず、何先達て聲をとり子迄まふけひとや、假令源の渡にもせよすたるにもせよ、先約は我なれば此世があの世に歸る共、やはか添はで置べきかと眼を見出し罵れば、イヤコレ和主は氣ばし違ふて物に狂ふか、ヤレ篤と物の道理を聞分られよ、帝より給はつたる妻にはそははず、主ある女に心をかけ獨りの叔母に噴毒を燃させ、我儘をはたらく段一々上に奏問せば、そなたは痛い腹を切か又は遠き島にも流されんは必定なり。ことの暮らぬ先に思案を仕變へ、盃を取上られよそれ〜とあれば、酌人銚子を加へつがんとするを盛遠長柄をつき退け、物をもいはず佛頂面して土器取て投付け、いはして置けば方圖もなきわんざん、エ、叔母にてなくはと睨付けずんご立て入れれば、一座に在合ふ人々は興を、覺して居たりけり、見るにうたてく袈裟前薰姫に打向ひ、其方様の心底世に迷惑にひふなり、去ながら盛遠

殿は姓得の我儘人。殊に今宵は酒に酔ひうつゝなき有様。搦へて搦へて心懸させ給ふな姫君と手を合せ宣へば、姫はことなき顔色にて、何しに悪く思ふべし酔の紛れのそら言。醒ての後に機嫌をとり、御異見致し随分と、心を宥めゆべし元よりおぬし様にはみづからは、影乍らもお愛しく山々思ひひへば、悪ふは仕爲すまじお氣遣ひ仕たまふなど、おほとか成し挨拶に座中の人々色なほし、共々打着せ参らせてそれ〜とおとこ長枕。ふた夜の契鴛鴦の、ねやにいざなひ奉る。添はぬ妹脊の、片たがひ、中に立たる横柱しとともたれて薫姫、獨り淋しく居給へど、盛遠は虚寝入、夜着引被り臥たるを、そつと押明け揺り起し、誠に深き心無理とも更は思はれず、みづから女の身にてさへ袈裟は前を思ひ染め、命に懸てさしも草頼み甲斐なき觀世音、願立したる詮もなく最早叶はぬ我戀と思ひ諦めひなり、は身は男の事ばれば只ひたすらの執心を、何程遠んと思す共、流石主ある小夜衣、返す〜も此戀の叶ふべし共思はれず、斯様にゆせば主様に心をかけ、倍氣故の妨と悪ふ聞なし給ふなよ、上の仰せの重き故是非なく縁を結べども、父に別れし悲しみに愛世を立る心でなし、もう此上は夫婦の因縁さらりと止にして人の身ながら大切に、思ふが上の異見なり、道に違ひし戀草の根からふつゝり思切り給へやと、理りせめて宣へば盛遠むく〜と起き、そなたは若年よりの約束も、知らぬ人を相手にして千も萬もいらぬ事、ちぎに逢ふてのつめびらさ障子襖の隅々まで、爰や彼所と尋ね廻りヤア袈裟御前は歸らぬしか、つれなの人や是程まで思ふ心を願す、外の男と添んとはア、情なやサア、否か應かひやとはいはせぬ、どうでもかうでも夫婦ぞと問ふつ答へつ獨り言、そとろに心亂れ髪はら、はら〜はら腹立やとほつとつゝ息黒色の、玉と顯はれくる〜くるり〜苦氣に、狂ひ出んとする所を姫君是はと廻りつく袖振放ち突倒し、かい振て走りゆくアツトばかりに薫姫、消る心を取なほし暫し〜と云ふ聲も、枯野に弱る虫

の音の關地たどりて 三尊天の川、白きを見れば、更る夜に源の渡は袈裟御前のお歸りを待間久敷氣晴しと女房達に酌とらせ、數々過る盃をさすのおさへの挨拶に、せらせら笑ふ下心、ヤア松ケ枝尾篠、そち二人はさぞや今宵の祝言羨ましく思ふらん、何とさうかと宣へば松ケ枝しつと打笑ひ、イヤ左様にもひはず初に逢ふ夜のほの内の、嫁御の心は羞がしく生た思ひもひまじ、され共聲君のお心はしよさ〜嬉しく有らんと、思ひやられいと宣へば尾篠さし出、ハテそれこそは殿様の、は祝言の時ひ覺えこそあるらめど、咄しみたる折節袈裟御前歸らせ給ひ、後ろにそつと立給ふを知らで渡ほうつゝなく、尾篠が膝に寄掛り何と云ふおれが祝言の時の咄が聞たいとや、安い事語つて聞かせよ、惣じて初に寝る時は、耻かしさうにうじ〜とすれば拍子はぐれて埒あかぬものなれば、あつう掛てのしきつて懐ろの内へ〜此様にすつとは入が秘密の口傳と、尾篠が肌を撫で擦りフウ思ひの外むつちりと肥えてゐるは、油が乗て手ざわりの氣味の上さ、ヤア何がおかしいやら臍が笑ふはヤツくつ〜とこそぐり給へば、コッヤ何をなされませす悪ひ事計をそれ、奥様のと云ふ聲に渡ふつと捻向き、臍を潰してもち〜と手を打拂ひ居給へば、袈裟はつやなくつと出イヤ尾篠、わらわが留守に誰が許して殿様のは傍へ寄る、あんなりであらふがな、アノ大膽者めがあつちへうせふとはしたなく、倍氣こめたる物ごしも色が余りて憎からず、波に〜打笑ひフ、是は奥の腹立が尤々、常々尾篠と云ふ奴はなめ過た慮外者既に以て今宵も留守の淋しさに、何心なく寐て居るを何んであらふぞ傍へ来て、嫌がるおれが手を取て懐ろの内へ引込み、ひねつて奥の擦れの色々の小言を云ふ、コリヤ、あんなりであらふがな、あの大膽者めがあつちへうせふと、口真似のまさ〜しさに袈裟御前腹も立れず、フ、おぬし様はもとより律儀な心なれど、この右の手がびる〜と悪ひ事を爲る程に、ちつと仕付をして進ませせうとつめるをしはに顔をしか

めあいた〜と紛らかし。一つ二つの戯れの咄の跡もふら〜とねふり「乍らに臥給ふ透を覗ひ。盛遠はつばの内まで忍び入る。跡に付そひ薫姫。折戸の内身隠れて様子を試し給ひける。目指も知らず暗ければ爰やかしことする音に。松ヶ枝ハット驚きナフ尾篠。今の音は何であらふのア、怖やとよりそへば。袈裟は前打笑ひ其方達は何を怖がる。定めて虎か戻りしならん。紙燭差して出給ひ虎よ来い。虎よ〜と宣ふを盛遠立寄りコレ袈裟御前か。先約なれば是非共夫婦にならんと云ふを。聽ず振捨て歸らる。事は皆渡と云ふ男のある故なれば。踏込み刺殺し我も腹切。兩人共に打果しは身一人人生残り。沖にも磯にも寄りつかぬ尼になりての若後家。其時思ひ知り給へと言捨て。駈入らんとするを引止め。是は短きは風情先づ暫らくと云ふ内に。兎や角思案しイヤなふ盛遠様。宵に呉々宣ひしお言葉とは相違して。淺果敢なりしは心それを如何にとやに。誠にみづからと夫婦にならんと思召さば。いなにはあらぬ我心所詮渡をひそかに殺し。我を連退ぎ給はいづく如何なる里にても。行末長く添やさんハテ死んで花咲く身に非すと。手をしめやかに口説かる。盛遠心惚々として。然らば必定左様に思召すか。ア、何しに詐りやべし去ながら。身を全ふする爲なれば時分を計らひ寢所の火を吹消し。それを合圖に忍び入り亂れ髪にて臥たるが。渡にて在します只一刀に刺通し。本望を遂げ給へ必ずせかせ給ふなと。約束固く言交し合圖の時を松の聲。風の前なる燈火の消えん。命を果敢なければ痛はしや。袈裟御前もとより夫の身に替り。死なんものをと思ひさる心の色を知らせじと。もとの座敷に立歸り。只何となき風情にて。ヤア爲若はいづくにぞ。妻遇々外へ出で暫しが間見ぬ内も。あの子が事の氣に懸り何に付ても忘られず。最早ね〜して居ると儘をつと抱いて見せてたも。早ふ〜と有ければされば爲様の事は。おまへのお留守ゆゑかほ機嫌悪しくむづかりしを。お氣に入の茂藏に抱かせ漸々ねいらせ給ひ。それ

〜茂藏召せばつといひ罷出で傍近く畏る。人こそ知らね沖の石涙を襟に押隠し。茲へ〜と抱き上げ顔つく〜とまもり詰。扱も悲しやかく計り淺き縁と知るならば。如何なる霜とも見ぬ内に消えて果敢なく成もせで。蝶よ花よと撫子の別れに心引かされて。永き冥路の障りともならん事を悲しやと焦き来る。涙を我からと。藻にすむ蟲の音を絶えて何心なく若君の。つや〜寝給ふ面さしの笑ふが如く愛らしく。いと目も暮心消えせめて名残に母が顔。見もし見えられ今生の別れと思ひ定めんと。顔さしよせて愛したまへば爲若おびえ目を覺し。わつと泣出したまふをば乳人立寄り。折角寢入給ふをおいとしばげにこなたへと。茂藏に抱かせて。ねん〜とおろ〜と賺しつ。皆々「寢間にぞ入にける跡なつかしく。見返りて實にや世にある人々の。子を持ってより情け知る我身ひなく成ならば。跡にまします母上のさこそなげかせ給ふらん是のみ。不孝の罪科は。ゆるさせ給へ七十にあまる寢覺の徒然には。孫を愛してみづからと思ひ慰め給はれと。取集めたる事をも思へば〜道瀬なく。かしこにぞうと臥轉び忍び。音になく聲漏れて若しやは。夫の聞らんと心で。心を取直し。枕刀をそつとぬき丈と等しき黒髪を。手にかゝる程すんご切。サア是迄と燈燈の影より見れば我夫の獨り淋しき寢姿も別れの際にせめて扱。去らばとばかりの言の葉も只我獨り暇乞ひ。それさへ聲に現はさぬ。思ひかす〜瀧津瀬の涙は玉をつらぬけり。やゝ時移る寢所のひま薫姫はさし覗き。扱はわりなき戀路故夫の渡の身替りと。おぼし切たる黒髪は男に似せん手だてかや。かく頼もしき上臈をやみ〜と打せん事思へばいたはしや。ヲ、思ひ付たり此事を侍共に告げ知らせ。夫婦の難儀を救はふかイヤまで暫し我心。道にそむきし盛遠なれ共假りにも夫婦と名のつきし。みづからが口より訴人して切らせん事も道立ず。其上此事暫しにても躊躇ば。渡の身危ふしと深き思案に袈裟は前。我身をかへて切られんとの計略も無にならん。ハア何と

かど打案じ、イヤ兎かく我身をかばふ故差當りての分別なし。我袈裟御前の命にかはり死なん者をと髪振りほごき。根元より切らんとすれば刀なく、邊りを見廻し傍に立たる燈火に。髪押當ればふつと消え前後左右も見え分ず。途方にくれておはします袈裟御前ハット思ひ。扱は時移るゆる盛遠の心せき。あなたより火を消されしよア、遅れたり今こそ最後の寢所の火を。心と共に吹消し髪押しみだき打臥して。血死期まつまぞ切なけれ。盛遠すはやと立寄るを。薫姫こゝぞ大事と身を潜め。妻戸の口の通り道横たはりてぞ臥給ふ。盛遠はうごつまづきサア是こそと太刀をぬき。押さゆる手に髪筋の障るをそつと撫でおろし。サア是は女の髪と知れて長々し。扱は人違ひホウあぶなしと。静かに上を乗越え奥の間に忍び入る。音に渡は目を覺しハテ心得ぬことかな。最前次の間に燈火を消すと一度に寢所の火も同じく吹消し人のおとなひ聞ふるは。只事ならずと打うなづき態と寝たる風情して。高々と空射刀の柄に手を懸けじつと静まり居給ふを。それとも知らず盛遠は手を差出し暗まされ。袈裟御前の臥し給ふ枕に寄添ひ試し見るに。合圖にたがはぬ亂れ髪。是こそと太刀取直し首かき切れば。渡是はと抜さうらにはたと切る。ひらりと飛去り盛遠は行方知れず隠れけり。ヤレ狼籍者逃さじと跡に續いて出さまに。薫姫に行當りやにはに取つておつふせ。扱は犬めは盗人か但は不義の忍び男か。さあ〜真直にいへと髪を取てサア。是は女なりム、扱は袈裟御前か。いよ〜不義にまされなしと。宣ふ聲に驚き。外間の侍一時に手々に提灯ともし立。かしこを見れば袈裟御前血汐に染みて臥し給ふ。渡ハット膽を消しヤレ袈裟御前。〜と。呼べと喚べと息切れてむなしき體と消え給ふ。イヤ〜兎角此事はそれなる女ぞ知つたらん。アサ有様に様子をいへと侍共立懸り。散々に打擲す。打れて聲の出衆る涙ながらに薫姫。やう〜と息をつぎ。始め終りの事ども妻くはしく知つたれども。最早此期に及びいふ迄もなし然る上はみづか

らを盗人ともかたきとも。如何様にも仕給ふべし先立ち死なん我命。遅れて残る末の露いさ〜かも惜からじと口説き。立て宣へば。イヤ〜それにては譯立すと何程包むとも。言ふ所にていはせよぞかうぎよせて白状させよと。とり〜評定する所へ盛遠くらがりよりつと出。サアそれなるは源の渡にてましますか。今宵の狼籍は此遠藤武者盛遠にてひ。渡聞もあへずシテ其盛遠は。一門の内として何たる意趣あり袈裟御前は討給ふ。ヲ、は不審は尤。兎角それへ参り具さに申入んど。つか〜と立寄れば渡飛退り刀の柄に手を懸けたまふを。イヤは用心は無用。斯く名乗出るからは手向へ致す心でなしと。大小取て投出し兎角は身の女敵は。拙者めにはまづたれば何分にもは腹愈に。行ひ給へとかしこにうご座を組んで。思ひ詰たる氣色にて。渡もはうを呆れ果サア何程左様に宜ふとて。仔細を聞ぬ内は無氣に討べきやうもなし。先袈裟御前には何の恨みあつて斯様には仕給ふ。其一通りを聞んどあればヲ、尤至極せり。然れば包ます明しやさんと。始終の事共委しく語り。サア此上は某が爪先より頂上まで。すんすんに刻みてなりとも死したる人の手向とも。なして給はれ疾々と首差のべて居たりけり。渡はとかうの詞もなく向ふ鹿には矢も立す。實に弓取の名を惜む身にさへ捨ぬ命をば。ましてやかよわき女的身如何に貞女の道を立ればとて。斯様にあへなく死する事余り本意なき仕業かな遅れて残る我獨り。千萬歳を経るとも何の樂しみあるべきぞ。二世と契りて此世から我をば跡に振捨て。物思へどや然りとては。しなしたり〜イカニ盛遠。は身も來惡き所へ能も〜來られたり。寢鳥を射るは道に非ず道に背き改め道に歸り名乗出で。切られんと云ふ心ざしを何しに殺しやべし。たとへば邊を討たればとて死したる人がよみがへり。又見る事のあらばこそと口説き。立てぞ泣給ふ。盛遠今は詮方も涙を抑へ。ハツハ左様に宜ふては死ぬるにも死なれず。生ては又萬人に面目。ムウよし〜甲斐なき命生存て。男

と云ふ字は名乗られまじ。是迄なりと太刀引抜き鬚根よりふつと切る。渡見給ひ手を打つて。扱も扱も悪に強ければ善にも強き心かな。死に行く人の追善是に優したる事あらじ。我生れてより此方しきんせいの床にはんべつて。上をうらやみ下を軽んじ劍にかへて色を重んじ。常樂我淨の四顛倒一生の造悪。たとへを取らば四大海。高きことは燕浪虚の。山また山を重ねたる煩惱則ち菩提心。懺愧依報の道に入らんと同じく警切給へば。驚姫涙を押へテ、いしくも悟り給ふぞや。妾もともに法の道さらばと云ひて黒髪を。えりだけふつとを思ひきりいでや此世は火の住家。稻妻の光りぞと立出んとし給ふを。乳の人若君いだき上げしばさせ給へさりとは。母御に離れ便りなく僅か二歳の若君を。何になれとて捨果て何方へ行かせ給ふぞや。またせたまへと先になり立ふさがれば爲若は。愛すると、父上の顔を見上て手を出し。さそろうと宣へば思ひ切たる心さへ。亦くれくと立迷ひ。眼を塞ぎ實にまこと。一人出家するを見ては大六天の魔王妻となり子となつて。恩愛の袖を引き執着の手を取り。ながく三途に引くとかや娑婆一旦の部類眷族。妻子珍寶及王位臨命終死不隨者と止むる袂を振り放ち。二目とも願みぬ心を感じ盛遠暫しとおしどいめ。シテ先は身は是より何方へ趣ひかんと思ふぞや。サアそなたは。サレバ八萬四千の法門機を別々に別るゝこと。衆生の病ひのかすに應じ帝王これに藥を與へ。それゝに變れども皆是一味醍醐味なり。中について某は高野大師の門に入り。阿字本不生の觀心無不比の外に何物か。宿すべきやとなく心のとどまる所こそ。心のやどりと思ふなりは身の修行は如何にとあれば。渡合掌さういして我はもとより愚痴無智の。有情を度せん長世の願しゆんびの門により給ふ。黒谷法然上人の徒になり往生せんと思ふなり。扱姫君は妙法の深き功力二つもなく。三つの車を引かへて大白牛車に打乗りて。今身より佛身に至るまで保てや。南無妙法。蓮華中に生れんと己が様々わけ上る。魔

の道は多ければ同じ雲井の月の影。霜と消行く袈裟御前はぞ菩提の善知識。針に従ふ糸筋の分れゝて出給ふ。此人々のこゝろさし劣優も風吹く。塵の浪世の中ゝに。哀れ稀なる風情かな

才 四 お徳藏

年月の流れて早き衣川。けさは果敢なき霜と消え老木に残るみどり子の。稍人となり十二歳北山に學問しておはせしが。或時尼公の方へ里歸り。姥君に對面し扱も師匠の仰せには。汝には父もなく母もなければ學文に精を入れ。人に秀て出家になれと宣ふが。如何なれば我には父母のおはせぬぞ。語らせ給へと歎かる。姥君ハット心暮。翻るゝ涙押し止め。イヤなふつがもない事其方には。成程父もあり母もあり學問勤めん其爲わざと左様に欺り給ふものならん。傳へ聞く孟子といひし人の母。我子の家に歸りしを諫めん料に機代を。切つて見せしめ給ふぞなん。然れ共妾はおるかにて愛しみ深きそなたなれば。近きうち父母に逢せんまめやかに精出して。師の坊の氣に入様にせられよとまことしやかに宣へば。シテまづ父母の在します。所は何所にみぞ何故外に在しますぞ。我生れてよりこのかた御面さしも見せ給はぬ。ア、情けなの仕事やと袖うち。萎れ歎くにぞ。とかういふべき言の葉も涙乍らに彼處なる。持佛堂の戸を袈裟御前の影をゆびさし。ア、あの繪姿こそ御身が母の傍なり。出家にならぬ其内はふつと逢はじと誓ひを立て。烏羽の里と云ふ所に心をすまし居るぞかし。また父上は奈良の都に俊乗坊長源とて。譽れいみじき名僧なり其子としてわりなく。双親慕ふ事人の思はく世の職り。かたぐい以て不覺なり。さやうこう心おとなしく持たれよと。諫むる内にも悲しさのこぼるゝ色を包み兼ア、何とやら今日の日の。打盛りたる雪景色血の道氣かやふらゝと。心地悪しやアえいゝと奥の一間に入給ふ

打萎たれて爲若はつくく思ひ廻らすに。奈良の都は程遠し鳥羽は都の内と聞く。尋ね行かんと思ひしが介添の茂藏若や留めん其時は、思ふに甲斐もなかるべし賤し歸さばやと思案し。ヤイ茂藏そちは寺に歸り今宵は里に宿るよし。師の坊へ宜敷やせ。ナイ畏まつてはります。たまさかのお休みゆるりさほ入ひへ。明日迎ひに參らんと何心なく歸りけり。サア首尾よしと爲若立出んと仕給ひしがイヤ待て暫し。我二歳の時母に別れ其面さしも見知らねば、幸ひ此影を持ゆき是を證據に似し人を。尋ねんものをと心付そつとはづし軸元より。くるくると巻おさめ袖に。包みし 三丑

のゆるむめり

ころもの玉はあらはれて。我が古里に。行ぞ嬉しき南無妙。法蓮華經南無妙法。蓮華經。妙法蓮華の功力にて。五障の霞晴やかに。心の花の。薫姫。一如比丘尼と法の名を姿ごもに變る世の。憂につれたつ友とては。松ヶ枝尾篠わけすぐる。道さへまさる。袖の内。つまぐる珠數のかすごりも十といひつ。四の時。春日の里のしたちまごいれ枕の住馴れし。庵を出てあさな月。都の方はそなたぞと思ひ。たつ旅。足軽く。紙で巻たる草鞋の紐を。蜻蛉結びに。しやんとひねりて。捻てはさんで行く道の。暫し間もなき冬の日の。影行く駒の。足跡も雪には見えず松の葉の三笠の山はいくよるづ。よろづ世祝ふためしこそ。奈良の帝の。昔より今此時も一しほに。榮えはおなじ歌の道。サア住吉御代の。君がひつぎの目出度さよ。般若坂よりゆく人の。問はず語りに陸まじく。夫婦の中に子を連れて。しんしゆ。酒だる竹の杖。ふしも拍子もばらく。千鳥かげなる足。引の。山城に井出の里玉水は名のみして。影うつす面影。ア、さのみはらん不及ばじと。髪かき撫て跡先の人目耻るも優しやな。柳さむけく枝垂れて。

梅暖かに。景色立つなしまの村のくすやぶさ。いぶせき笹の枝垣にはうげづきたるつのだいしほ圖の竹のいちのへの。山はそなたと白雲のかゝる愛身は。おなじごり山鳥の尾の「ながいけや」軒端續きの。家々もわきて賑ふ年の暮。俵かたげて忙がしうに。角の酒やへぬい。な。何を云ふて運ぶよえ。抱いたら締めたらさ。繩襷。ゆん手に當る八幡山實に清み濁る淀川の。並木のしすえはくく〜と續きの。里の夕ぐれに寝にゆく鳥三つ二つ。ア、あれ連て鳥羽のさと。妹背の中の。まことより果敢なく消えし身の露の。淺からざりし戀塚の。昔を今に繰り歸す。念珠の玉を。ぬく涙袖の下行く手向水。あはれし君の果しなき。闇路を晴らせ日のひかり。毎時作是念爲我令衆生。得入無常道。續生受佛身と心を「すます折すがら由縁あり共。しらふちの漏り来るひかり黄昏の。歩みたご〜爲若は母はこの世に有りながら。暫し別れてますと云ふ言葉の里の名ばかりを。問ふ人とてもあらざれば。三人の尼の回向する傍に立より。ナフ如何にもの問ひませんこれ〜と。言へご答へご涙ぐむ。目を閉じ耳に餘の事を聴かぬ顔なるうたてさに。暫しためらひ。袖をひき。鳥羽の里とはいづこぞや我に教へて旅の人。是より先にひかど。問へごきらくそなた向く。さては跡かと尋れば。また顔を振る村時雨は。ろ。〜と暮の露。知らずは知ぬと言ひもせで情なの人や兎角たゞ。人家によりて問はゞやと乳房に別れしは。さきの果敢なき跡の標ごも。知らで過行く哀れさを。苔の下にや歎くらん。松の擗きも。吹きすすむ讀經終れば麻衣。裾うち拂ひすと立ち三人目と目を見合せて。ナフ先程は幼稚子が物問ひ懸しを我々が。勤の邪魔と思はれて問へご答へも口無し。子は只つらく思ふらめ程は行かじにいさ去らば。跡を求めて共々に。力を添えんそなたへか。こなたへ來たか。南かも往にし影さへくれかゝる。星雨も雲とむすばふれかづく袖がさ膨まふり。知る人ならぬ賤の家に連れて。立寄り 三重給ひけり。星

の光も、見分ず心も細きあせつたひ。そこはかたなく爲若は手足も凍え身も勞れ。力なく、向を見れば火影かすかに陽炎を。目當と頼む小笹原野川の水に裾濡れて。漸として立よれば。あしの丸やのなれ庵、嬉しやこゝに宿からんと戸をはとくと叩かるゝ。内より女の聲として。誰ぞやそも訪ふ人もなき此宿に。夜中といひ何の用あつてやと咎むれば。イヤ苦しうもひはず。我は都の者成が行暮れ道に踏迷ひ。然も雨さへ切りにて立寄る影もひはず。一夜を明させ給はれと聲打萎れ宣へば。主人折戸を押開き。ヲ、いとをしや年はも行かぬみづからに。眞の關路を行迷ひさぞ心憂くおはすらん。先々こなたへくと手を引く。内に誘ひて盥の水を。爲若の手足洗ひて襟々にいと懇なる侍りを。嬉しと思ふ心程はにあらはれて言の葉に。いひ盡されぬ情いつの世にかは忘るべき。シテ先づ此在所主人のお名は何ぞやとあれば。然ればとよ此所は鳥羽の里とて。都の方より遠からぬ所とはいひ乍ら。住み甲斐もなき賤が家の軒のしのぶに人目さへ。枯行く野邊の一ツ庵詫しく暮しひと語り給へば。ムウさてはこゝを鳥羽の里とやひか。それにつき此邊に。源の渡の妻袈裟御前とや人を。は存じみはずやとあれば主人興さめ顔して。ハアそれは何故のお尋ねぞ。サレバ其尋る人は我母上。二つの年に別れてといひも果ぬにヤアさてはそなたは爲若か。我こそ母の袈裟なるはナフ母様かとはかりに。覺えずひと抱き付き瀧津。涙はせきあへず。いへば得いはぬ數々の愛事つもる年月を。餘所にみなして此所にひとり淋しく住み給ひ。さらば都も遠からぬに能も。今迄は。逢ひも見せずせめてさて。文の便りも仕給はずさりとては恨めしの。母上様やと繰返しかこち歎き宣へば。ヲ、道理なり去乍ら。みづからとて獨り子を跡に残して露の間も。忘るゝ事もあらし吹く。霜の夜雪のあしたにもはなひのひもの別れても。心は共に添寝する思ひに任かせぬ事あつて。空しく隔てし年頃の此上なう成人せしものかな。さて姥若は恙

なくおはするかや。いたう年より給ふらん覺束なしと宣へば。爲若聞給ひサレバ。様のは事。息災に在しませども只此頃は何となく。後世の事のみ心懸け淋し氣に見え給へば。兎角お歸りひて一つ所に住ませ給はれよ。親なき我を悔りてさる者のやせしは。汝が母は遠藤武者盛遠に殺されしと。語りしを誠と思ひ姥若に尋ねしかば。イヤよそれはさがなき人の詐りなり。學問に精出さば近頃には逢はせんと。宣ふ事の嬉しさに是迄隠れ参りたり。可愛と思召れなば早く歸らせ給はれよ。今からは随分と手習も物讀も。怠る事はひはじと袂を顔に押當て。さめく。泣いて萎たる、海士の。焚く火の藻汐。草掻寄せ。膝に抱きあげ。焦來る涙のたまさはる我も古郷の床しきに。夜も明けば共々連て歸らんに。暫しまどろみ今日の勞れをはらせよ。片敷く袖の肱枕添臥す床のうつゝなく。まだいはけなき子心に明日歸らんと宣ひし。事を誠に思ひ寝の夢の「浮橋とだえして横雪白む。遠山に明六つ告る鐘の聲。ハア悲しやと袈裟御前すこゝとイみてナフ爲若。は身年をる我をしつたひこれまで來る愛着に。繪像ふばくの魂の假に顯れ見みえしなり。去にても我誠を守り貞節により。修羅道の苦を逃れ得脱の身と成りたれど。は身余りに親を戀ふ其執着を切らん爲。かりに含りし四大の體をこゝに残して見するなり。是を見て逆も身は斯るものぞと世を悟り。佛道に趣くべし構て。愛念を留むる事はなかれよと。示す心も我乍らさすが親子の愛別れ。立つも立たれず兎や角とたゝすむ影も仄々と。明行く光りに幽靈の形は。消えて失せければ。有りし庵は。冬枯の。木の葉の時雨はらららとふる塚ばかり。残りけり。茲に遠藤武者盛遠は。佛道修行さうぞくし其名を文覺と戒名あり。暫らく伊豆の國に下り右兵衛の佐頼朝に心を合せ。平氏を窺ふ由世の聞えあるにより。彼方此方とさまよひ折節此所を通られしが。とある一木の松陰に幼き人の現つなく。打臥し寝たる草庭。鬘體を枕とし餘念もなげに見えにけり。是は不思議と立留り。ハ

ア此者は少年の身として興がる有様。抑も何故とつくづく打詠め。傳へ聞く佛在世に阿奈律尊者鬘鬘水を呑んで。生化を得し例あればまさに知んぬ。此童子も悟道發明ならん事をヲ、面白し。一當り當つて見んと枕元につくとより。コレヤ。起よ。荒らかにいふ聲に。ふつと愕き為若目をすり四邊を見廻し。ナフ母様はいづくへおはしけるぞ。宵に假寐の宿もなく枕を見れば鬘鬘。あな怖ろしと身震しわつと喚ばせ給ひける。文覺默然として。扱は狂氣したる者ならん。不憫の事やと手を取り。其方は母を慕ふと見えたり。さ程戀しくは何とて家に歸らぬぞ。所をいへ送り届けんとあれば。イヤ我が母は昨夜よりも此所に添寐して。明けなば都に歸らんと儘に誓約せしに。情なくも振捨ていづ方へ行き給ふ。逢はで慕ひし昔より見えて別る。我思ひ。如何になれとて斯ほどまで再び敷きをかけ給ふ。恨めしの心やと足摺してこそ敷かるれ。落る涙のどくく。悲しき中にも心付き。實に誠過し夜に添寐ながらの夢の内。果敢なく消えし身なれども假に姿を顯すと。宜ひし言葉のすえ思へば。此鬘鬘ころ母様の尻よさても。悲しやと。空しき體を胸に當て顔に當て消え入。泣き給ふ。文覺いよ。いぶかし。サテハ過し夜別れし母が幽靈の。顯はれ言葉を交しけるか。シテ先づ其方は何人の子親の名は何といふぞ。出家の役に亡き跡念頃に吊らひ得せんとあれば。さんみ某は源の渡が子ヤアさては其方は爲若か。我こそと咽返り聲を上げてぞ敷かる。餘り切なる涙の色若君不審に思召。如何に。僧様只今の物語にて。落涙の體何たる故にひぞや。若しも由縁の此方にやとあれば。文覺兎角も涙にて。エ、不憫なる事どもかな我一心の惡逆ゆる。あつ。迄の憂き思ひ所詮眞直にいひさせ。得道をさせんと思ひしがイヤ。かゝる敷きの上取亂さんも如何なり。何とぞ詐り一先故郷へ歸さんと。目を押拭ひにつこと笑ひイヤ是爲若。其方が母架婆は前は成程堅固にて。近き頃迄此所にゐられしが所用

ありとて都に上り。頓て歸らん其節對面さすべきなり。然るに昨夜見みえし佛は愚僧訖と推量するに。是も其方が戀し。と思ふ一念を。此野に棲める狐なんどが証かしたる物ならん。それを如何にと云ふに。狐妖怪をなさんとは鬘鬘を載き北斗を禮し變化して。男女淫婦となり人を化すといふ事あれば。正しくその鬘鬘は狐のかぶりし物ならん。ア、愚なり。心をはつきと取直し誠の母に目出たく逢はんと。頼もしく思はれよと誠しやかに宣へば。イヤ。何程仰せひども同心仕難き事こそあれ。幼少より別れぬる我母様の。佛は。家に残りし寫繪を是に持てひが。其繪姿と變はらねば誠の母は夢に見し。其人こそは戀しけれエ、似合ぬ出家の詐り言。子供と思ひ蔑むよな思ひ詰たり是迄と。自害せんと仕給ふを文覺是はと取付き。ハア短氣なり先づ暫らく。事を沈めて其繪姿を我に見せよ。それに付て篇と合點のゆく事を語つて聽かせんと。爲若の懐中なる巻物を取出し。傍なる松の枝に懸け二目とも見も分ず。昔覺えてはら。と翻る。涙をちやくとおさへ。さあらぬ體にて巻納め懐に押入れナフこれは其方二歳の年別れし母の姿ならずや。然れば夫より十年餘りの袈裟御前。今は髪を剃り衣を染め難行苦行に身も衰れ。昔の顔色更に無ければ正眞の母に逢ひたりとも。繪像に違ひたりとて詞をも交すまじさか。扱や聞分もなき顔の色エ、愚なり淺間しや幼心のひとむきに死なんと狂ふ不憫さに。今は我名を名乗るなり。我こそは汝が父渡入道俊乗坊重源なり。三界火宅を出たればかう云ふ詞の後念より。妻子に更々執着なしとかいふつて退き給へば。ナフ尤なり父上様東西わかぬ昔しより。佛も知らざれば最前より。の詞。返す。も慮外なり免させ給へと縫りつく。袖濡まるる涙川不覺の思ひつきやらす共にひれふし敷げかる。かゝる折節一如比丘尼宵に尋ねし幼子の。行方いづこと鳥羽の里一夜假寐の明方より。彼方此方と尋ねわび此所へ立歸り。する。と走寄りナフそれなるは文覺さまか。さてお久しやといは

せも果すハアこゝな人は庵相な事ばかりを。我が名は俊乗坊と云ふ者を。それはそう爲若が。己身を慕ひ最前より待詫ぬ。サア〜早ふ逢ひ給へコレ爲若。あれこそ慕ふ袈裟御前よ。ヤア母様か是はそも宵に相見し其時に。心強くも見ぬ振りに詞も交させ給はぬ事。さりとはづよき心但しは是も夢なるかと抱き付てぞ歎かる。思ひがけなく一如尼松が枝尾篠諸共に。胸焦上げて言の葉も涙に咽ぶばかり。なり文覺聲を憤らかしハア未練なり。此場は歎く所でなし是よつく聞かれよ。此子が母は死たると聞き共に死なんとせし所を。やう〜と制し我も名乗て父重源なると云ひ聞せしなり。最上此上は己身の名も有様に袈裟御前なるはと言はれよ。さうなければ此若はいきていぬ心底なるぞ。早う〜と目配する色目を悟り一如尼。つく〜と打領きは尤〜。成程仰せに任せんと爲若の己手をとり。詐り乍ら掻きくらす涙の時雨振拾し。母を慕ひて遙々と獨り尋ねて来る事。扱いとをしや可愛やとわいし。給へば。爲若は。誠の母と悦びの眉晴やかに打ち笑みて。狐が化せし夢話つと〜語り給ふぞ。文覺悲しき包みかねイヤ〜爰に長居して。よしなき事をいはんよりいづれもは都に伴ひ。姥君にかくと首尾を繕ひ給ふべし。我も追付参らんと諫め立てつ。文覺は跡に残りて亡き人の。鬨を抱き戀塚の標の。もこにぞ三重参らる。返せ〜迷子を歸せ。爲様かへせ松の風木の葉天狗の所爲にもあれ。まうしやうばくみの業なり共尋ね出さで置くべきかと。此所や彼所とめ來り彼所を見れば。袈裟御前の墓所に旅僧一人さし俯向いて居たりしを。茂藏つか〜と立寄りユリヤ坊主。ちつと物問はふ。年のほど十歳余りなる兒この筋は通り給はぬか。知たらば教えて呉よといかつらしくいひければ。文覺むつとして何奴なればぞんざいなる詞つき。あた胸悪しと捻向もせずあしらへば。茂藏心急きヤレ時もとき折もをり。何じや〜見たか見ぬかと耳を引けば。ユリヤ何仕をると振放ち。何んと十ばかりの子の行方が知れぬといふ

か。所望ならば教えてやらふ。其子が行し方はな。是より真直にごおつご南の方。但しは北か西ひがし。随分尋ねたらば知れふとあざむけば。ヤアこいつは人をなぶるか。エ、暇ならば左云ふあてた骨をたいは置じものを。願人坊主めよつく覺えてをれと罵れば。ムウ何と云ふ我を願人坊主とや。ヤレ。非修非學のあら凡夫願人と云ふは悪き事と思ふか。エ、淺間しや。十方三世の佛菩薩衆生を助けんと。誓願。因位の時は願人ならずやと猶耻しめて宣へば。茂藏かつら〜と打笑ひ。それは佛の大願。犬めは人の門戸に立て一紙半錢を選齋する。乞食坊主と一つ口にはれふかと惡體にいひあへば。文覺大きに焦きヲ、サ。一紙半錢を貰ふ事も王法公方の仰せを蒙り。大佛建立の上主たる俊乗坊に向つて。重々の悪口已れ後日の爲悪からんといへば。茂藏いよ〜立腹をじつと沈め。人も多きに身が主人の名を假て。思ひ出し。ヲ、盛遠法師の文覺でこそあんなれ。さては若君にも此所にて行逢ひ。親の敵と狙はれん後日の難義を思ひ。こいつが失ひしに紛れなし。憎さも憎し弄殺に仕て呉んと慫慂らしく腰をかきめ。ハア只今の此詞にて承れば俊乗坊にて渡らせ給ふとや。それ共知らで慮外の體眞平は免ひべし。つひては其大佛建立の勸進帳。諸國に弘め給ふよし幸ひの結縁。そと聽問や度ひとじちめらしういひければ。文覺此義に當惑し暫し案じて懷中せし。袈裟御前の影繪をそろりと出し。コレ此巻物こそ結縁の爲の勸進帳。立板に水を流すやうに讀んで聞けふけれども。此中さん〜風を引て聲出です。讀めとも同じと戴いてしんをどれど。殊勝氣にもてなせばイヤとてもの事に。少しなりとも遊ばしひへ平に〜と強られて。ハテ忙しない成ほど讀んで聽かせんと。巻物横に取直し口なめずりしてむち〜と。出次第にこそ讀上げけれ。それ。つら〜おもんみれば。大佛の佛の数は三千三百年に。なるにもあらず

昔し、とつどの昔し、猿が顔の真赤いなを、紅葉の錦と見給ひし奈良の帝の建立なり、斯程の靈場の絶えなん事を悲しみて、俊乘坊文覺イヤ重源、諸國を巡り勸進すと、中ば讀さし汗押拭ひ吐息を、ほとつつきにけり、茂藏目を擦り泣く體にもてなし、扱もく殊勝千萬何をか布施に參らせんと、思ふやたけもつき果る源氏の運ころ拙なけれ、世が世の時にあるならば我一人の心にて、堂建立も易からんと思へば、是程まで、世に捨られし無念やと空泣きしてこそ居たりけれ、文覺眉を皺め、何とやらん由あり氣なる詞の末をも身は如何なる人ぞ、サレハヤにつけ耻かしけれ共、包ます語りゆさん某は、源氏左馬頭義朝が末の子、常盤腹には三男牛若と云ふ者なり、兄右兵衛の佐は姪か小島にて文覺と云ふ、頼もしき出家と心を合せ院宣を望まる、由、告る者のひへ共何を云ても我姿、紺のたいなし手綱帶鞍馬山東光坊の寺奉公、有るに甲斐なき身を耻ぢて空しく朽ん無念やと、物哀れ氣に語りけり文覺與醒め、さて、大きな僧上者、ヨイ、文覺と名乗り思ふさま、弄つて吳んと興醒顔して、扱は承り及びし牛若君にて在しますか、誠は我こそ文覺なれ、平家に忍び俊乘坊とはやされ共、偽りならぬ證據を出し見せやさんと、頭陀袋より袈裟御前の調體を取出し、コレハ、身の父故左馬頭義朝の頭よ、平治の後は獄屋の前の、苔の下に埋れしを、廿餘年我が頸に掛け吊ひ奉りしなり、變果たるは容顏嗚や悲しく覺すらん、サア此上は片時も早く伊豆の國へは供や、兄御に逢せやさんに早うくと手を引立てるを、直につけ込み文覺の胸倉握んでコリヤ惡僧め、身を誰と思ふ誠は源の渡が下人茂藏なり、いぬはよくも、袈裟御前を殺し、一家亂れて若君まで迷出させ給ふを、酷くも切害せしよな、サア今が最期思ひ知れと、刀を抜て文覺の心もとにさし當れば、文覺些とも騒がす、此儀については仔細あれ共とても下人の疑ひ多く、聽入まじき體相兎角いふもむつかし、殺さば殺せと目を塞ぎ阿字觀に入給へば、ヲ、よい合點

とても逃がしはせぬと、差通さんとする所に不思議や文覺の懷中より、黄色の玉つと出で、中より別れて小龍頭はれひらりくと、舞ひさがり持たる刃を口に含みくるくと巻たりしは俱利伽羅不動の如くなり、茂藏大きに動轉し地にひざまづき手を合し、かゝる尊きは僧と知らで犯せし大罪、免したまへと頭をさげしきつて詫事やけり、文覺莞爾と打笑み、しほらしき心底近頃奇特く、汝が尋る爲若はまづかくくの次第にて、都へ送り歸せしなり心易かれいさ來れと、袈裟御前の遺骨に土砂振り注ぐ閻伽の水、月の都に行く道の草木も靡く法の徳國土常住法常住、悟れば此身即是びる實に有がたき次第やと感じ、入たるばかりなり

オ

後傳

奈良の京東大寺大佛殿とやは、聖武皇帝の勅願所十六丈の盧舍那佛、巍々たる靈像なりしかど平治の一擧に焼土となり、劫末のしるし見るに心のいたましく、俊乘坊重源大願を立て諸國に奉加を請ひ給ひ、有縁無縁の群類を方便濟度なされつ、やうく造營有るべしと都鄙遠近に觸れ給へば、番匠鑄物師かなたくみ、差圖に任せそれのつもりを書して挑みけり、重源數多の番匠に向ひ、今度伽藍建立の事世知算勘を以て、利慾に惑ひ後の煩ひを招く工にては成就すべき事ならず、正直正路の墨金にて作り立んと思ふべし、まづ吉日良辰を撰び手斧始めあるべしと、とりて評定する所へ文覺一如尼諸共に、爲若を誘ひ寺に入せ給ひつ、互ひに久しき年來の變る姿は墨衣、法の奇縁はくちもせず對面あること殊勝なれ、時に文覺とりあへず、誠に年經ての面謁殊には身、大願を思ひ立給ふよし増長縁の功徳なり、さて是なるはありし世のわすれがたみの爲若丸、不思議の縁にて廻り逢ひ亡母袈裟御前のしうるゐ

衣川も果給ひ数々の憂き歎き。様々賺し教化して是迄伴ひせしなり。コレ爲若。年頃慕はれし俊乗坊重源こそあの此方にて坐んめれ。サア〜近く居寄りて父子の對面ひへと。涙ながらに宣へば流石恩愛捨難く。すかす身なりし重源も情れがちにてお在しますこの年月の床しさを逢は、其儘かたんと思ひまふけし爲若も威徳正しき重源の。僧形に耻らひてた々熱々と打まもり。涙の露のはら〜と袖かき。合せかしこまる。暫らく有つて重源爲若にさしむかひ。幼少より父母に別れ嘸憂き思ひに沈みな。去ながらとて此世は假の宿。未法五濁の世の中。釋迦彌勒廣大慈悲の父母もなく。迷ひに迷ひを重ね永劫の苦しみを。受ん事の悲しさに斯く佛道に赴くなり。汝此理を悟り出家にならば。死たる母のけうやう何事か是に如んと。勸め給へば爲若ハツト頭を下げ。かくは跡を慕ふ事ごも。剃髮染衣して。佛道修行いたさんと存じ入てひへば。はやくは髮剃頂かし給はれと。殊勝心にぞ望まる。ヲ、珍重々々。然らば近日法會をなし。得道致させやさんおれば一如尼手を合し。是は愛でたきは契約皆是前世の執因と。思ふにつけて有難やヤアそれに付。此子出家し給は、暇なき身なるべし。在俗の内この奈良の京の名所をも。見せまはしくいとおればヲ、其義はともかくも。いざ去らばとて文覺は。おの〜引つれ梓弓大和。巡りと。三重開をける。今日は彌生の。節句とて柳に添ふる桃の酒。奈良の市人それるれに分て賑はふ猿澤の。池の汀のかしごこに。参れ〜煎じ物とるや茶筌を振袖の。色めき立て見えにけり。かゝる所へ一如尼人々を伴ひ。床机に立寄り給ひける爲若池の邊に逍遙し。彼方此方と見給へば茂藏立寄り手を打てば人に馴たる鯉鮒に餌をまく興の面白や。茶店の女立寄り爲若の顔を見給へばげと見惚つ。尻目遣ひに戀草の。羞かしさうに袖打おはひ。ナフ若衆様。此池の魚がたんと見たくばコレ。此酒を些とさしめされひへ。魚に飲せては目に懸んと銚子盃さし出せば。爲若何心なく受取給ふ

は手と共に盃を。口にさし寄せそれこなたへと請取りすつとほして。ア、嬉し初ての事なればもごしませふと酌しけるを。爲若不審さうに先づ是はさう仕た事ぞ。然すれば魚が見ゆるかとわれはにつこと微笑み。さればいな。只今のお盃にてみづからが。こひと云ふ魚思ひの淵に現はれて。飛付ばかりにいと寄り添ひじつと抱付けば。一如尼立寄りコレヤ何しやる。智慧ない子に智慧つけてハテいたづらな娘やと。愛想なげに宣へば手持悪氣に袖襖をもち〜捻り。さのみはつらく宣ひ私此邊に。酒商賣をいたします小春とやす者なるが。今日は雛の節句とて。此所の慣はしにどなた様へも酒を進めやす作法にてひへば。些ときこしめし下されと愛嬌づきていひければ。ム、誠にそれはさもあらん。殊に爲若近日出家し酒を永く忌み給はん。俗人の内氣散しにそれ〜と。許すを嬉しくホウ氣の通りたる御方やと。小春盃取上げさいつさ〜れつ時移れば。文覺兩手をつつとのへ大欠伸して。ハア最早。能い頃にしてサア〜こゝを立んと云ふを小春暫しと止め。忙しない坊様や。曲水の美景は和國唐土一しほに。弄ぶ事なれば何かは苦しふひはん。其上分て奈良の京は酒に由緒ある事なれば。所の法にて専主方が酔はぬ内は。盃をいつまでも納めぬ法にてひへば。何程急かせ給ひても叶はぬ事といひければ。ハテ小難しい所の法ム、いよ〜。それ茂藏はやう呑んで女亭主を酔はせてのけ〜とく〜と下知を受け随分精入れあしらへ共。兎角無理云ふ酒あひに。茂藏はうご弱り果て堪り兼てぞ見えにける。文覺堪えずエ、手緩しいで相手になり。一杯致さよとすんど立を一如尼纏りつき。是は何んぞ仕たる事無用なりと引とむる。袖振放ちイヤサ只酒は計りなし。亂る〜故の戒めなり。事に觸れては釋尊も。さだ〜いしまつりふじんに酒を許し給ふ。又唐土の淵明は酒に酔臥。達磨の骨髄を待たりとかや。呑む内が花の春サア〜答辨とてもの事に。小盃は喉につまる様なれば。幸ひ此途空にて呑んで酌れよとあれば。小春目もなく

打笑ひホウ是はようござんせふ。然らばお酌慮外乍らと。なん〜と受けすつと干し。文覺にさしければヤア是は見事サアつげと。同じく引受け香まん〜とほしけれ共。多年の禁酒殊に大盃に息切れ。目口をしかめやう〜と半ば呑みさし。ハツハ氣味のよい事。なんごころで肴の一節が聴たひと。やすまんの爲の望み事。アツト云ふより聲立てて心の。たけを。ちよにして思參らせ。ひべくひと。書いたる筆の命毛も絶えね硯の海深く。變らぬ色の末かけて永き。契を結び文仇し浮名を言ひ立文に。ちらし書成る言の葉を。葛の恨みの返し文ついでくる〜〜〜。巻けば。かへす〜も目出度〜。おおかしく長々しくも。武藏鎧と問はねば恨むそれはなれての便りもあれど。たゞ初戀の。我から焦れぢまに逢ふての。打付書に。君が手の内。我ゆび當てはの字と知らす下心。なるかならぬは目元で知れん。いまの目元は。成る目も。ごんともたれて忍ぶ摺。袖ふり合し舞ひ納めにこと笑ふて居たりけり。文覺胸おしさすり一息につつと干し頭を叩き。ハ、サア酌やといへばコ、ハ押へたばん様。も一つとあればイヤそれは余り急な。先づしばらくと言譯も岩間にさはる曲水の。興がる體に強ければ文覺邊を見廻しコレ一如尼。其様も一つめしてんや下戸の酒はづればせぬものじやと。にじり寄れば。ア、けうこつ。私はお免しとすんど立て片蔭に。身をひそめてぞ在しける。文覺兎角詮方なく。ム、すれやごうでも呑めじやまで。なんの其呑んで見せふと。又たぶ〜と受持ち。一息呑にさらりどあげ。さいた〜ふつふう早う〜といへば。小春押戴き。先程より重ね〜の事なれば。今度はお免といはせも敢ず。人には續けて吞せてから否と云ふ共いはせふか。ごうでもかうでも最一つせい。〜〜。丁と酌ばよと引受け。サアごとの事に坊様も何かな一曲と望めば。文覺心も常ならず。傍なる笠をおつとつて。地藏の住し所は。からだせんあんぢうかい昔し釋迦や太子の。は説法の折節黄金のほ手をさしあげ。地

蔵坊が頭りを。三度まで擦つて善哉なれやせ。善哉なれやせ。末代の衆生を地藏にあづけ置なりと仰せばかり蒙り。走り廻りけれごもたれやの人が参りて。お茶一ぶく呉れざれば此所へ直りて。七ご入にたぶ〜。八ご入にたぶ〜。縁日に任せて。廿余杯吞ければ麴の花が目になり。右の方へたぢ〜。左の方へたぢ〜。六道の地藏が酒に酔ふたみさいな。とつはいひやろのフツト倒れ。前後も知らず臥しにけり。小春打笑ひ扱やよひは機嫌かな。此上はそれなるお供の衆へ些と盃をと立寄れば。茂藏ちやくと身を引てはつちや怖しと遁げて行く。首尾こそよけれと小春は爲若のほ手をとり。見るより早き我戀の鬼角いはれぬ思わくに。お情あれと寄添へば爲若の心もなく。只うるさしとすり退けばいよくもつれ絶りつく。袖ふり放せばし〜と抱き彼方此方と付まると。しきりにうたてく爲若は突退け逃んと仕給ふを。情なしとよいづく迄放ちはやらじと抱き留め。我は元より此池の底の玉藻と黒髪。の。亂れ心の戀路より執着の罪深く。浮みもやらぬわきもこの采女が執心侍ふなり。は身の姿に愛念の闊浮の塵に搔弄て。是迄現はれひなりいささせ給へと手をとり。池に入らんと仕たりしをナフ悲しやと腕放さんと仕給へ共。放ちもやらす引立て浪間につれてゆく袖を。茂藏あはて爲若のほ手を叩へ。やらじ〜と引く所を一一如尼走りより。茂藏が後帯しつかと取つてヤレ文覺様。あれよく〜といふ聲も。共に引かれて水底のあはれ果敢なく沈みけり。時に不思議や水中より赤色の光り物。ふつと出て文覺のしきしんに輝けば。ハツト目覺て邊を見れごも人もなく。池の面はさつ〜と立騒ぎたる浪の中。形は有りし女にて面色怪しき鬼女となり水上に浮みけり。文覺きつと見てサテハまやつめが人々を取りけるよ。エ、淺ましや生乍ら畜生道へ墮しけるかと。齒がみをなして立給ふ鬼女は怒れる氣色にて。鐵杖振上げ丁と打を飛達へ。むづと組みえいや〜と云ふ聲も松にこたへて颯々。萬木千山一同に花は嵐の散々に。春の景色

もたちまちに冬枯の峰と成り、猿澤の池と見えしは忽然と熊野の山と 三重立變り水とうとうと、奈智の瀧石の如くに文覺は五體凍りて臥るたり、然る折節四方より五色の魂飛來り、暫らく空にたゞよひて一心五色の文字となり、文覺の體中へ一時に納まり消失る水の白玉、打拂ひ其様氣高き童子二人左右より下現あり、芳しき手を伸べ文覺の頂上より、あなうら迄撫下し手を引立て法服の、衣紋正しく打若せ渴仰あるこそ奇跡なれ、文覺ふつと目を開き前後を見廻し、ハアさても不思議や、我が行法の内計りなき夢を見て、心地を失ふ所に思ひよらずの介抱シテ、何れもは如何なる人にやとあれば、我は大聖不動明王の使人、疥癩羅逝多迦勒を受け是迄來現せしむるなり、汝發願の日より今日既に三七日に満足せり、然れば五戒の大略をいは、不殺生戒は東方さいせい守り星、人の體にて肝の臟五行の内に木となつて、青き眼に物を見て瞋る心に人を害し、弄びては鳥獸を殺すなり、魂といふ魂を獵りにつかふ事なかれ、偷盜戒は西の空太白星と云ふ星の、守りをさめて人々の體に入ては肺の臟、五行に當れば金にして色白くはくと云ふ魂なり、邪淫戒は北の空辰星と云へる星、體に有ては心の臟其色黒く、志内より動き耳に出で、男女かえいの聲に心を動かせり、妄語戒は中央にてちん星の守りなり、躰に入ては脾の臟の土となり四季を主としする土用にて、古今に普く押移り心ばせよりつくる罪、不飲酒戒は南方のけいかん星のたゞしめて、人の身にては腎の臟舌に出で酒を味ひ、たけなをにして色赤し、去れば飲酒の一つ戒は輕きには似たれ共、是より妄語し偷盜し殺生邪淫を犯す事、酒に亂る、人心構えて、等閑に、此事思ひ捨るなど、有りし形は山彦の音に、紛れて失給ふ、ユハ有難し明王の我を憐れみ給ふよと、威涙に銘じつゝ、又も奇特か松が根に、座を占め居たる夕日影瀧の響も靜かにて上より、紫雲棚引て、袈裟御前の毘姿影の如くに現はれ出で、いかに文覺上人我しやうくの縁に由り假に人界の無常を示し、

それより此身此瀧に打れ給ふ其内、夢中に一生の罪惡を再び現はし見するなり、されば殺生偷盜邪淫の三ツは、此身今迄俗の内犯せし罪、妄語飲酒は是より後、出家の上にて猶此障り有るべしと、兼て償み給へとや上求菩提の松の風、下化衆生とぞおちかゝる、那智の瀧見の觀音と光りを放ち給ひける、誠に即現婦女身位説法の、濟度方便まのあたり、老若男女諸國順禮、手を合しつゝ、禮しけり鎮護國家の法の徳目出たき此代とぞ聞えける

門か八嶋

さ。ても、そののち。しやかに提婆あり孔子に盗妬あり。國にがうてきあらずんば名將の譽れ何を以てかあらはれん。されば亂は太平の始め。文武さかんの源うち。九郎御さうし義經は。かねうり吉次に従つて陸奥に下向あり秀衡がしよじやうにて頼朝に加はり。平家の逆徒をしづめんため。おくせい十萬餘騎をひんぞつし進發とぞ聞えける。およそ三軍をつかさどるは器量。天然其徳をなはつて。そなへ行列貝太鼓。しやうくせいとしてさんてつ。皆なるは陣おし。ほくどうせうふも頭をたれ。草木も枝をかたふけり。こゝにあれたる藁屋が軒。おくもくまなく見え給へば。六尺ゆたかの大男。矢の根をどぎてかたへには。二八の娘つらさす。針のみ、すもゆびぬきも手さく手づまの手もたゆし。武藏坊辨慶さつとみて。門外につゝ立。けふ我君の御出陣五十四郡の民百姓。かつがう申折から。おさめ過たるふるまひ慮外千萬。罷り出て一禮せよとよばれば。かの男くつゝと笑ひ。いやはや長命すればあたらしい事を聞く。主をもたぬ浪人なれば。わが君とあがめん人天が下にはおぼえず。具足きたがこはくもなし。誰におそれてへちまのかは。わが寺の佛たふといな。志田の三郎勝平といふ浪人者。此女はわがいもど。身こそ貧なれ今日まで人に禮せぬ此男と。兩足ぐつと投出しひさを叩いてゐたりけり。辨慶こらへず。すねふみ折んどかけ出る。義經馬より飛でおり。あゝしはらく。志田の三郎とは聞及びし源氏譜代の勇士ぞや。我こそ義朝が八男よ。西國へ同道せん。力をそへて得させよやひらに頼むとのたまへば。志田兄弟はしり出で。扱は源氏のほ末かと手をつかねて申せしは。誠に源氏の大將のた

のむとの証。は供申べくいへ共。親にては志田の兵衛。御父義朝公につかへ。しなぐの高名恩賞あるべき所に。議者のわざにて本領を召上げられぬ。父がつねに申せしは。源氏のしやうばつくらきゆゑ。議者はさかえ忠臣は衰ふる。あうらめしの義朝や。此うらみは子孫まで。忘るゝばと申おき。はら切つて相はてし。親の一言骨髄にこたへもだされず。かく申とて神八幡平家に従ふ所存なし。土をなめ水のみ。餓死せんこそ孝行とも義共我とも申べし。御説をそむくにあらねども。御奉公は御免あれと理をたしはかりなくこそ申ける。義經しごくましく。然らば汝に劣らぬ武士をたのんでえさせよ。志田承り。こゝに出羽のなにかし佐藤庄司と申ものゝせがれ。次信忠信兄弟の内一人頼むとのたまは。よも違背はひまじと。言上すれば御大將。其義ならば軍兵を龜井片岡武藏につけて先へうたせ。佐藤が館の案内には汝を誘引すべしとて。二手にわくるはたの手に。鎧のしきにははせて弓馬の花。こそ。三重さかりなれさる程に。佐藤兵衛忠信は此事を聞くよりも。うれしや義經の御供し西國におもむき。高名せんと勇め共。兄弟の内一人とあるからは。兄の次信は供をのぞみ。よも某は上すじ。あゝくつきやうの分別あり。せひ某が上らんと志田が。いはりに案内し。四郎兵衛忠信お見まひやといひ入る。妹のはや姫立出で。兄上は義經公の御供し其かたへといふ。忠信小聲になり。いや三郎殿に用はなし。は身にないせうをしらせす事のあり。承れば兄次信とは人しれず夫婦のかたらひ淺からぬ中と聞てある。何とさうかといへば。はや姫顔をあかめ。は存じの上はつゝみずさんやうもなし。はや七月の身もおもし。して此事が顯れしか。いやくさやうの義ではなし。義經公より兄弟の内一人具せらるべきとの仰につき。兄次信いくさの供を望まると。あかぬ別れば武士の道ともおぼさんが。弟の口から兄の悪性にくさ事ながら。こゝをよつく聞き給へ。次信上方へのばりなば國へは討死と偽り。

京女のめかけをこしらへ軍は半ぶん色あそびと。家來信夫の小太郎に談合有りしをたしかに聞く。しかれば二世の契すてられ給はん笑止さに。そつとないせうをしらせす。こゝは平にとめ給へ軍の供には弟のやく。ふせうながらはて某が參らふ迄とまがほになつてを語りける。女心のはや姫涙も胸にたもちかねよくぞお知らせ忝なや。さやうの事を聞くからは絶りても引とめ。西國へやりはせじ。何とぞ次信殿にあはせてたべと。なきければ。然らば某逢せさん。何かなしに取付てめつたむしやうに泣き給は。岩木をわけぬ次信思ひとまるは必定ぞ。たゞ泣きたまへ。とつれて宿所に。三重歸りけりかくとは知らず。三郎兵衛次信氏神の社にまうで。幣奉りらひは。源氏の大將出陣。願はくは某を御供に具せられ。神力を以て高名し。ほまれを残すくもの上。南無やむらさき明神とかなん砕くゆふだすき。ゆうにやさしき女の聲。瑞籬の内より次信さま。と呼かくる。はつと驚き何者といへば。立出で袖をひかへ。いややお氣遣なものではなし。わらは。當社の神職行春が娘。幾代とすものなるが。は舎弟忠信さまと。忍びあひにあひ惚のしんぞいとしさかはいさは。命もいそのかみをこえ。山を隔て、西國へ。義經さまの御供を。望み給ふと承る。上方は色所心元なう思はれて。耻をいはねば理がたす。嫉妬ふかきは生れつき。兄はさまの意見にてとめましてたまはらば。今生後生の慈悲と手を合せてぞ。なげきける。次信おりにさいはひと。お。道理。さりながら忠信血氣さかんにて兄が意見は聞入れず。は身すがりてかさくとき只管泣てとめ給へ。たゞ泣き給へ。と。教ゆる處へ忠信はや姫來りしが。あれこそ兄上弟よと。二人の女をめんく。に隠し置き。やあ兄じや人。ふ。忠信かど。互に知らぬ挨拶はおかしくも又殊勝なり。暫くあつて次信。此度わが君西國の御供。兄弟の内一人とのほちやう某能り向つて高名すべき立願に。參詣せし折から汝は何とて來りしぞ。忠信聞ていや。此度は某は供

中へし。惣領の身が討死せば。誰が家をつぎやさん。惣じて國を守るは上たる役。一騎武者の働は下たるもの、役なれば。せひ忠信が供とぞやける。次信聞きもあへず。おこが詞も一理あり。さりながら其方は若き者なればさねかたまたらず武者なれず。はれ軍勢東なし國に残て父母につかへよ。こんどは次信向はふすといへば。忠信氣色をそんじ。秋の木の實などにこそさねかたまるといふ事あれ。若き者にてはれ軍がなるまいとや。是勝負は老少によるべからず。兄とは生れ給へどもはれ軍はあふなもの。只某を上せられよとあざ笑ふてこそやける。次信腹にすへかね。はれ軍あふなしとは。扱は某臆病すべき者と思ふか。お、臆病は目の前よ次信のよ、腹を立て。臆病者の弟なれば汝はなほもおくびやうならん。なふ耻しけれと此忠信は臆病すべきはだしなし。貴殿は國に絆され扱こそ臆し給ふらめ。やいさ狼狽者。國に心がひかれんとは。わが親は汝も親。もつては同じ道理よ。なふ兄じや人おやに親はかはらねど。此忠信は志田の三郎が妹。はや姫といふ絆もたぬといふ。次信はつと思へども。さあらぬ顔にて。ふ、それは誰が事身に覚えなしといへば。忠信ふつと吹出し。必定覚えはぬかと。姫の手を引いてける時。次信立て逃んとす。はや姫すがり引とやむ。忠信悦びそりやそこが泣き所。なけくといよばはれば。西國へはなふやりませぬとぞ泣き給ふ。次信せきめんしながら。いくよくと呼びければ。するくぞ走出で。忠信様わらはを捨て西國へ行んとは。お心も變りしか。どうでもやらぬと繩り付。次信そりやそこが泣き所。はや姫泣け幾代泣けど。兄弟顔に袖覆ひ。花にうぐひすほどとぎす。一度にもつ姿かやたなけくぞばかりなり。かゝる處へ父の庄司。君を供奉し志田も共來らる。兄弟驚き二人の女を隠さんとす。あゝしばらく苦しからずと押とやめ。庄司やされけるは。やれ子供よ。君を供仕り是まで來る事餘の儀でなし。兄弟の内一人頼みたきこの仰をかうふる。弓矢の翼加庄司が老の

悦びなり。兄か弟か何れ功なるを參らせんと思ふ所に。兄弟義を重んじて争ふ心底。庄司が子供は功の者。お、頼母し、くとうれし涙を。ながさる。扱汝等は忍び妻をもつたるとや。情に迷ふはよき兵のくせぞかし。二人の女郎嫁に取り。子供と思ひなぐさまば。庄司は老の樂みあり。此上は兄弟共には供やせとありければ。次信忠信悦びていさむ心のゆゝしさよ。庄司重ねてやさるは。彼等兄弟心は剛にて弓矢かきおひ打物取。馬引よせて打乗て敵に向ふその時は千騎萬騎にも劣らぬ者にていへ共。幼きより主を持たず。奉公の道を存せず我君へ任せ參らす。庄司が心を察し有て。は目をかけて召使はれ下さるべし引廻してたへ明輩達。扱汝等も今が親子の別れなり。父が教訓を保つて君に不忠任るな。今日よりしては庄司を親と思ふなよ。親にも主にも君一人。一命を奉り。身はなき物と心得て。よき敵と見るならば押並べてむすと組み。首取て名を上げよ。仁義を知らぬは猪武者。兄は弟を介抱し。弟は兄に背くなよ引とも兄弟つれて引け駈くとも兄弟つれて駈けよ。兄をうたせて。國元の父や母が戀しひとて。弟一人歸らふと思ふな。弟を討せて兄歸るな。老たる親さへ思ひ切る。今を盛りの若武者共。心を残すな。けふの門出を末期ときはめ。潔よく討死せば。生て親子の對面より。猶しも嬉しかるべきと。すいしげには勇むれども。さすが老後の親子のわかれ。さへさる涙せきあへず。かくいふは不憫な故。花のやうなる若者を。死ぬとはさらに思はぬぞ。は前をも打わすれ。兄弟にすがり付しはし。きえ入り泣きおたり。は大將を始めとし。有あふ諸武士一同に袖を絞らぬ者はなし。然る所へ入問郡の武者所。安西の彈正太郎氏繁。あはたしく馳參じ。扱も平家の一門君は發向のよし傳へ聞き。四國八島にたてこもり。軍の用意真最中と承りひ。へんしも早くは出陣然るべくいと大急ついでやける。判官聞召。お、尤さぞあらん。去ながら幾萬騎こもるとも物の數とは思はぬなり。如何に彈正是なる者は佐藤庄司

子息。三郎兵衛次信。四郎兵衛忠信といふ兄弟なり。けうこう心を合せ。此度の合戦いさぎよく勵むべしと懇ろに述べたまへば。彈正承り。扱は聞及びし兄弟にてましますよな。誠に器量とや天晴お侍ひされば。軍は勢の多少によらず。只一心のはげみ第一とかやや。貴殿達は未だ不軍にて此度が初めならん。かまへて不覺はし取り給ふな。さあれば君迄の耻辱ぞと人もなげにぞやける。兄弟むつとせき上しが。押しづめ。いかにもくは仰の如く我々兄弟はついに軍とやらんは如何やうに働きもかつて存せす。しかしながら貴殿の指圖を以て随分勵みやべし若し又軍の次第により先掛生捕分捕高名は仕り勝にては間。必ずは氣にかけられなとおこがましくこそやける。彈正氣色をそんじやあ兄弟。まさんより。只我下地に任せられ。命大事にせられよかし。あしき意見はやさぬと嘲笑ふてこそやける。兄弟今は地りかねおこの上は何が扱は邊の下知にまかすべし。出陣の陣出なれば兵法稽古仕り。傳授にあづからんいざ参りさふと太刀に手をかけ詰かくる。彈正も飛びしさり。刀を抜んとしける時。志田中へ割て入り是々此稽古某貫ひやさん。最前よりの詰開き皆君を大切に思はるゝゆゑにてあり。侍たるものはさ程の人ならでは戰場へは出でがたし。お頼母しと。わざと座輿に取なしてとゆゑな。く鎖めしは誠に文武の侍なり。判官は覽じ志田が了簡一々以て至極せりいかに双方のものども。かまへて意趣を残すべからず。此度の出陣は義經が一生のはれ軍ぞ。ずるぶん勵めめんくと勇みにいさんでそれよりも。西國として發向ある門出めでたし千秋樂。目出たかり共なかくやばかりはなかりけり

第 二

さるは。九郎判官義經。頼朝卿の代官を蒙り一の谷を攻め破り八島に陣をめぐされける。奥州勢の彈正太郎氏繁は。佐藤兄弟に意趣ある中。我手の者を役所に集め。扱も此度源氏の勢。我等を始め大名小名歴々多き其上に。何を不足に佐藤兄弟召出され。こゝにては次信彼處にては忠信と人もなげなる侍だて大將も目があかず。見聞くも無念千萬なり。何卒ひつけ耻辱をせよとせ。小言吐かば打殺せ。彼奴等一騎當千と頼みある上に。要ざる忠を勵み犬骨折て鷹にとられな。軍せんより佐藤兄弟討てとれど。濱邊をさして下りしは法に背きし。キホヒ三重ふるまひなり。げに思ひても。思ふにあかぬ親子の中。いたはしや佐藤庄司。次信は小櫻織。忠信は藤蠅目の鎧をつねく好みして。俄かにおごさせ。信夫の小太郎同小二郎兄弟に取持せ。二人が方へおくらるゝ親の心ぞあはれなる。鼉と共にたつか弓。八島の磯に着きけるが。陣所くを見渡せば。竹束亂杭焚きすてし。所々のかゝり火も。夜は燃え盡は消えつゝうす煙。鹽屋の煙立ついき。方二三里が其間。逆茂木さびしく引たれば。佐藤殿の陣所は。いづくの間はんたよりさへ。浪打際に来る人を。蚤かと思ればさもなく。十六七の小童の。腰にさびたる山刀。さすが品よく大人びて。姉とおぼしき振袖に。持も似合ぬあきなひやわらんち賣にはをしかりし。信夫兄弟是子供。草鞋買はんといへば。いや是は武者草鞋。旅人の用にはたすといふ。ふ。陣所にあきなひするからは。あれに見えたる陣屋く。誰々と知つらん。概畧語つてきかせよかし。やすき間の仕事なり。毎日商賣致す故に陣所役所は存じたり。教へやさん聞き給へと。東西南北指さして。ねんごろにこそ語りけれ

やきごう

あれ／＼東の尾上より、南の岡の小松原、雪の山かどひた白の幕を其儘ふもと川、空堀はつて高橋、風にうづまく白旗の、かげに軍兵肥をならへ、鎧の袖をつらねしは、大將の佐本陣、其旗本に打頼き、たさぎ、抱稻花うづば、浪に鬼のしるしこそ、龜井片岡伊勢駿河、獨結に輪賣付たるは、常陸坊海尊、兼房は右ごもる、一つ巴三つ巴、五つ輪違六つ雁金、七つ道具を立たるは、大將の膝元さらす、武藏坊辨慶の役所とこそは教へけれ、前はさかもぎ縄々として、せいろう高くあげさせ、用心殿しき勢ひは先手の大將佐々木殿、扱竹垣に折木戸打ち、幟ばかりを立てたるは、旗本の母衣大將熊谷殿、の陣所なり、川越が物見の小屋、松にかけたる、太鼓鐘、あけゆくどこを驚かす雪に朝日のしるしこそ、いくさ大將島山、手勢は五千餘騎とかや、扱一重菱いれこ菱、花菱松皮三蓋菱小笠原の一黨なり、二つ引の大森は平山の陣所、おもだかは小山の類立波は小栗黨、北條は後備へ、右陣左陣は土肥三浦開き扇の旗を靡かせ、騎馬の武者二三十、用心と呼はつて役所／＼を駈通るは、佐竹の某小屋めぐり、濱の手は鎌倉勢、扱山の手は都勢、かい楯もち楯めんごりばに築ならべ、徒武者騎馬武者弓弦をしめし、すはといはん聲の内、駈出でん氣色にて君を守護し給ひける、誠に由々しうひひし、頃は彌生の空ながら秋にさえたる月に星千葉の介の役所なり、しげめゆひは結城の七郎、龜甲は佐原の十郎、三本扇鱗形、風にもまれて上り藤、又下り藤揚羽の蝶武藏勢相模勢一二のそなへど聞えける、扱奥方の軍兵は、十萬餘騎を二手に分け陣所は大手搦手、中に立たる旗の紋、雪折れ竹に群雀出羽の庄司が、「二人の子佐藤次信忠信は、日本無双のつはものと敵も味方も隠れなし、其外浦々山々も皆白妙に白鷺のむれゐる松見れば、源氏の旗を靡かする、多勢は限り知られずと残らず教へ語りけり、信夫兄弟手を拍てさてもよく覺えたり我々は佐藤殿の下人、父御の方より兄弟へ此鎧を參らせらる、とてもものに案内して呉れぬかとい

へば、娘悦ぶ色見えて、は案内も致すべし、扱なれ／＼しうひへ共、我々は此あたりの狩人、鷲尾と申もの、子供なるが、源平の兵亂にて獵もかなはず、親を養ふいとなみにならぬ草鞋賣りひ、あはれ殿様へは奉公せさせてたべと、いひもあへぬに信夫兄弟、是は幸戰場には一人も便りぞや、吉左右／＼我々に任せよ、よき奉に肝煎らんと連れて陣所に、三重急ぎけり明れば三月十八日、大將軍の服裝、赤地の錦の直垂、紫裾濃の着着長、鎧ふんばり鞍蓋につゝ立あがり、一院のほつかひ、檢非違使五位の尉、源の義經と高らかに名乗て寄せくる平家の兵船を今や／＼と待給ふ、佐藤兵衛次信は父が贈りし小櫻緘、わたがみたかに着流し、今朝まで着せし鎧をば鷲尾に打きせて、馬を乗り捨て馬の前に畏る、大將御覽じかれは如何にかう人か、いや是は次信が弟にてひ、は馬の前にて討死させせよさん爲め召連れひとせせば、判官重ねて、次信が弟は忠信ばかりと覺ゆしに、心得難しとのたまへば、次信謹んでさんひ、彼は此邊の狩人鷲尾の三郎と申もの、人と生れし思ひ出に侍に交はりたきよし、彼が姉達て嘆きひ故、色しらぬあづまるびすの次信め、心ざしにほだされ兄弟の約諾仕てひ、あはれは馬の口に召付られひは、有がたくひはんと申上れば、義經殆んど悦喜あり、天晴器量の若者、次信は果報者あやかりたし、いかにも某召使ひ弓取となすべきが、とても事の序なれば、姉はさうぞなるまいかと、戯れ給へば、鷲尾は鎧の袖を顔にあて、耻かしさふなる武者振に敵も太刀をばすてぬべし、安西の彈正太郎後陣よりつゝと出で、次信殿の舎弟お近付になりやさん、やあ是は此なる陣屋にて草鞋賣りたる童なるが、是が貴殿の舎弟か、はてよい弟をもたれたり、向後我等も得意となり、草鞋あつらへ申べし、軍中に用ふるからは、百里も二百里も歩まる、よき草鞋がもとめたし値にはかまはず、朋輩の中なれば五せん三せんは、たゞも取らせて遣ふはとさも悪體にぞやける、次信はむつとせきあげしが、おやすい事

去ながら百里二百里穿く草鞋何の用に入り申。ふ、合點たり。億病風に寒氣立。大敵に迫立ち本國へ一飛びに逃げ行くための草鞋か。お、やすし事といへば。彈正重ねて是さ何にもせよ。我腰は人に變て逞し。是に合せて作つてくれと。土足を次信が膝元に踏出す。次信太刀に手をかけ。ほ、見事なだんびら臙。此足にて逃げたらば天竺までも一飛びならん。やうらう骨切取て形に合せて作らせんと。太刀を抜けば彈正も飛びしやつてすばと抜く。土肥佐々木島山。辨慶なんご左右にすがり。是は不吉と鎮むれども。放せくおねぢあふ所に。平家の兵船こぎつれて関の聲をぞ。三重あげにける其ひまに同士いくさも。やうくおさめ鎮まりぬ。三人乗たる小船磯近く漕寄せ。大將船端に立上り。一品式部卿。葛原の親王九代の後胤。能登の守教經。源氏の大将義經に見參のしるしに小兵ながら中挿を參らせん。受けては覽ひへと大音上てぞやさる。判官陣に駒かけすへ。お、ものくし。能登殿の弓勢關東までもかくれなし。たなかに受留て。九郎か鐘のさね試したふ存するなり。この程が所望さふと胸を叩いてのたまへば。すはや源平兩大将。安否はこぞ敵味方。片唾を呑んで見る所に。小櫻織に鹿毛の駒。味方の陣を一字に乘分けて。矢面に驅塞がり抑も是は出羽の庄司が惣領。佐藤三郎兵衛次信とは我事なり。本國を出しより露命は君に奉り。屍は八島の魚口に與ふ能登殿の大矢を某試み仕り。閻魔の帳の巻頭に訴へん。矢壺は君と同然と弦ばしりを三度なで。につこ笑ふて待かけしは眼を驚す有様なり。教經は仁ある大将。感じて流石放ち得ず。菊王しきつて嘆むれば。又げにもと思はれけん。五人張に十五束。からりとつがひ引しは。暫しかためてゑいやつと切て放せば。あやまたず次信が胸板に。はぶくらせめて發矢と中り。血煙がばつとたつ。次信弓矢打つがひ。たうの矢を放さん釋んと。二三度四五度しけれ共。魂くらみ息もきれ。左手の鐙蹴放て右手へかつばと落ちけるは無慘なりけ

る次第なり。菊王は首取らんとおりのたつ所に忠信遙に放つ矢が。左の膝にすはと立ち。どうと伏すを能登の守。舟より飛びおり菊王が。上帶掴んで船底へ投入れ給へば大力に打付られ。微塵に碎けて死してんげり。是を見て平家の軍兵。舟を乗捨て我先にと。陸へさつと打ち上る。兄次信が孝養と忠信真先かければ。鷲尾三郎信夫兄弟彼等についで。源氏の兵驅ちがへ入ちがへ揉にもふぞ。三軍たかひける軍なかばに。武藏坊辨慶は。首二十珠數つなぎにして引すり來り。討れし者の追善に首珠數を思ひ立。今少し足らざれば奉加に入て給はれと。長刀取のべ切てかれば。寄手はさつと引たりける。あゝ吝しい事。後生に何が惜いぞと。逃ぐる敵を追ひ廻し。ねち首打首胴ぎり筒拔。群たる松を縦横に。おつ返しおひ戻し。討たてく斬り廻るは凄じかりし。三重いきはひなり浪に漂ひ失せしもあり。人馬にせかれて死するもあり。かなはじと平家の勢。飛乗りく舟は沖。陸は陣所へさつとひく。辨慶は立歸り。討取る首を繋ぎそえく。お、是でこそ珠數一連。百八煩惱つくらんより。後生が大事南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と念佛し本陣さして歸りける。天晴れ章駄天婆羅門天。鐘植大臣獅子王の。あれたる姿もかくやらんと皆感せぬ。ものこそなかりけれ

茅 三

かくてその下。夕霞八島の浦の松くらく。群あるかもめ立騒ぎ。と渡る舟の梶の音。しんくとして物淋し。関の聲も矢叫びも磯打つ浪に引かへて。移りかはれる境界は。明日の身の上思はせし。哀れもよほす沖津風。磯山櫻かつ散るも。心を碎きたねとなり。いとものすこさ浦曲かな。次信が忠勤義經感じ思召今一度對面せばや。尋ね來れと忠信仰を蒙りて。信夫兄弟左右に具し泣くくは陣を出でける

か。いざ立わかれ尋ねんと。鹽屋の辻より主従は三方へこそは。三重わかれけれ。また宵闇の潮ぐもり。浦さび渡る春の夜は。心ぞ秋の夕なるに。すさきの堂の西東。むれ高松の北南。奥州の佐藤殿やおはするか。次信殿やおはするかや。君よりの証にて。弟の忠信が。むかひに來りしと。静によふで通れども。應ふるものこそなりけれ。今朝は兄弟つれたりしに。今宵始めてひとり行く。八島の浪の音までも。昨日に變る心してなふ次信殿兄上と。呼んとすれを聲たす。峰にひくは松のかせ。菅屋の方にかすかなる。手負の聲の聞ゆるを。嬉しやそれかき走り寄れば。むれて友呼ぶつま千鳥。ばつと立ては亂れ行く。後の山に聲するは。信夫がよばふこたまにて。次信も佐藤とも。應ふる者はなかりけり。今は力もつき弓の。ある甲斐なさに駆けめぐり。なふ兄上はおはせぬか。次信殿やおはするかと。聲をはかりに呼立て。又伏沈み嘆きけり。むざんやな次信は。精兵に灸所を射られ。大事の負傷といひながら死にもやらず。片割舟の片蔭にたゞよひ伏してゐたりしが。弟の聲と聞かると。やうくして這出で。忠信かと聞くも嬉しく走り寄り。未だ存命ましますかと。縋りついて抱き起し。額をおさへば傷はいかにと問ひければ。今をかぎりの次信は。わが身の事はさて置て。君はいかゞ渡らせ給ふぞや。は身は傷をも負はざるか。味方は何程討れしぞと。絶えゆく息の下にさへ。弓矢取る身の一言と傳へ。さくだに哀れなり。忠信涙をおさへ。君も我等も恙なく。軍は味方の勝利なり。は供せとの仰なり。且し參らせんといひければ。お、嬉し。最期に君を拜しは前にて死すべきぞ。つれて參れといふ所へ。信夫兄弟駈來り。兎かうしつらひすさきの堂の破れ戸に。次信を抱きのせ。前を忠信後は信夫が昇ぞへて。涙にしはれ。たゞくで行くや。東の。中三重山の端に。月はのんくと。出でにけり。鷲尾の三郎は。次信が志血をこそ分けね兄弟と結ぶゆかりの草のえん。死骸を取置き首を敵に渡さじと。せき來る

涙もものゝふの。八島を尋ねめぐりしが。面は血に染み俯伏しに。伏したる負傷のありけるを。是やはと能く見れば。兜の鐵草すりまで散り積りたるさくら花。鎧の糸を埋みたり。涙に曇るおぼる月。小櫻おとしと心得て。是こそは次信殿と抱きついてぞ。歎きしが。此世ならぬ厚恩。最期のお供と存すれども。高名もせず相果てば。世の人口もひへば。よき敵と討死し。やがて追付奉らん。今よりは君なくて。誰にか見せん我姿と。指副抜いて前髪切り。口おし割てふくませ。二世の契りのしるしぞと又さめく。泣居たり。かくとも知らで彈正太郎。次信を殺し憐愍を晴さんと。夜半に紛れてありしが。この體をさつと見てやあ鷲尾か。君よりの証には。次信深傷を負ふたるよし。敵に首をとられ見ぐるしき死をさせんより。腹切せ首討て參れとの事なり。そこ立退げと太刀ふり上る。鷲尾手負に立おはひ。あゝしばらく。ふかで負ふたらば看病せよとこそあるべけれ。腹を切せよとは心得ず。殊に忠信某をさし置き。遺恨深き貴殿に仰付られんやうなし。死骸は我を片付けずといへば。扱は証を輕んずるか。いやさ何にもせよ次信が首は邊には討せぬと云ふ。ゑゝわつばめ小癩者と打て掛るを受け、れども。さんぐにおつ立。走り返つて首打取り。行方知らずなりにけり。鷲尾ついで立かへり。南無三寶。敵にさへ取らせぬ首味方に取りられし口惜さよせめて屍骸を葬らんと。引起せばは如何に。鎧に付たる櫻花。ばつと散て小櫻と見へしはもとの深山木や。黒草絨の鎧なり。袖章をちぎつて見れば。能登殿の郎黨。筑紫の孫六安國とするせり。ふゝさては次信殿にてなかりしな。まづ嬉れしとさして行く鹽屋のか。たへぞ。三重。急ぎける既に夜半の時も過ぎ。は本陣には義經諸大名列坐あり。次信が噂のみ如何なりけるふびんやと。大將心を惱し給ふ。所へ佐藤次信を召具せしと言上すれば。それ此方へと寄せさせ給ひ。は膝を枕とせさせ。扱もくふびんのものゝ有様や。いかに次信。おことは義經が命

に代り最早死せしと思ひしに、生顔見たる嬉しさよ、心に懸る事はなきか。國元へいふ事あらば何事なりとも申おけ。諸侍は多けれど、親も子も某を、父の庄司が頼みし故、義経もけふまでは、命を二つ持たりしが、只今汝に別れん事の便なさまとは落涙ぞ、ありがたき、稍あつて次信眼を開き、名残惜しげに顔を見上げ見下し、涙を流し、忝しといふ聲も、しごるにもつれかすかなり、忠信涙にくれて居たりしが、手負に力をつけん爲、ゑ言ひ甲斐なし次信殿、權五郎景正は鳥の海に眼を射られ、七日がうちにたうの矢を射かへしと承る、それ程にこそあらずとも、なごや前にて返答は宣はぬぞ、忝くも枕元は相傳の我が君、ゆんでは秩父めては和田、土肥佐々木武藏坊、かう申すは弟の忠信にていざ聲をあらげ、言ひければ、次信は枕をもたげ、何條其景正に劣るべきにあらねども、三國にかくれなき、能登の守の大矢を只中に受けとめて、次信なればこそ物をばやせ、敵味方の目を醒し、しかも我君のほ膝にて死する次信が、何に心がひかされて、いふべき事のあるべきぞや、は凱陣のほ供して、奥州に下向せば、次信こそは我が君のほ用に立ち、源平の目を驚かし死したれば、雪折竹のさかさまの世をば嘆かせ、給ふなと、随分孝行つくせよと、かたみは日頃かき置いて、守袋に残せしぞや、やれ忠信、男は貴きも卑きも、若きとて人ゆるさず、短氣に未練の初めと知れ、君に不忠存するな、朋輩遂に慮外をすな、野中のかげせ身をつくしも、ひとり立ぬ世の中ぞ、必ず人に憎まれな、やれ妻子をも常々は、ふつと思ひ切しかど、恩愛の捨がたさは、只今のなつかしさ、次信程の者なれど、かねて覺悟も最期には、變るものとは今ぞ知る、是もおこが手本のため、語り置くとばかりにて、絶入る眼の中より、涙をばらりと流し、いふべき事も是ばかり、暇やて我が君さま、是迄ぞ弟、秩父和田武藏殿はおはせぬか、忠信にめかけてたび給へ、南無や西方彌陀如來と、手を合せ目をふさぎ、をしかるべきは

年の程、三十三のまぼろしも、八島の磯の浪の泡、消えて果敢なくなりけり、忠信わつと取つければ、君を始め奉り、近習下部に至るまで、一度に是はと聲を上げをしみ、嘆くぞ道理なる、判官は涙の下より、捨果し身もながらへて、あればある世に如何なれば、をしまる、身は止まらぬ、いかなる縁にか主となり、いかなる者が家人となり、かゝる哀を見る事よ、父義朝は知らねども、兄鎌倉殿蒲殿に別るも斯くあらん、來世も必ず主従ぞと、忝くも次信が、死骸に總せ給ひければ、鬼を欺く辨慶も、むせかへり、聲もをします、嘆きける、かゝる所へ彈正太郎慌たしく駆け來り、すはは大事こそ出來いへ、鷲尾の三郎は次信に離れ、味方に力なき故に平家へちうしんと存い、其仔細は只今敵の忍びの者某討留ひ所に、却て某に敵對をいたし、既に太刀打に及びしを、兎角切抜け敵は討留ひと、以前の首を差出す、鷲尾續いて伺候すれば、人々一度にはらりと立ち、鷲尾を取廻す三郎少しも騒がず、あゝ是々騒ぎひな、全く左様にひはず、是安西、一疋の馬が狂へば千疋の馬を狂はずとはは邊が事よ、某を説するのみか、死したる敵の首取て忍びの者を討たるとはいかに彈正聞も敢へず、然らば汝は敵の首取る某に何とて討てかゝりしぞ、是二心の證據といへば、一座の人々鷲尾如何にとつめかけ、る、鷲尾涙をばらりと流し、申上るも悲しやな、情の兄の次信が、行衛を尋ね出るにぞ、心も亂れ散る花に埋れし鎧を次信が、小櫻鏡と目もくらみ、嘆き沈みしをりから、次信が首討てとの証なりとて、理不盡に切取て歸りひ、證據には其首の口を割て見給へ、鬘の髪のみべしと、申もあへぬに忠信、口押割て見てあれば、一總の黒髪あり、辨慶もの言はず突と立ち、安西がわだかみ掴んで、ゑ、畜生劣りの悪人、問答するも無益の沙汰と、木戸の外へかつはと投げ、あゝかまふな忠信、搦ふな鷲尾、まづ次信を辨慶が、引導してとらせんとやがて、ころもを着しける、義経をはじめ大名小名残りなく、死骸に手をかけ給ひ